

『宮城県芸術年鑑』

令和4年度

宮城県

はしがき

文化芸術は、人と人との交流の機会を創出し、私たちに楽しさや精神的なやすらぎをもたらすだけではなく、社会全体に活力を与えてくれるものであります。令和二年一月に国内で初の感染が確認されて以降、新型コロナウイルス感染症の感染拡大による活動の制限は、文化芸術活動の意義や必要性を再考したり、新たな活動の広がりを発見したりする転機につながり、文化芸術に触れる喜びや活動の楽しみが得られる日常の大切さを改めて感じたところです。

さて、本年鑑は、宮城県の文化芸術活動のより一層の活性化を図るため、一年間の活動内容等の記録をまとめ刊行しているもので、今回で五十二巻目となります。

令和四年度は、県において、「みやぎアート・プロジェクト」を実施し、プロの芸術家の方々が制作した動画作品を配信し、文化芸術活動の再開・継続を支援しました。また、「みやぎ県民文化創造の祭典」では、ワークショップやアウトリーチといった体験型事業のほか、「青少年育成総合事業」や「地域文化発信支援事業」を通じて、次世代を担う子どもたちに直に、文化芸術に触れる機会を提供しました。

このほか、宮城県美術館では、特別展「ポンペイ」や「ドレスデン国立古典絵画館所蔵フェルメールと17世紀オランダ絵画展」など、東北歴史博物館では、特別展「みちのくのサムライたち 東北武士の系譜」などを開催し、多くの皆様に展示をお楽しみいただくことができました。

また、昨年は、宮城県制百五十周年の節目を迎えたことから、本県の歴史や伝統、文化を県内外に発信するとともに、郷土への更なる愛着を醸成し、魅力あふれる地域づくりの契機となるよう、様々な記念事業に取り組んでまいりました。県といたしましては、先人達が積み重ねてきた志を胸に、地域の魅力にあふれ、元気で躍動する宮城を目指して引き続き様々な施策に取り組んでまいります。

結びに、本書の刊行に当たりまして、御執筆いただきました諸先生をはじめ、貴重な写真や資料を御提供いただきました関係者の皆様に対しまして、心から感謝申し上げます。

令和五年四月

宮城県知事 村 井 嘉 浩

芸術年鑑

もくじ

各ジャンルの動向

● 総論		足立 裕子	7
● 日本画		大泉佐代子	13
● 洋画		大嶋 貴明	21
● 彫刻		日下 育子	30
● 工芸		川北 京子	43
● 書		渋谷 青龍	52
● 写真		清水 有	61
● 文芸		玉田 尊英	73
● 音楽		小山 和彦	80
● 邦楽・芸能			

古典芸能		小塩さとみ	86
民俗芸能		小塩さとみ	89
三曲		宮澤 寒山	93
長唄		杵家弥登鈴	96
民謡		藤本 和夫	99
●演劇		鈴鴨 久善	102
●洋舞		高橋 厚子	110
●日舞		大須賀 豊	116
●茶道		児玉 宗睦	126
●華道		西村 一観	130
●メディア芸術		清水 建人	139

広域文化団体の文化活動記録

宮城県における文化行政の概要

〈おことわり〉 本文に掲載されている方の敬称は原則として省略しています。

各ジャンルの動向

総論

【総論】

新型コロナウイルスのパンデミックにより中止や順延を余儀なくされた企画展や各種公演が、令和四年春から三年ぶりに次々と再開された。文化活動が不要不急とされ、発表の場を失っていた表現者たちの思いが一気に溢れ出たような勢いがあった。コロナ禍にインターネットを介した作品展も増えたが、鑑賞者側にとっても生の芸術に触れ、心を揺さぶられる喜びを改めてかみしめた年になった。また、ロシアによるウクライナ侵攻を受け、平和や精神の独立、表現の自由を希求する美術展やコンサートも多数開催され、閉塞感が漂う社会の中で芸術文化が果たす意義を再認識する機会にもなった。

一方で、三月に最大震度六強の地震に見舞われた文化施設が臨時休館し、展覧会や公演が一部中止や延期になった。東京エレクトロンホール宮城（青葉区）や宮城県美術館（同）、仙台銀行ホールイズミティ21（泉区）など、開館から三十五年以上経過したホールや展示室の天井落下といった被害が目立った。東日本大震災以降も大きな地震が相次ぐ中、老朽化した文化施設が耐震、長寿命化のための改修や建て替え期を

迎えている。

各分野に目を向けると、コロナ禍の影響で応募者が減った展覧会がある中、五月に三年ぶりに開かれた東北最大の公募展「第八十三回河北美術展」には、前回より三十六点多い八百二十六点の応募があった。制作時間や場所が限られる若い世代の挑戦を促そうと、日本画・洋画部門に小品枠を新設して出品者の裾野を広げた。

五、六月にあった第八回仙台国際音楽コンクールには、四十一の国・地域から過去最多の五百七十三人が応募した。海外ではロシアの音楽や出場者を排除する動きもあったが、三人のロシア人が出場し、音楽が共に生きる人々の心をつなぐ力があることを示した。

文芸の分野でもニュースがあった。仙台市出身・在住の小説家、佐藤厚志さんが東日本大震災の被災者の日常をリアルな筆致で描いた「荒地の家族」が、十二月に第百六十八回芥川賞候補作にノミネートされた。家族の死や不和など、苦難を抱え葛藤しながらも懸命に災後を生きる生活者の感情や被災地に流れる空気を丁寧な拾い上げ、地元宮城の人々の共感

を呼んだ。同賞は令和三年に石沢麻依さん（仙台市生まれ、ドイツ在住）が受賞している。震災直後は短歌や俳句など主に短詩型文学を通じて表現された心象が、十一年余の歳月を経て内省を深め、相次ぎ文学作品として立ち現れてきたと言える。

以下、各分野の本年度の活動の概略を述べる。

【美術】

コロナ禍の沈静化傾向に伴い、美術活動の回復が進んだ。宮城県美術館（青葉区）で十ヶ月に開かれた「ドレスデン国立古典絵画館所蔵 フェルメールと17世紀オランダ絵画展」では、ヨハネス・フェルメール「窓辺で手紙を読む女」が公開された。修復に伴ってキューピッドの画中画が現れ、世界的に話題を集めた初期の傑作で、本国ドイツ以外では日本が初公開だった。フェルメールの作品が来県したのは平成二十三年以来。コロナ流行後の美術展で最多の約六万九千人が来場した。

コロナ禍で二年続けて中止となった第八十三回河北美術展は五月、三年ぶりに再開された。会場がTFUギャラリイミニモリ（宮城野区）一か所になり、会期も七日間と短かったが、約六千人が来場した。無鑑査の公募展「せんだい21 アンデパンダン展2022」は九月十月、過去最多の二百三十六点

が集まり、仙台市内の八会場で開かれた。コロナ禍で二年続けて作品を動画配信したが、三年ぶりに完全対面方式で開催し、実際の作品を間近で見ることができた。

宮城県芸術祭は開幕が例年より二カ月前倒しになり、七月に開幕した。美術などの会場だったせんだいメディアテーク（青葉区）が八月十月に設備工事のため休館したことが原因。大型美術展会場がメディアテーク頼みになっている現状を浮き彫りにした。令和五年度から宮城県美術館が改修のため休館する予定で、県民ギャラリーが利用できなくなる。美術活動発表の場を巡る課題は当面続くことになる。

石巻市で開かれたリボン・アート・フェスティバル（RAFF）2021-22の本祭後期（令和四年八月十月）は延べ約十二万人が来場した。女川町も会場に加わっていた本祭前期（令和三年八月九月）と合わせた来場者は約二十二万人に上った。後期の作品の一つで、石巻南浜津波復興祈念公園内の伝承館のガラス面にフィルムを貼った絵画は、祈念公園の植樹活動に実際に参加したアーティストが創作した。他にも石巻市に滞在・制作した作家が増え、地域への浸透という点でエポックメイキングな展覧会となった。

東北の作家の発掘と紹介に力を入れる晩翠画廊（青葉区）は開廊二十五周年を迎え、年代やジャンルを超えた作家が企画展に作品を寄せた。芸術談義を交わす憩いの場として親し

まれる「カフェ&ギャラリーグレ」(同)が四十周年を迎えるなど、老舗画廊が存在感を示した。青葉区の仙台フォーラスにある創造スペース「even(イーブン)」も本格始動した。

【音楽】

新型コロナウイルスによる影響はだいぶ落ち着いてきた。定禅寺ストリートジャズフェスティバルは九月、仙台市中心街で三年ぶりに規模を縮小して開かれた。とっておきの音楽祭(六月)も三年ぶりの屋外開催となった。それでもコロナ流行の波によってイベントが中止に追いつまれるケースは相次いだ。さらに、三月に最大震度六強を観測した地震による被害で多くの施設が使用休止を余儀なくされるなど、音楽界が直面する困難は続いた。

三年に一度の祭典、仙台国際音楽コンクールは第八回となり、五、六月、日立システムズホール仙台(青葉区)を会場に開かれた。バイオリン、ピアノ両部門に計四十一の国、地域から過去最多の五百七十三人が応募し、六十八人が出場。コロナ禍に海外から参加者を受け入れて円滑な運営が実施できるかどうか不安もあったが、感染防止策を徹底し無事に乗り切った。バイオリン部門は十七歳の中野りなさんが過去最年少で制した。同部門の日本人優勝は第二回以来。ピアノ部門はルウオ・ジャチンさん(中国)が栄冠を勝ち取った。ロシ

アによるウクライナ侵攻の影響も懸念された。一部市民からは海外コンクールで行われたようにロシア人出場者の排除を求める声もあったが、運営側が政治と芸術を混同しなかったのは賢明な判断だった。

令和四年度は、仙台フィルハーモニー管弦楽団を五年間にわたり引っ張ってきた常任指揮者の飯守泰次郎さんと、指揮者の角田鋼亮さんの集大成の年度。九回の定期演奏会のうち、それぞれ三回、一回を担当し名演を聴かせた。令和五年度から常任指揮者となるレジデント・コンダクターの高関健さんらもタクトを振った。

同楽団と、創立五十周年を迎えた山形交響楽団の合同演奏会は七月、山形市のやまぎん県民ホールで開かれた。同時期に東京エレクトロンホール宮城(青葉区)で予定していた仙台公演は、三月の地震でホールが被災し中止となった。

宮城野区文化センターを会場とする室内楽シリーズ「ミュージック・フロム・パトナ」は九年目も、意欲的なプログラムによる四回の演奏会を実施。仙台銀行ホールイズミティ21(泉区)を会場とする演奏会シリーズ「イズミノオト」は、改修中のため別会場での出前コンサート等を実施した。

第十六回仙台クラシックフェスティバル(せんくら)は九月、仙台市内の二施設六会場で六十八公演が行われた。

仙台オペラ協会は、日立システムズホール仙台で九月、第

四十六回公演を行い、モーツァルトの歌劇「コジ・ファン・トゥッテ」を上演した。歌は原語のイタリア語、せりふは日本語を用い、音楽はオーケストラの代わりに電子オルガンとピアノ。オペラ公演の新しい形を模索した。

東日本大震災直後から心癒やす旋律を届ける活動が続けるのが「音楽の力による復興センター・東北」（仙台市）。被災した宮城・岩手・福島での公演が三月に千回を超えた。

加美町の中新田バツハホールでは二月、日本人が製作した弦楽器だけで演奏するコンサートがあった。製作家と演奏家をつなぐ試みで、バイオリン製作科を持つ同町の国立音楽院宮城キャンパスが主催した。

仙台市出身のフルート奏者、荒川洋さんが発案したバトン・バスコンサートが仙台で九月に始まった。出演者が次回コンサート出演者を指名していく趣向。長く続くことを期待したい。

NHK仙台少年少女合唱隊の指揮者などを務め、東北の合唱文化向上に貢献した宮城教育大名誉教授の大泉勉さんが、十二月に逝去した。

【文芸】

東日本大震災の津波被災地である亘理町を舞台にした仙台市の佐藤厚志さんの「荒地の家族」が、第百六十八回芥川賞

候補に選ばれた。平成二十九年のデビュー以来、一貫して宮城に視点を置いて創作に取り組んできた佐藤さん。震災から十年余りの日々を透徹したまなざしで捉え、地に足着けて生きる人々の苦悩と葛藤を描きだす飛躍作だった（令和五年一月、受賞決定）。

佐藤さんは第三回仙台短編文学賞の大賞受賞者でもあった。令和四年の第五回大賞は亘理町の大谷努さんの「道の奥には」に決まった。震災で妻を失ったトラック運転手が、やがて生と死、過去と現在を超越する境地にたどり着く。丹念な筆致の物語によって、震災の記憶を内外に発信した。

仙台短編文学賞は平成二十九年に民間有志の手で創設された。過去五回分の計二十四編の入賞作と選評をまとめた「仙台短編文学賞作品集2017↓2022」が刊行された。回を重ねるごとに全国的な認知を高める新進の地方文学賞の歩みをたどることができる。

令和三年に芥川賞を受賞した仙台市出身でドイツ在住の石沢麻依さんは、受賞第一作「月の三相」を出版した。肖像画ならぬ木彫の肖像面を作る風習があるという旧東独の街で、土地と個人の記憶が複雑に交錯する幻想小説。分かりやすさで読者におもねることのない、信念と美意識に貫かれた執筆姿勢を改めて印象付けた。

伊坂幸太郎さんは福島県の猪苗代湖畔で行われる音楽&

アートフェスティバル「オハラ☆ブレイク」に毎年寄せてきた連作短編をまとめた「マイクロスパイ・アンサンブル」を刊行した。過去作の「マリアビートル」では国際的な話題を呼んだ。「ブレット・トレイン」の題名で英訳され、権威ある英国推理作家協会賞翻訳小説部門にノミネート、さらにはブラッド・ピット主演のハリウッド映画にもなった。

熊谷達也さんはキャリア二十五年度で初めての本格SF長編「孤立宇宙」を発表、確かな科学知識に裏付けられた壮大な宇宙ロマンを描きだした。佐伯一麦さんの「Nさんの机では、愛惜する品々を介した味わい深い自叙伝的エッセーだった。

佐伯さんの前任の仙台文学館長で、同館の短歌講座の講師を長く務めた小池光さんは、第四十五回現代短歌大賞を受賞した。柴田町生まれで「短歌人」編集委員。歌集「サーベルと燕」をはじめ、過去の全業績を評価された。

佐藤通雅さんは第十二歌集に当たる「岸边」が第三十四回斎藤茂吉短歌文学賞に選ばれた。

名取市の浅川芳直さんは早世の俳人で知られる芝不器男を記念する第六回芝不器男俳句新人賞で、本賞に次ぐ奨励賞に決まった。

小中学生の詩を対象とする第六十三回晩翠わかば賞と晩翠あおば賞では、わかば賞に登米市上沼小三年千葉輝良さんの

「線こう花火」、あおば賞には仙台市八軒中二年鈴木朋花さんの「かき氷」が選ばれた。

宮城の作家がそれぞれの個性を発揮して織りなす文学世界は、令和四年もまた彩り豊かだった。

【演劇】

新型コロナウイルスの影響が徐々に薄らぎ、順延を余儀なくされていた作品も多くが上演にこぎ着けた。仙台市の「一般社団法人東北えびす」は八月、「リア王」を上演。仙台を拠点に活躍する俳優がそろい踏みし、仙台・宮城演劇界の現在地を示した。

地元演劇人有志でつくる「ファミリーツリー製作委員会」は六月、東日本大震災を背景に普遍的な喜怒哀楽を描いた「猫と縁側」を仙台市で上演した。大船渡市で舞台創作に取り組む「みんなのしるし合同会社」も十月、伝統芸能を軸に据えた「シシ」を上演するなど、地元俳優が持ち味を発揮。震災から十一年が過ぎ、災厄の教訓や心境の移ろいを伝える術を示した。

演劇ファンの土壤を広げる取り組みも活発化している。東北えびすが仙台市内の飲食店を舞台に令和二年から続ける朗読劇「仙臺まちなかシアター」は、七作を取り上げた。親子向けの番外編「小さな秋の演劇祭」も九、十月にあった。

宮城野区文化センターなどによる「みやぶんワンコインシアター」は十回を数え、地元に関連する多様な作品に焦点を当てる試みが新たな客層を切り開いた。

百を超す戯曲を残し、平成二十四年に死去した石川裕人さんゆかりの俳優による「演劇ユニット石川組」は、作品の再演に積極的に取り組み、「石川ワールド」固有の魅力を伝えた。

県南の児童劇団「AZZ9（アズナイン）ジュニア・アクターズ」は令和五年二月、結成三十周年記念公演を行った。OB・OGが客演やスタッフを担うなど、二市七町の広域行政を生かした持続的な取り組みが花開いている。

石巻市に八月、劇場型複合施設「シアターキネマテイカ」がオープン。空き店舗を改装した建物で演劇の多彩な催しが展開されている。運営する石巻劇場芸術協会は令和五年一、二月、東京の劇団による短編演劇プログラムを企画した。三月には地元高校の演劇部が初公演するなど、街中に演劇の新たな風が吹いた。

平成三十一年以来となる劇団四季のミュージカル「リトルマーメイド」の長期公演が、十一月から令和五年三月にかけて仙台市であり、延べ十三万人超が足を運んだ。

【宮城県芸術祭賞・芸術選奨】

第五十九回宮城県芸術祭（県芸術協会、県、仙台市、河北

新報社など主催）の最高賞・県芸術祭賞は、絵画の日本画が荒井静子さんの「序章」、洋画は中島みどりさんの「透明な秋に出会う頃」、工芸は古山文子さんの「海・空・光」、彫刻は姉齒公也さんの「なんとかなるー」、書道は鈴木霽月さんの「高青邱詩」、文芸は短歌の八田一夫さんの「ルーシ幻想」、写真には佐藤節子さんの「海岸に付着する波の華」がそれぞれ受賞した。

令和四年度の県芸術選奨は、美術は洋画の森眞澄さん、文芸は秋亜綺羅さんと石沢麻依さん、演劇は松崎太郎さんがそれぞれ選ばれた。新人賞は、美術が日本画の酒井美雪さん、彫刻の佐々瞬さん、写真のかんのさゆりさん、音楽は小野綾子さん、舞踊は阿部裕恵さん、メディア芸術はスズキスズヒロさんが受賞した。

足^あ立^{たち}裕^{ゆう}子^こ

（河北新報社生活文化部長）

日本画

令和四年に入り、ようやく新型コロナウイルスのワクチンが徹底され、感染の終息が期待できそうだ。だがホッとしたのも束の間、今度はロシアのウクライナ侵攻という驚きのニュースが世界に広がった。戦後生まれの私には、もう戦争が終わり平和な世の中になったと信じていたのに。ウクライナの町が次々爆撃され、多くの人々が亡くなっていくのをテレビのニュースで毎日見て、胸が裂けそうになり、しばらく絵が描けなくなった。早くこの戦争が終わることを切に祈るだけである。

〔第六回新日春展入選者〕

荒井静子「回歸」板橋千穂「Bitchin」奥山和子「陽だまりの中」桶谷光代「うけつぐ」小泉百合子「月下の夢」新藤圭一「宙」

〔第七十七回春の院展入選者〕

檜森勢津子「居場所」三浦長悦「遠き想い」山本政彰「靴音」
檜森勢津子・山本政彰は初入選である。今後の活躍が楽しみだ。



第77回春の院展 山本政彰「靴音」



第77回春の院展 檜森勢津子「居場所」

「能島浜江・能島千晴 日本画展」(三月三十日～四月五日
仙台三越)

この姉妹の父は、芸術協会絵画部日本画の名誉会員である
能島和明先生である。

日本画家祖父の能島康明氏、叔父の能島千明氏、叔母の安
藤瑠吏子氏・七宮牧子氏。驚く程日本画の世界に包まれたご
家族である。お二人の作品は、伸び伸びと自分の感じたまま
の感性で表現され、型にはまらず自分なりのストーリーにし
てイメージを描いており、猫の作品がたくさんあったが、ま
るで猫が画廊の中を自由に走りまわっているような雰囲気さ
え感じられた。お二人の今後の益々の活躍を期待したい。

「第八十三回河北美術展」(五月十一日～十七日 T F Uギヤ
ラリーミニモリ)

河北美術展はコロナ禍により令和元年の第八十二回展以来
三年ぶりの開催となった。日本画部門の審査は日本美術院の
小田野尚之氏。今年から洋画部門と共に「小品枠」を設け、
賞を増設する事となった。小田野先生は審査後、全体のレベ
ルが非常に高く驚き、若い人の作品には伸びしろを感じ、年
配の方々も感性が柔軟で固定観念に捉われない表現が多かつ
たと述べている。確かに私が出品していた三十年くらい前に
比べて優れた感性で、自由な発想で表現されていると感じた。

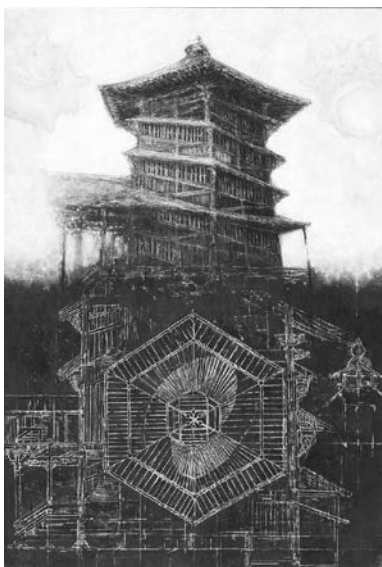
ただ、会場が少し狭く、ゆったりと見られない雰囲気では残念
な思いがした。

河北賞「夜明けの詩」山本政彰 宮城県知事賞「もう少し」
梅森さえ子 一力次郎賞「さざえ堂図 二」庄子幸一 一力一
夫賞(小品枠)「秋果」高橋哲子 東北放送賞「希望」石堂智
子 宮城県芸術協会賞「紡ぐ」櫻井伸子 東北電力賞「晩秋
の緋色」富樫清子 東北福祉大学賞「秘峡」和田正弘 新人
奨励賞「絡まる」千葉えつ子 審査員奨励賞「潜」荒井静子
奨励賞(小品枠)「ゆったり時の流れ」橋本道代

日本画の魅力とは一体なんなのだろう。日本画にある色の
深さ、余白に含まれる余韻・思索的なもの…。日本画で使う
岩絵具は一回では色が出ず、何回も何回も塗り重ね下から滲
み出るような味のある色を創り出す。そして画面の裏から響
きが聞こえてくる
ような絵が生まれ
る。そしてそれは、
自分自身を描くとい
うことである。
絵は自画像である
と思う。



河北賞 山本政彰「夜明けの詩」



一力次郎賞 庄子幸一「さざえ堂図 二」



宮城県知事賞 梅森さえ子「もう少し」



奨励賞（小品枠）橋本道代「ゆったり時の流れ」



一力一夫賞（小品枠）高橋哲子「秋果」

「群青の魅力 清沢孝之日本画展」(七月八日～二十五日 定禅寺通り阿部敬四郎ギャラリー)

作者は日本画の材料である岩絵具の中でも特に群青色に惹かれていて、天然の群青をじっくり焼いて深みのある色彩を求め描いていると言う。街を歩いていても見逃すような地下一階の小さなギャラリー。偶然、日本画展というのが目に入り降りてみた。作品のテーマは皆、小さき花・小さき野菜の一個や一本という、ささやかな絵である。何か物足りなさを感ずるが、花や野菜も人間と同じ。生命を感じ、存在感を主張する。何か社会で忘れがちなもの…それは愛か、美しさか、存在感か、感謝か…ふと考えさせられた。

「第五十九回宮城県芸術祭絵画展(公募の部)」(七月十六日～十九日 せんだいメディアアテーク)

日本画奨励賞「想・KESH」佐藤ゆき江「聖蓮」和田正弘 賞候補「ボタラ宮1988」ラサー 岩渕淳子

日本画の出品は三点と少ないが、どれも高く評価されている。

「第五十九回宮城県芸術祭絵画展(会員の部)」(七月二十三日～二十六日 せんだいメディアアテーク)

宮城県芸術祭賞「序章」荒井静子 宮城県知事賞「月の光り」

小泉百合子 仙台市長賞「静寂」仲野う多代 河北新報社賞

「朗朗」数本冨英佳 宮城県教育委員会教育長特別賞「夏閉い」

大槻勝美(公財) 仙台市市民文化事業団賞「杜の春」山本政彰(公財) カメイ社会教育振興財団賞「宇宙浮遊」桶谷光代

絵を描き始めるときには画題はすでにできていることが多い。自然の中に自分の心が一緒になるものを描くと思う。作品の内容と題名がどのようにつながっているかは大切なことである。それが分かりにくいもののがかなりあり、もっと分かりやすく、もっと自分自身を素直に表現していただきたいと感じた。そして年々会員が減るのが実に残念である。公募展でも日本画は三点のみ。日本画の活性化は悩ましい問題である。

「土と石で描く板絵 福井安紀日本画展」(八月二日～七日 晩翠画廊)

本来、和紙に描く日本画だが、土と石で描く板絵とは一体どういうものなのか興味を持ち画廊をのぞいてみた。なぜ和紙ではなく板にしたのか作者に聞いてみると、和紙だと白いのでバックの処理が悩ましい。その点、板だと何もしなくても本来の板そのものが持つ味がそのまま生かされ、あとは板に寄り添いながら好きな絵を描いていくという。そして、土と石を粉にして自家製絵具を作って仕上げるとのこと。ほか

にはふすま絵プロジェクトの主宰もしている。

「仙台アトリエクマガイ芸術学院企画 日本画家と子供たち展」(十月四日～九日 晩翠画廊)

熊谷融・理恵子氏の主宰する芸術学院の生徒さんたち(幼稚園児・小学生・中学生)とお二人の日本画の作品展。子供たちの自由でおおらかな楽しい作品がたくさん展示され、圧倒された。お二人の作品は箔を使った神秘的な作品が多く、是非この教室の子供たちから、将来日本画の魅力に気づき、県の日画への道につながればと願う。

「日本画緑彩会展」(十月二十五日～三十日 東北電力グリーンプラザギャラリー)

緑彩会は、昔から日本人が大切にしてきた自然や四季の変化の美しさを風景・人の暮らし、動物や植物をとおして描きたいという想いで出発しているが、これは主宰する新藤圭一氏自身の想いでもある。会場の作品には、日本画の画材である岩絵具を使い、毎日の生活の中にきらりと光る美しさを求めるといふ想いや、これを表現しようとする感動と喜びが響いていた。

「斉藤ミツ日本画展―八十路・旅・花・猫―」(十一月一日～六日 ギャラリーSen)

日本画の世界に入って身近なテーマを素直に表現され、人生を楽しまれている感じが好感を持てる。一緒に住む猫も幸せそうだ。



斉藤ミツ日本画展 「八十路・旅・花・猫」

「晩翠画廊・二十五周年記念企画」

四月の二十五周年感謝祭から始まり、六月には「25」にまつわる物語、十一月には25cm×25cmの世界と面白い企画があり、宮城県芸術協会日本画会員の多くが参加して盛り上げた。

「第七十五回塩竈市美術展」(十一月八日～十三日 ふれあいエスプ塩竈)

久しぶりの塩竈である。私が日本画の世界を知り、初めて展覧会に出品したのが塩竈市美術展だった。その時は、第二席で自画像を描いたものだ。鏡に向かって必死に描いていたことを思い出す。とても嬉しくて興奮したのを覚えていて。今回の美術展は、会場が複雑で大変だった。出品の内容はしっかりした作品が多かったが、数が少なく残念であった。その割には賞の数が多く、審査も大変だったと思われる。今後もっと出品者が増えることを期待する。

宮城県芸術協会の日本画も年々、高齢化と共に会員が増えず、悩ましい問題である。早く仙台にも美術大学ができることを祈る。

塩竈市美術展賞「華の宴」小泉百合子 塩竈市教育委員会
教育長賞「薄暮の定義山」山本政彰 杉村悼賞「暦」板橋孝子
塩竈市芸術文化協会長賞「クリスマスの頃」中間美佐子 塩竈
市生涯学習センター審議会委員長賞「追憶」高橋則子 塩竈市
議会議長賞「紅葉の瞬き」丹野あき子 NHK仙台放送局長賞
「慈しむ(ヒガシクロサイ)」郷家総一郎 杜の都信用金庫理事
長賞「かたわらの聴き手・秋」酒井美雪 日本画奨励賞「居久
根の里の名暮」畑山美沙「戦場ヶ原の夜明け」只浦徳子 招
待「浅春」新藤圭一「風がみる夢」橋本道代

「第三十回宮城シニア美術展」(十二月一日～四日 宮城県美術館)

日本画の部 最優秀賞「晩秋の旭光」阿部愛一郎 優秀賞「秋風」千葉笑子 奨励賞「春の日和」大場千代子「春の彩」佐藤文彦

出品が十四点と少なく淋しい感じだったが、自分が感じたままの素直な作品が多く好感が持てた。最優秀賞の「晩秋の旭光」は自然の風景の中、突然、林の向こうから光が差し込んだ驚きとその感動が見えてくる。自然と心を通わせるという得意技は、絵画の世界と俳句、和歌の世界かもしれない。優秀賞の「秋風」は水墨画でコスモスがまさに秋風に吹かれ漂う姿を捉え、とても美しい。秋の空気が素晴らしい。

「再興第百七回院展入選者」

檜森勢津子「成長点」初入選 三浦長悦「遠き想い」

「第九回日展入選者」

荒井静子「潜」奥山和子「つなぐ」日展会員 佐藤朱希「春
寄せの日」

「第五十九回宮城県芸術祭絵画展受賞者作品展」

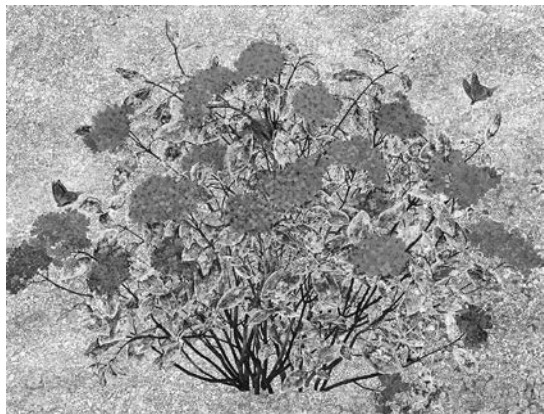
荒井静子、桶谷光代、小泉百合子、山本政彰、数本冨英佳、中野う多代。みな力のある人たちで迫力ある作品が揃い、見応えがあった。特に小泉百合子氏の人物はしつかりしている。山本政彰氏の細やかで丁寧な仕事には驚く。今後の活躍が楽しみな作家たちだ。



第9回日展 会員 佐藤朱希「春寄せの日」

「佐藤朱希日本画展」(十二月七日〜十三日 仙台三越)

三年振りの個展。日展出品作の大きいサイズのものからSMの小さいサイズのものまで三十二点。驚くべき絵画力である。彼女の描く女性性は眼の表情が優しく、手の形も柔らかく美しい。それが人物に添える花とバツクの箔とがうまく合致し、より深みを滲ませる。箔の使用も複雑で、単に貼るだけではなく、絵具を塗り重ね、また剥がす。それを何回も繰り返すという彼女



第59回宮城県芸術祭絵画展 宮城県芸術祭賞 荒井静子「序章」

独特の世界がある。これからも宮城県の日本画家の索引者として日本画を目指す人たちをたくさん育ててほしいと願う。



佐藤朱希日本画展 「花ある君」

依然としてロシア・ウクライナの戦争が続き、先が見えない。世界はエネルギー問題で混乱している。一方、新型コロナウイルスは、そろそろ終息に向かっている。しかし、このところ地球の気候が乱れ、あちこちで自然災害が起こり、冷害・水害と不安定だ。先の見えない世界の中、我々、絵を描く者は何を見つけ、何を感じるか。どのような時でも、生きていく限り私たちは表現できるはずだ。平和な世界を切に願う。

お
い
ず
み
大 泉 佐 代 子

(日本画家・宮城県芸術協会会員)

洋画

毎年、この小文の執筆時期になると、前年のメモや各メディアの記録を見返すことから始めるのだが、ここ数年、特に地方新聞紙を確認している時に脱力感があることをまず初めに書いておこう。

それは、そこに残されているほとんどがみんな楽しくやっている式の共同型あるいは参加型アート、でなければ、デコラティブな領域や表層的な手法の新奇性であったり、あるいはまちかど的な在り方をフックにしたアート活動の紹介ばかりで、他者の作品を体験する・見るという行為に基づいた「美術」の質への言及があいまいなことに対する、ため息交じりの脱力なのだ。(ここでは災害をテーマとした作品も、紋切り型に扱われる。)

脱領域的で、共同性や地域性はそれ自体否定されるべきものではないはずであるが、そのようなものであっても、多様に積み重なるクリティカルダイアログがイベントの期間ではなく、長(超)時間的に繰り広げられる公共圏があつてのことだ。現状は、メディアの果たすべき役割、紹介、記録、批評・論評・幅広い異見提出の半分も果たされていない。

メディア毎に役割や機能を分けているからではなく、公正さや正確性の機能的確認がなされ、社会性や地域性が確立しているはずの文字メディアの低調さはどうだろう。それは、社会的役割がなくなつたのではなく、ぬるさの中に公共性や公共圏成立を弱めている。

芸術分野では震災以降、メディアの三つの機能のバランスが崩れているようにみえるのは、ほくがおかしいのだろう。だが、「美術」にとって公共圏が成立していないのは、悪い時代なのかもしれない。

佐々木 健展 ッメナスレイヤーバルク (二月十五日〜十九日 仙台アーティストランプレイス)

今回の佐々木の発表は、近年の平面性と絵画性の関係に対する様々な試みが一通り終結して、基本的形式による作品の提示であつた。それは、可能な限り作品の構成要件が切り詰められ、純粹な、しかし絵画的な厚みを知覚させる、平面というよりは物体性をも強調するように提示されていた。そこ

では、支持体をストレッチャ―側面に回すことによってできる物理的な厚み、物体性と、色材に混入されたラメの粒子がメデュームの中に浮遊する、あるいは支持体自体が構造色としての性質を持つことでできるイリュージョニステックな厚みが両立し、特に暗色調の色のものはそれが強調されている。

これだけ純粋性が追及されているにもかかわらず多くの目にうつったのは、四つ角の折り返しにできる支持体の厚みによってできる小さな膨らみである。作品の中で、ここだけが全体的な形状を持つ物体としての厚さではなく、作品の構成要件の一つとしての支持体の物理的厚みとその材質を知覚させている。(側面は常に、絵画的な厚みや深度の方向と物自体の厚さの方向が違うことから、問題となる)おそらく、テクニクを変えて研ぎ出しのような技法で現在地にたどりついたなら、この障りは無くなり、作品はかつてのミニマルアートでいわれる、「スペシフィック・オブジェクト」に類比できるものになるのかもしれない。

佐々木は、その作家活動の最初期から、(サブ的な作品ではそこはかかない「不気味さ」の表象を使うことはあるが)、基本的には切り詰められた要素による抽象度の高い純粋な作品を追及してきた。それはまるで、表現される全ての表象が無効であるという虚無的な立場に立っているかのように思える。とすれば、「スペシフィック・オブジェクト」といえそうなそ

の作品はいかなる表象性を持つてしまうのだろうか。現状では、作品のパフォーマティブな可能性は、表層的な知覚効果にとどまっている。表層効果とは違った、知覚体験が持つ経過的な変化のほうに可能性を見つけ出せないだろうか。

佐々木の展開を見ていきたい。

企画展「菊池聡太郎 個展 [Good Landing] (三月四日～二十日 Gallery TURNAROUND)

オイルパステル(たぶん)を中心にいくつかの描画材を組み合わせ、筆触を残しながら、ねっとりとした、しかし色調の分節を残した、荒地地?を描いた印象主義/表現主義的な作品。

これまでのインスタレーションでは、テーマとなっている場や現実空間の諸相をいくつかの表現形式を組み合わせることで表していたが、今回はインスタレーションの一構成要素ではない、絵画(ドローイング)だけを主にしている。インスタレーションでは、その現実空間が形成される経過中に働く様々な力を、それぞれの形式が特徴を生かして、時間変化をも表象してきた。そこにリアリティが成立していたと思われる。その種々の形式の組合せの中で、絵画(ドローイング)は時間性よりは現在性を強調し、またより作者のパーソナルな感性を表してきたのだろうか。それが、自立してコンベンショナルに展示されると、作者の表現に傾くためか、リアル

なのかフィクションというべきなのか、むしろ、きつかけとなる現実無しの虚構性のほうが強く感じられた。展示タイトルの持つ二面性もネガティブな終末感を漂わせている。

菊池の絵画（ドローイング）は、特に風景の構成要素が描写されているものよりも「荒地」のオールオーバー性を際立たせたものの表現性は高い。一方で、インスタレーションの持つ、「それから・そこから」の可能性は小さくなっているかもしれない。

村上賀子 写真展「Known Unknown」（七月五日～十七日
Gallery TURNAROUND）

二〇二二年四月に東京のニコンサロンで開かれ、第二十三回三木淳賞を受けた展覧会「Known Unknown」を再編したという写真展。見ると、まず写されたクリアな室内風景に目が行くが、あることに気づかされると、大変不思議な感覚に襲われる。後姿や顔の写らない日常的なしぐさとして写っている女性像がその室内空間に布置されてあることだ。

多くの女性像を扱ったポートレート写真や絵画では、女性は見られるものとして撮られ（描かれ）、その時モデルの自意識は見られていることを意識する。（それはセルフポートレートでも同じことである。）その時、その作品を見る主体、わた

し（たち）は自らの見る欲望に無反省な即自的な自己としてあらわれている。一方、見られる女性は対他的なキャラクター化した自己に封じ込められる。

村上の写真はその即自―対他関係を乗り越えていて、それは、撮影というイベントを生じさせない日常的な情景として撮られていることの不思議さを感じているのだが、不思議さを感じるべきというよりも見る―見られる関係を前提にする場面「それが当たり前であるべきなのに、」なのだろうと思う。見る自己と見られる自己の視線が交錯しないことで生まれる対自的な眼差しの階梯。村上の言葉をもじって言えば「複数の一人称」を成立させる作品の可能性は高い。

Fantastic Duxic Life / Tomoaki Sugawara solo exhibition
（九月十日～十五日 TURN ANOTHER ROUND）

次週の同じ会場での、齋藤大による「The fall out : Dai Saito solo exhibition（九月十七日～二十二日）」でもそうなのが、若い作者が自分のスタイルを発見定めた新鮮さと喜びにあふれた作品群であることをまず書いておこう。

菅原朋晃の作品は、画像をもとにしているのだろうか人物の顔を中心に各パーツが張り合わされているように描いたものである。つまりそれは、その場の状況や現実も、また自他それぞれの感情も変化し、異質なものが陥入してくるとき、視覚的な一貫性すら維持できない人間を表象する。それは、

イメージの貼り合わせや、物質の貼り合わせのような通常のカラーージュとは違った、アイデンティティやキャラクター性すらもその同一を維持しない不連続性のためのカラーージュを使っていることだ。今後、菅原が画面効果のために不連続な描写を使うのではなく、不連続もまた不確かさに拡張され、そこに宙づりになっていくことを期待したい。アイデンティティは即自化しやすく、キャラクター性は対他的であるとなれば、宙吊りに耐えるあたりに対自的契機があるのではないだろうか。

企画展 一門眞妙 まあたらしい庭 (十一月八日～二十日
Gallery TURNAROUND)

震災からの復興過程にある風景だろうか。ノーマンズランド感の漂う、しかし既視感のある風景。そこに少女(といふべきなのか)が挿入、あるいは佇むように描かれている。

その少女は正面向きであっても、見るわたしとは目が合うことで反応をおこしているように見え、むしろ、それまでに見た光景がおこす感情や反応のほうを湛えているかのようだ。そして、目の虹彩や瞳孔が対比的にはっきり描かれているのではなく、眼球表面の光の現象や映り込みのほうを描くことで、白い部分に溶けていくように見える。強い意志を思わせる運動感はなく感じさせずに佇んでいる後姿(このタイプの作品の多いのだろうか。点数以上に印象が強かつ

た。)の少女は、その風景の中に流れる風や光には同調している描写はあるが、風景をみているのだろうか。

作品全体の色調は明度の高い色が多く、また、部分的に使われる暗色も光を感じさせる処理がなされている。このことと、会場のターンアラウンドの壁の白、および、照明の白色LEDによって、ギャラリー空間に充滿している光は白さを知覚させ、作品を含む全体は光に溶け込んで溶明するかのようだ。

風景と少女、それぞれを描いている描写の技術は明解にわかれていないが、微妙に違っている。そのこともあってか、様々な構成要件を重ねて鑑みたとき、少女はそこに活動的に構築的に生きているというより、そこをみる(だけ)のように、佇むかのように風景に挿入されて見える。

門眞の作品を見ると、描かれた眼差しとは交錯せずに、感情移入するしないを別にして、視線はズレ重なる。キャラクターの挿入は、挿入する主体を意識させ、その主体(仮に作者もしくは話者というべきだろうか)の視線、第三の眼差しも成立する。重なり合った視線・眼差しは、違った階層の世界を知覚認識するだろうか。それは、溶明する空間にも作品内空間にも没入することではなく、ズレを認識する対自的な経験でもあるかのようだ。

同時期に、門眞は、わたし、にしかみえない星 ペロンミ

門眞妙 ユ、六萌（十一月八日～二十日 仙台アーティスト
ランプレイス）というグループ展にも企画参加していたこと
を付け加えておく。

印象に残った発表を記録だけ記しておく。

企画展 ― OKAZAWA miyuki “MESSY SCARTCHING”（一
月二十日～三十日 Gallery TURNAROUND）

版画作品では珍しいほどのスケールとダイナミックさを
持った抽象と、親しみやすいデコラティブな形式の作品の混
在。両方制作していきたいのかもしれないが、ダイナミック
なものをもっと拡張してみせてほしい。

数本奈智子作品展 「聖なる時の風韻」（七月九日～八月
二十一日 大衡村ふるさと美術館）

あるイメージへの十全な表現を目指して、制作が密度高く
積み重ねられている。だが、この表現性の一方的な追及は、
即自的な場への逆戻りでもあるのだが。

糸井貫二木版画展（十月十二日～二十二日 Gallery
TURNAROUND）

意表をつかれるというべきなのか、当然というべきなのか。
一人の美術家の持つ振幅の不思議さが垣間見れた。

齋悠記 絵画展「百」（十二月六日～十一日 Gallery

TURNAROUND）

誠実に、日常生活と制作を積み重ねている。その感性や感
情の振幅が結実しているのではないだろうか。

峰岡順 《深淵》 第七十二回新現美術協会展出品作

近年の作品の中では、その正面性の持つ造形的な力がこの
作品ではうまく働いていた。とはいえ、かつての初期作品が
持っていた絵画空間の振幅やゆがみのほうが、イメージの雰
囲気に妥協的な表現よりも可能性をはらんでいたのではない
か。

いくつかの展示にふれながら少しだけ総論的なことを書い
ておく。

最初に、地方新聞の「美術」記事の傾向について、果たす
べき三つの機能のバランスの悪さを感じていることを書いた。
そのことは、あるスタイルの感性（癒し、親しみやすさ、か
わいい、など）が流通しやすく、否定できず、社会的に認知
されているものに迎合していることでもあるのだ。といった
瞬間に、需要がある社会的関心のあるのはそういうもののな
だ、という声が聞こえる。とすれば、本当におそろしいのは、
メディアにも批評力がないことではなくて、むしろその前提
として、容認された感性だけが社会性を持って再生産・教育

されている事だ。単元的な社会は、それがどのようなものであれ悪しきものである。

では可能性はないのか。

多田 由美子 「一挿話」（十一月二十二日～十二月四日
Gallery TURNAROUND）

前回の発表から、多田の作品は変化したように思う。壁面には、ドロ잉の作品と小さな合成画像作品が数多く散在していた。（テーブル絵画を含め展示された全ての作品は一つの物語に関連づけられているという。）そして、何より中央の「テーブル絵画」は、整った連続と不連続の構成というより、なにか「まつりのあと」のような、外力によるみだれを感じさせた。（悪しき）現実と距離を置き、現実とは違った形式の世界を仮想してフィクションを構築している（のだろうか）多田の作品のそこかしこに、兆しや「気配」のようなものが生じてきている。

理解不能性を恐れず、既存の感性や形式に縛られないあたりに現れる予言性と、それを生み出す条件としての対自性。これらを成立させている公共圏は制作や創造の一次性だけで成立するのではなく、作者から距離をおいた二次的な展示や多重的コミュニケーション、批評性によっている。

その一つの表れとして、青野文昭の二〇二二年の発表だけ記録しておく。そのそれぞれに、どのように公共圏が成立し、関わったか確認してほしい。

青野文昭「谷間に生えだす」とあるタテモノのおもかげ（一月十四日～二月十三日 LOKO GALLERY（東京））

青野文昭 どこからきてどこへ向かうのか（三月十一日～三十日 上野の森美術館ギャラリー（東京））

地球がまるる音を聴く…パндеミック以降のウェルビーイング（六月二十九日～十一月六日 森美術館（東京）出展アーティスト十六名）

OF HOTEL LOCAL SESSION Vol.001「青野文昭：since then, from now on」（七月一日～三十一日 OF HOTEL（オブホテル）（仙台））

フキダマリの発酵―世界のその後のまたその世界 企画展―**青野文昭 小品展**（十二月十四日～二十八日（会期は令和五年一月十五日まで延長） Gallery TURNAROUND）

その青野が美しい文をよせている佐立の活動に最後にふれたい。（青野のエッセイも佐立の活動の詳細も、佐立のHPを参照）

佐立のり子個展「知覚の閾（いき）／倉庫」（十月四日～三十日 倉庫、仙台）

佐立は、オフ・ミュージアムではなくオフ・ギャラリーでの展開を目指しているかのである。場の性質の変化は作品形状や形式、その在り方を変化させるが、その過程、試行の一つなのだろうか、子どものアトリエを場とした作品発表をおこなった。当然、子どものアトリエ自体は展示と並行して行われており、それはカフェギャラリーや作家のアトリエ公開とは違った緊張を持っていた。というかその異様な程、緊張の無さを感じさせ、淡々と現実を引き受けているように見せているのが特徴なのだが。作品のズレや佐立が直面している様々な現実や場のそれぞれが持つ半端さや違い、問題が単なる作品以上に露呈していた。

迎合的で単元的な感性が優勢になり、それが単元的な社会を成立させているとき、それは、「美術」にとっては悪しき時代になる。形式的・制度的にはその境界が溶けている時、一方で、既存の（制度的社会的共同体的形式と感性の）アートは溢れ満ちる。そこからはずれ、自省的、対自的、創造的、予言的な「美術」は認識不可能な場へと追い詰められていくのだ。少なくとも、それは、創造性が大きな基盤とはいえ、制作次元とは違った美術の他の局面が活性化して公共圏をつくれないと越えられるわけがない。ある種の制作局面だけが肥大してしまったのは、実は、この八十年ぐらいの造形教育

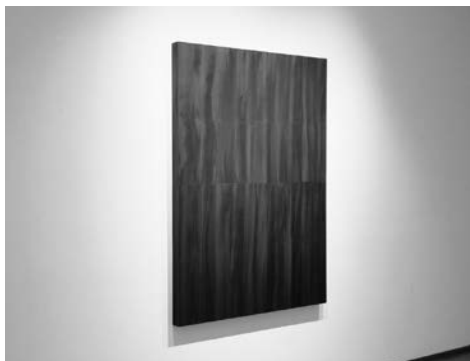
や美術教育の失敗もしくは限界だった、のかもしれない。作家活動の一次性或イベント記録だけが、芸術の動向をつくりだすのではない。特に「美術」においては。

大

嶋

貴

明
(美術家)



佐々木 健展 “メナス レイヤーバルク”
 展示 2022年2月15日－2月19日
 仙台アーティストランプレイス
 《バルク》2022年 146 × 103cm
 ホログラム生地にアクリル



企画展 | 菊池聡太郎 個展 「Good Landing」
 展示 2022年3月4日－3月20日
 Gallery TURNAROUND
 展示写真 撮影：小岩 勉



菊池聡太郎 《Landing 〈荒れ地〉シリーズより [仙台、蒲生]》 2021年
 79 × 109cm
 紙、オイルバステル・アクリル絵の具・インク
 撮影：小岩 勉



Fantastic Duxic Life / Tomoaki Sugawara solo exhibition
 展示 2022年9月10日ー9月15日
 TURN ANOTHER ROUND
 展示写真



菅原朋晃 《side》 2022年
 53 × 45.5cm
 キャンバス、アクリル・油彩



企画展 | 門眞妙 まあたらしい庭
 展示 2022年11月8日ー11月20日
 Gallery TURNAROUND
 展示写真
 撮影：小岩 勉



門眞 妙 《まあたらしい庭》 2022年
 60 × 60cm
 木枠、綿布、ジェッソ・アクリル絵の具
 撮影：小岩 勉



多田由美子 「一挿話」
 展示 2022年11月22日ー12月4日
 Gallery TURNAROUND

「テーブル絵画《一挿話に挿話する》」 2022年
 150 × 75cm ミクストメディア
 壁面左側
 《菜穂子1》 2022年 109.5 × 78.5cm ユガ電飾用紙、アクリル
 《形式を利用するー卓子C》 2022年 36.3 × 25.8cm ボード、ペン
 《魚尾4》 2022年 29.7 × 21cm 原稿用紙、ペン
 壁面右側
 《畳の比喩B》 2022年 15 × 15cm 敷紙、ペン
 《畳の比喩A》 2022年 15 × 15cm 敷紙、ペン
 《魚尾2》 2022年 29.7 × 21cm 原稿用紙、ペン

彫刻

令和四年一月から十二月までの宮城県出身あるいは在住の彫刻、立体造形の作家による創作活動と発表、宮城県内で開催された展覧会、アートプロジェクト、グループ活動における彫刻、立体造形の作品の紹介や活動の報告を行う。

令和四年は東日本大震災後から十一年が経過し、新型コロナウイルスが感染拡大してから約三年となった。この感染症対策を行いながらの展覧会等の発表、活動実施はもはや日常のこととなり、約二年の自粛ムードを体験した創作者たちの表現と活動は、より力強く精力的なものになったと感じた。以下、実績として可能な限り記録する形をとった。他にも優れた発表があったと思われるが、筆者が実見できず知らなかったものについてはご容赦いただきたい。文中の作家に対する敬称も略させていただいたことを併せてお許しいただきたい。

青野文昭個展「谷間に生えだす」とあるタテモノのおもかげ」

一月十四日～二月十三日 LOKO GALLERY (東京都)

街や海岸などに捨てられた物の断片を拾い、その欠けた部分を「なおす」「復元する」ことをテーマしてきた作家。青野

はこのほか、個展「どこから来てどこへ向かうのか」三月十一日～三十日 上野の森美術館ギャラリー、「地球がまわる音を聴く…パндеミック以降のウェルビーイング」六月二十九日～十一月六日 森美術館(東京都)に出品。展示室一室を使ったインスタレーションのような展示をした。海外では「永遠にあなたのープレスリリース」六月十六日～九月二十五日 サマーセットハウス(ロンドン)、小品展「フキダマリの発酵ー世界のその後のまたその世界」十二月十四日～二十八日 Gallery TURNAROUND など精力的に発表した。

芸術の四国遍路展 一月二十五日～六月二十六日

徳島城博物館(徳島県)、薬工ミュージアム、チェルベロコヒー店内(高知県)、ギャラリーリブ・アート(愛媛県)、塩江美術館(香川県) 他

東日本大震災以後、宮城県に移住し、石巻で活動してきたパルコキノシタが企画。東北・高知ゆかりの作家九名が出品。東北からはパルコの他、二〇一七年より和歌山県から石巻市

に移住した彫刻家・富松篤が流木を用いた彫刻で出品。

寅展 三月一日～四月二十四日 秋保の杜 佐々木美術館 & 人形館

一実、大吉、つだかおりらが出品。

菅野泰史個展 海のトレース 三月十五日～二十日 TOKI Art Space (東京都)

菅野の同名の個展は、'mado-beya 企画'として、'mado-beya(石巻のキワマリ荘二階)' 十月十五日～十二月二十五日にも開催された。

菅野が震災後、被災地の海を訪れて見た海の水面を黒御影石に彫刻。水面の凹凸を鏡面磨きすることにより、本当の水面と見紛うほどのリアリティある質感を表現している。石に海を映し取るという感性に研ぎ澄まされたものを感じる。mado-beyaの展示では、筆者が見た日没ころの窓から差し込む自然光と石の黒さが相まって、夜の海に誘われるような感覚があった。優れた作品である。

「青」の使い展〜世界自閉症啓発デーによせて 三月二十九日～四月三日 晩翠画廊
姉齒公也、つだかおりが出品。

仙台インプログレス 四月七日

フランスを拠点に国際的に活躍するアーティスト川俣正が仙台市沿岸部で展開するプロジェクト。貞山運河や松林、湿地などを一望できる作品《新浜タワー》の完成を祝い、協力した地域の方や、沿岸部で活動する方々を招いたお披露目会。七月には橋のスタディとして《フローティングブリッジ》を制作した。

開廊二十五周年企画 第一弾 晩翠画廊・二十五周年感謝祭 晩翠画廊

東北ゆかりの作家を応援し続けてきた画廊の周年企画として、春・夏・秋と三回に亘り、「25」という数字にちなんだ展覧会が企画され、多数の作家が出品した。

第一週 四月十二日～十七日 佐々木莉央、佐藤淳一、村山耕二が出品。

第二週 四月十九日～二十四日 安斉重夫、清水玄太、永倉香名子、野田律子らが出品。

開廊二十五周年企画 Vol.2 『25』にまつわる物語 晩翠画廊
第一週 六月二十八日～七月三日 佐々木莉央、清水玄太が出品。

第二週 七月五日～十日 野田律子、畠山卓也が出品。

開廊二十五周年企画 Vol.3 『25×25cmの世界』 晩翠画廊

第一週 十一月十五日～二十日 嵯峨卓、佐藤淳一、新藤睦子、田代智也が出品。

第二週 十一月二十二日～二十七日 イクコクサカ、翁ひろみ、佐々木莉央、清水玄太、野田律子、畠山卓也が出品。

線とぐちゃ「Gesture of Lines」 四月二十三日～六月二十六日 東京都渋谷公園通りギャラリー

今日注目のアールブリュット作家（米国五名と日本五名）を紹介する展覧会に松浦繁が出品。

松浦は個展「木」展 九月十七日～二十四日 中本誠司現代美術館も開催。

松浦は十九歳の時にかかった脳内出血による麻痺のため、木を万力で固定し、左手だけで手鋸で刻みを入れて、電動のみで彫っているという。塊の作品、壁掛けの作品もあれば、複数の木を組み合わせて、空間に舞うような伸びやかで高さのある作品もある。「一本一本のイメージはしているが、名前にはてな」と語る。言語化しない湧き上がるイメージがダイレクトに表現されている。

大作は一年ほどかけてじっくり彫る。素材を着彩しているのが特徴で、彩色は黒、白を塗って、最後は手で塗っているため原色ではなく色が木の表面上で混色されているが、それ

が形と相まって心地良い造形を生み出している。のびのびとした造形力と力強さがある。展示空間にマッチしている生き生きとした作品群であった。



松浦繁 個展「木」より

第八十三回河北美術展 五月十一日～十七日 T F Uギャラリーミニモリ

栗田智彦（仙台市）の「時の舟にて」が東北放送賞、堀宏美（仙台市）の「ZEX」が宮城県芸術協会賞、及川学（登米市）の「春一番」が東北福祉大学賞、中野優音（仙台市）の「優しげな人」が賞候補となった。

第六十八回創型展 五月二十日～二十七日 東京都美術館

赤井靖武が「月夜」を出品。

第六回 二科東北支部連合展 五月二十七日～六月一日 せんだいメディアアテーク

齋藤充輝、佐藤しず子、木村民男、清水直土が出品。

渡邊摩里個展 「La Strada ー ア・ストラーダ展」 四月十二日

～六月三日 ノキシタ エンガワハナレ

「道」を意味する題名の和紙造形の展覧会。

ソーシャルアートプロジェクト企画展#2 「ポスト311」 五月一日～三日 せんだいメディアアテーク

「人と暮らしに豊かさをもたらすアート」をテーマに、社会的課題から可能な限り自由の担保される表現の場の創造を目指すプロジェクト。前年に引き続き彫刻家・松岡圭介の作品展示と公開制作の他、服飾家の作品展示、ダンス公演も含め開催された。松岡は一九八〇年仙台市出身。東北芸術工科大学修士課程修了。二〇一〇年代にアメリカとイタリアにて在外研修。松岡は大学院のデッサンの勉強から、具象彫刻、人間の形に興味があると感じ、様々な素材を用いながら一貫して人間をテーマに創作。人間は抽象的でも、海外の人にも共

通言語として伝わる魅力的なものが作れるという。在外研修のアメリカでは自然からの影響が大きく、イタリア・ローマでは教会の床のレリーフなど人が歩くことで完成された魅力的な床に影響を受けた。素材の特性を活かしたフォルム、そこに込める意味性に強く独自性を覚える。

五月七日～七月三十日まで galleria d'arte FABER (イタリア)にて個展「REFUGEES」。第十回「アートコンペティション2011(兵庫県)」の「a tree of elephant」の受賞。今後のさらなる活躍が期待される。

大下邦弘ガラス展 ～自然の美をガラスに込めて～ 五月十九日～二十五日 藤崎美術ギャラリー

徳島県出身、福島県在住の作家。ガラス棒をバーナーで熱して創る手法。微細なところまでとてもよく造形されており、繊細でとても美しい。台座のしつらえに大理石片を用いるなど、独自の世界が表現されていた。

スギサキマサノリ彫刻小品展 五月二十四日～二十九日 晩翠画廊

佐々木美術館 九周年芸術祭 五月二十六日～六月二十六日 秋保の杜 佐々木美術館&人形館

翁ひろみが出品。三点の作品題名にはいずれも「佐々木美術館二〇二二」とあり、壁にかけてある彫刻作品の矩形が展示室空間の矩形に呼応している。彫刻の表面は木と石膏とアクリルガッシュで、研ぎ出された白い層の質感、素材感は展示室の空気を表現しているように感じられる。壁にかけられた作品は緩やかに素材の板が起きている箇所があったり、展示室の空間の形を作品の角の出っ張りや凹みでなぞるように造形したりしている。その空間を捉える観察眼と表現力が鋭くも優しい。それは、何事も簡便に分かりやすいことが優先されがちな現代に生きる私たちに、丁寧な観察し、五感を研ぎ澄ましてモノ、コトを捉える大切さを教えてくれているように思える。

嵯峨卓 鍛金の仕事展 七月十二日～十七日 晩翠画廊

横山信人ベニヤ板造形展 七月十四日～十八日 アートスペース無可有の郷

第五十九回宮城県芸術祭彫刻展・彫刻公募展 七月十六日～十九日 せんだいメディアアテーク
宮城県芸術祭賞に姉齒公也の「なんとかなる!」、宮城県知

事賞に赤井靖武の木彫「月夜」、河北新報社賞に木村民男の「星への祈り」。菅野美術館賞に山中ミサ子の「想」が選ばれた。彫刻公募展の宮城県芸術協会賞は東北芸術工科大学の渡部信隆「根源に宿る」が選ばれた。



宮城県芸術祭賞 姉齒公也「なんとかなる!」



宮城県知事賞 赤井靖武「月夜」



菅野美術館賞 山中ミサ子「想」



河北新報社賞 木村民男「星への祈り」

層 Vol.6 八月七日～十四日 GALLERY STORKS (東京都)

若手作家のグループ展。清水玄太が出品。

企画展「手つかずの庭 二〇二二」 八月二十日～十月二日

石巻のキワマリ荘、ART DURG CENTER、THE ROOMERS' GARDEN

石巻のキワマリ荘代表の鹿野颯斗が企画。三会場で開催され、石巻のキワマリ荘には、富松篤、ちばふみ枝が展示した。

Reborn-Art Festival 2021-22 利他と流動性【後期】 八月

二十日～十月二日 石巻市街地・牡鹿半島

石巻市在住の有馬かおるは「FAUST IN MARIENBAD by 個の追求の果ての他者性と、その奥にある風景2022」を出品。

今回のフェスティバルのシンボルモニュメントでもある小谷元彦「サーフ・エンジェル（仮設のモニュメント2）、2022」は旧水産加工場内に展示された。サモトラケのニケを思わせる羽と、バランスをとるかのように両手を水平に広げた姿、何より顔を多面体で表現しているところが、まさに天使という象徴的な存在を感じさせる印象的な作品であった。川俣正の「石巻タワー」は、震災後平坦になった南浜マリナ隣の空き地に作られた木造の巨大な塔。螺旋上の足場を登っ

た塔の上で見る空と地表の風景、感じられる風に震災を思い胸に込み上げてくるものがある。この塔は、塔の最上階に明かりを取り付けて灯台のように海と街を照らす。今後数年をかけて完成されるというが、人々の癒しの灯台になることを期待する。

立体造形作品としては石巻産の稲井石を用いた加藤泉の「無題」も印象に残った。

このフェスティバルでは、かつて賑わいを見せていたが今は使われなくなった場所・施設を展示、インスタレーションの場として使っている。それが非日常的な体験を生み出している。開催にあたり、たくさんボランティアの方々が道案内などされているが、震災後の石巻の人々、訪れる人々にとっても、アーティストが石巻の街に手を加えた作品によって、癒しや楽しみ、ぐっと心の深いところに潜って何かを感じるひと時を共有できたことと思う。

三ツ緒 個展「森で採取したモノ」 九月六日～十一日 Gallery TURNAROUND

「シロイヒト」という小さな創作人形のシリーズ。三ツ緒によると「シロイヒト」とは人を抽象化した「誰でもない／何でもない」存在。顔が無く色彩がモノトーンのため不気味にも見えるが、様々な表情を持つたくさんの「シロイヒト」は、

森に住む妖精のようでもある。ガラスの小瓶を台座とした小さな胸像から、手のひらの大きさの全身像までたくさんの「シロイヒト」がいる。会場での展示前に、実際にそれらを森の中に置いて撮影した写真集もあり、展示空間と合わせて見ることで、より一層、「シロイヒト」が森で採取されてきたように思わせる設定に新しさを感じる。普段は村上三緒という名前でイラストレーターとして活動している作者の感性が生きていると感じた。小さな作品ながら、造形力のある良い作品群であった。三ツ緒は、多くの人が自分の望む姿でのびのびと過ごすことができ、存在を脅かされることのない世界を表現しているという。とても素敵な空間であった。



三ツ緒 「森で採取したモノ」より「ハイイロ」

第百六回二科展 九月七日～十九日 国立新美術館

佐藤しず子が会友推挙、須佐高康、杉山徳夫、齊藤充輝が
入選。

サトル・サトウ・アート・ミュージアム 七月～九月

サトウサトルが二〇二二年野外作品「平和への回廊」
Couloir Vers La Paixを制作。サトウは三、四年に一度、ミュー
ジアムの野外作品を創作している。今回は木の板を使用し、
上から見ると十字架の形の回廊を制作。回廊の壁面は木材が
秩序良く間隔をあけて建てられているが、歩いてみるとその
リズム感が心地良い。

彫刻とレリーフ展 九月八日～十四日 藤崎美術ギャラリー

及川茂、赤井靖武が出品。及川の「張果老」は、瓢箪から
勢いよくロバが飛び出てくる様子と、それを快活に笑う、中
国の仙人張果の笑い声が聞こえてくるかのように生き生きと
表現されている。

抗^{あか}う波の軌跡 浮島彫刻スタジオの三十年 九月十日～十月
三十日 石神の丘美術館（岩手県）

気仙沼出身で日本とイギリスを拠点として活動する彫刻家・
片桐宏典とその妻でイギリス出身の彫刻家ケイト・トムソン

が共に一九九一年に岩手県岩手町に構えたアトリエ、浮島彫
刻スタジオの仕事を取り返り、創作してきた作品群を美術館
内、屋外展示場に多数展示した大きな展覧会であった。

片桐は、宮城教育大学在学中から国内の国際彫刻シンポジ
ウムに参加し始め、卒業後はオーストリア・リンダブルンで
アシスタントオルガナイザーとして多くのシンポジウムで活
躍。十年余りヨーロッパでシンポジウム及びパブリックアー
トや共働制作、展覧会で活躍、一九八八年にはスコットラン
ド王立アカデミー展ラティマー賞を受賞した。同年、スコッ
トランドに仲間と共にグラスゴー・スカルプチュア・スタジ
オを設立。岩手町にスタジオ設立後も多数の石のモニュメン
ト、パブリックアートを制作。芸術文化のプロジェクトで特
に大きな功績と言えるのは、一九九八年に片桐とトムソンが
企画運営して開催された岩手アートフェスティバルUK98で
ある。盛岡のほとんどのギャラリーと小岩井農場を舞台に、
八十五名のスコットランドの作家と日本人作家三十名の作品
を一堂に展示し、講演会・ワークショップを含む全イベント
で七万六千人を動員した。

二月十一日に国立民俗博物館とスコットランド国立博物館、
スコットランド美術史協会の共催で開催された「日本とスコッ
トランド美術」国際会議に二人が招待され、オンラインでの
講演を行った。このことは片桐らの両国での芸術文化への貢

献・功績がいかに大きいものを示している。片桐とトムソン両名の講演は、YouTubeで現在も公開されている。

展覧会では、片桐の代表作である、割肌を生かし石の中に窓を作った作品、宮城県産伊達冠石を用いた「ストリームライン」のシリーズなど、洗練され完成度が高い見応えある作品ばかりであった。



片桐宏典 「エクリプス」

佐々 瞬 未来、もしくは架空の長井のこと 九月二十七日

十一月十三日 丸大扇屋（山形県）

佐々は令和四年度宮城県芸術選奨新人賞受賞者。仙台市出

身の佐々が、縁あって長井という町の「対外的に紹介したい文化・芸術」と、個人個人がさまざまな時代の中で実践してきた個別の文化的な営みがまだ合流できていない点に他人事とは思えない問題を感じ、滞在制作を決めたという。長井が強調する町の歴史は、主に江戸時代を起源とする舟運文化と縄文時代に人々が大きな集落を築いた場所ということだ。それらシティレガシーは、観光資源に結びつくかという価値基準や、現代の政治に直結するものでもある。それをより大きな視点で振り返ったり認識したりすることが、未来に向かうために欠かせない、ということが佐々のアーティストとしての関心事項であったという。具体的には、四十年にわたり縄文文化を題材にした音楽活動を行う「縄文太鼓」という団体とその実践、失われつつある郷土のものづくりを継承するアメフラシというグループの活動などの人々の実践に、佐々は江戸時代の町の歴史と同等の価値を見出した。そして、江戸時代に作られ、現在は重要文化財となっている「丸大扇屋」にて長井の人々が肅々としている文化的な営みを「未来の文化財」として見立て、作品において、そうした演出で提示した。佐々自身は、「離れた街のことについて、ある種の暴力性、無責任さを引き受けながら、よそものにしかできない提案や介入、あえて誤読や曲解を含んだ町の未来の描写を行った」という。佐々の滞在制作で、長井の活動者をエンパワーし、

文化を認定し普及する事業を担う「文教の杜」の今後あるべき姿を提案する意図は、しっかり伝わったことと思う。

佐々は、この他、仙台インプログレスに関連して、仙台・新浜地区にて小屋を創作し、「貞山運河の小屋めぐり」を行った他、「SEVEN BEACH Light Up FES 2022 ～光のミチヒキ～」にも出品。精力的な活動を行った。

（写真は、佐々が長井市ゆかりの彫刻家・長沼孝三の彫刻「凶器を持たすな」をモチーフに、その彫刻が未来では「鑑賞する彫刻」ではなく、もっと身近な「お守り」のようなものになっている、というフィクションを作り、彫刻をアクセサリ化した作品。）



佐々瞬 「首飾り」

第三十七回石巻市美術展 十月二日～十日 マルホンまきあーとテラス

石巻市在住のちばふみ枝が東日本放送賞受賞。

佐藤淳一彫刻展 十月六日～十日 アートスペース無可有の郷

円通院ライトアップ「雲と光の物語」 十月二十九日～十一月二十三日 松島円通院

ご住職の企画・総合演出のもと渡邊摩里が雲を和紙造形でダイナミックに表現した。



佐藤淳一 「その話をするには気が短すぎる」

第八回 東北障がい者 芸術全国公募展 Art to You! 九月

八日～十一日 宮城県美術館県民ギャラリー

「ゴジラ」を創作した大滝真信（宮城県）が宮城県知事賞を、
「十二支の始まり」選ばれた動物と選ばなかった動物たち」
を創作した田代智也（宮城県）が優秀賞、高速賞、オーディ
エンス・仙台市長賞を受賞した。

SEVEN BEACH Light Up FES2022 ～光のミチヒキ～ 十

月七日～十日 菖蒲田海水浴場

喜多直人、佐々瞬、タノタイガ、ダウナーズ（菊池聡太朗
（一九九三年岩手県出身、美術家）、千葉大（一九九二年宮城
県出身、大工）、吉川尚哉（一九九二年岩手県出身、建築家）
による空間設計ユニット）、アートディレクター…関本欣哉

サンドアートジャパンカップ in なないろの芸術祭 十月

二十一日～二十三日 南余景公園（東松島市）

秋田県出身で東松島市に移住し、二〇二二年より地域おこ
し協力隊員としても活動している世界的なプロの砂の彫刻家
保坂俊彦が参加。名前を伏せて行われた審査で見事、最優秀
賞を受賞した。このコンテストでは、他の大会とは異なり、
制作時間は一日八時間、三日間で合計二十四時間という連続
した時間内で、大きさは高さ、幅、奥行きが各一・八メートル

という規定がある。審査は、技術と完成度、デザイン、アイ
デアの四項目の総合点で競われた。テーマは自由で、保坂は
「夢の創造」という作品を制作。子どもの頃、砂場でトンネル
や山を作っていたところから、砂であらゆるものを創り、夢
を形にしてきた自身の姿とを表現した。

砂の彫刻の造形方法が一般的な彫刻と異なるところは、ま
ず、木の型枠を三段重ねにして、砂を詰め、パワーショベル
などで叩いて圧縮した塊にする。その型枠を上から一段ずつ
外して彫り進める。段ごとに形を完成させて、砂が崩れない
ようにする定着材をかけては下に進むそうで、後から上の段
の手直しなどはできないという。また、型枠を外した時に既
に砂の塊の角が崩れていることがあったり、制作途中での風
雨などで崩れてしまうこともあり、ある程度の構想は決めて
いてもほとんどアドリブで作ることもあるという。ミケラン
ジェロのような彫り方で、全体のバランスの取れた精緻な造
形に感動を覚える。パレットナイフで砂を削っていくそうだ
が、砂像の少年のキラキラとした瞳までも生き生きと表現し
ている。東京芸術大学の彫刻科卒業とのことだが、圧倒的な
造形力と表現力が素晴らしい。

高橋健太郎個展「呼吸する庭」 十一月十五日～二十日 仙台
アーティストランプレイス

ギャラリーの床一面に揃った大きさの石片を、意図をもって敷き詰めた空間。完全に規則的に並べているようで、ところどころ抜いている。それは、高橋が壁にも小作品を展示しており、石を気にしすぎて周りが見えなくなる、歩けなくなることを考慮して、空間に対して石を配置しているのだという。床には、石片以外にも石と木の作品、壁面には鉄の作品もある。高橋は、実材、素材、立体が好きで形を見ていると語る。作品一つ一つは独立した作品で、それぞれに高橋の感性を感じる。全体として見ても、生活空間ではない、展示空間という非日常の心地良さがあり、貴重な空間だと感じた。



保坂俊彦 「夢の創造」

山中環作品展 十一月十九日～二十五日 ミュゼ マエナカ
天草木目石を割って着色したり、金色の箔を貼ったりして再構成した壁掛けの作品と石彫作品。

ひとがた通信展「ドールという変移する記号二」 十一月十一日～十二月二十五日 秋保の杜 佐々木美術館&人形館
阿部真沙央、一実、川村千紘、菊地市千、宮筐、さくまいずみ、山脈、しょうじこずえ、せん、大吉、つだかおり、ほんだあいが出品。

晩翠画廊の生誕祭 十二月十三日～十八日 晩翠画廊
クリスマステーマとした展覧会。姉齒公也、野田律子、スギサキマサノリが出品。

第七十二回新現美術協会展 十二月二十日～二十五日 宮城県美術館県民ギャラリー
岡田純子、栗田智彦、佐藤淳一、山本泰士、横山信人が出品。

おわりに

筆者の可能な限りの展覧会に足を運び、実見できなかったものについては作者に話を訊くなどして、多くの活動を取りこぼしなく記載できるよう努めた。彫刻・立体造形の活動を

取りまとめているが、この年鑑の中でも絵画、メディア芸術にまたがるような活動を行う作家もおり、一つのジャンルに括ることのできないプロジェクトがある。「彫刻とは？」ということを真摯に思考し創作する作家、その作品はいつの時代にも大切である。また、素直に創作の試みを追求した結果、さらに新鮮な造形表現、プロジェクトも現れてくる。コロナ禍以後は特に、実際の展覧会とインターネット上で行われている発表活動、それぞれのコミュニケーションを含めた注目の集め方にも興味を持って注視している。もちろん、実際の展示空間で作品を味わうことを最重要視しながら。

全体として、いわゆるギャラリースペースでの展示発表も、街や自然で行うプロジェクトもそれぞれが充実していた年であつた。今後の動向にさらに注目していきたい。

くさ
日 下 育 子
か い く こ

(彫刻家・宮城県芸術協会彫刻部運営委員)

工芸

令和四年となり東日本大震災から十一年の月日が流れた。復興が進んできたところへまたもや三月に最大震度六強の地震が宮城県を襲った。恐怖に慄きながらも人々は大震災の時の教訓を生かし、生活をたてなおした。

令和二年から猛威を奮っている新型コロナウイルスの感染力は、デルタ株からオミクロン株へと変異をしながら、その勢力は収まることなく第六波から第八波まで威力を増していった。

そのような情勢の中、工芸界は各地で新型コロナウイルスの感染症対策を講じつつ、展覧会が行われてきた。自由に動けない鬱屈した思いと、進む制作へのエネルギーを、各々の作品に込めたかのように。

一月、第六十九回日本伝統工芸展（巡回展 仙台三越）

宮城県の入選者は次のとおり

岩井 純 「六華天目銀彩四方組鉢」（陶磁）

江田 薫 面取釜「石蔭」（金工）

安藤令子 七宝鉢「雨降り」（七宝）

松本幸恵 有線七宝香炉「十六夜」（七宝）

四月、第六十回記念日本現代工芸美術展（東京都美術館）
今回は展覧会開催の節目、六十回記念展となった。

宮城県の入選者は次のとおり

林恵美子 「その先へ」（木竹籐）

碓谷良子 「波打ち際」（革）

古山文子 「海・空・光」（染織）

桑原リエ 「雄風」（陶磁）

同月、第六十二回東日本伝統工芸展（東京三越）

宮城県の入選者は次のとおり

鈴木元子 乾漆蒔霽箱「蕉」（漆）

江田 薫 面取釜「彩」（金工）

佐瀬たか子 有線七宝「光華」（七宝）

種澤有希子 省胎七宝「夏生る」（七宝） 奨励賞受賞

岩井 純 六華天目釉組皿（陶芸）

六月、第四十六回東北現代工芸美術展（せんだいメディアテーク）

東北六県在住、出身者を対象とする造形作品の公募展で、染織・陶磁など二十八点の応募があった。一般の入賞・入選作と会員・顧問・審査員の出品作七十一点を展示。

宮城県の入賞者は次のとおり

【宮城県文化振興財団賞】

小林寛子 こざん刺し「天漢」（染織）

【東北現代工芸賞】

千葉洋子 「新緑と藤Ⅱ」（染織）

【宮城県知事賞】

今野隆子 「千年杉の鼓動」（染織）

【奨励賞】

大泉三保 「蔵王の四季・冬・朝の彩」（染織）

九月、宮城県・吉林省友好県省締結三十五周年記念交流事業として、文化芸術交流三十五周年目の現在地 工芸・写真展が宮城県美術館県民ギャラリーにおいて開催された。

工芸の部からは、陶芸十名、染織四名、木竹芸二名、七宝二名、ガラス二名の作品を展示。吉林省からは、コロナ対策のため二十名の作品をモニター映像での展示となった。

初日には、会議室の壇上で邦楽演奏や、陶芸作家の大壺作

品に生け花を実演した。吉林省側からは、大型スクリーンに映像でのモニター参加となった。宮城県からも作者の制作場面を写真部との協力のもと、映像に映して吉林省側に送った。コロナ対策で、お互い映像での交流となった。

十一月、第三回杜のみやこ工芸展（TFUギャラリーミニモリ）

「河北工芸展」を継承する形で、宮城県芸術協会と河北新報社が連携して取り組んだ工芸展である。

総応募数百六十二名、二百点。昨年とほぼ同数となった。応募作品には、東北六県はもとより、栃木、茨城、東京、長野、静岡、大阪、兵庫などの地域からの応募があった。

重厚なベテランの作品群に交じり、若い人たちの台頭が目立っていて、互いに切磋琢磨しているかのようにみえた。

新型コロナウイルスの感染流行の影響で、見送られてきた会場式でのテーブルカットを三回目にして多くの出席者のもとに行うことができ、華やかな式となったのは、喜ばしいことである。

杜のみやこ工芸展大賞受賞作品（染織）千葉洋子「青の紋様」。青の濃淡に白を効果的に配置した構図、織りの熟練の技が光る。

河北新報社賞（陶磁）平野嵩真「日和」は、傘をリアルに表現。

細かい骨組みまでも丁寧に制作。若々しい力と繊細さが上手くミックスしている。

宮城県の上位入賞者は次のとおり

【杜のみやこ工芸展大賞】

千葉洋子 「青の紋様」(染織)

【河北新報社賞】

平野嵩真 「日和」(陶磁)

【公益財団法人宮城県文化振興財団賞】

杉山智一 「乾漆銀彩片福面合子」(漆)

【JAL賞】

竹澤千賀子 「言霊」(木竹)

【青森県知事賞】

大橋翔太 「藍胎蒔霽盛器」(漆)

【岩手県知事賞】

田中泰雄 「白い風」(漆)

【秋田県知事賞】

桑原リエ 「爽風」(陶磁)

同月、**第五十九回宮城県芸術祭工芸展**(TFUギャラリーミニモリ)

宮城県芸術協会会員の作品五十七点を展示。

最高賞の芸術祭賞受賞作、古山文子の「海・空・光」(染織)

の作品は、長年の染織で集めたタッセルをファブリックシートに差し込み、四角形と二等辺三角形に黒で輪郭をとり、赤とのコントラストが地球の自転、海と光を力強く表現している。

上位入賞者は次のとおり

【宮城県芸術祭賞】

古山文子 「海・空・光」(染織)

【宮城県知事賞】

横田美和 生皮苧糸珈琲染八寸帯「薫り立つ」(染織)

【河北新報社賞】

佐瀬たか子 有線七宝蓋物「涼風」(七宝)

【宮城県教育委員会教育長賞】

尾形かなみ 「Dream」(ガラス)

【宮城県教育委員会教育長特別賞】

加藤 晋 結晶釉器(陶磁)

【公益財団法人宮城県文化振興財団賞】

村上朋子 「Opisthokonta」(陶磁)

【宮地房江賞】

吉田信子 「草の露」(染織)

同月、**第九回日展**(国立新美術館)
宮城県出身者の入選は次のとおり

相澤正樹 「稜線の刻」(陶磁)

桑原リエ 「清風」(陶磁) 初入選

白いたてながのフォルムに、太い線と細い線を立体的に彫り込み、下から流れるように風を表現している。初出品、初入選となった作品。

個展は次のとおり

一月、加藤 晋 作陶展

結晶釉や蛍焼の作品が美しい。

八月、浅野治志 作陶展

白地に淡く染められた器が優しい。

十月、鍋田尚男 ガラス作品展

鮮やかな色ガラスの幾何学的な作品と、乳白色の

茶器が柔らかく美しい。

同月、島見美由紀 作陶展

赤土に金彩、新しい試みにも挑戦。

十一月、村山耕二 ガラス作品展

ガラスを用いて宇宙を表現している。

同月、橋本昌彦 作陶展

塩釉技法を使い、多面体の正確な形が圧巻の作品。

象嵌も美しい。

同月、市岡 泰 作陶展

十二月、岸上まみ子 贈りもの展
モダンな模様が使う人の心を楽しませる作品。

白地に繊細な花鳥を描いた可愛い小物たち。思わず手に取りたくなる。

文中での敬称を略させていただいたことをご了承願います。

川 かわ 北 きた 京 きょう 子 こ
(宮城県芸術協会工芸部副部長)



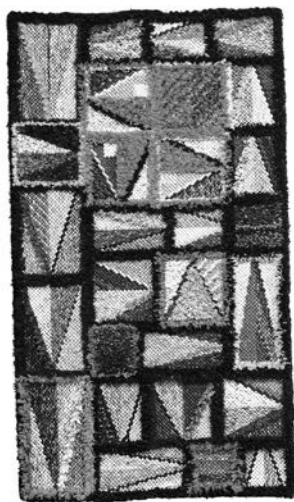
岩井純 「六華天目銀彩四方組鉢」



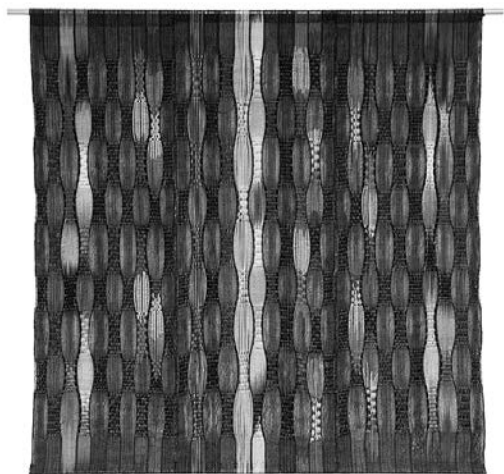
安藤令子 七宝鉢「雨降り」



松本幸恵 有線七宝香炉「十六夜」



古山文子 「海・空・光」



千葉洋子 「青の紋様」



平野嵩真 「日和」



杉山智一 「乾漆銀彩片福面合子」



竹澤千賀子 「言霊」



桑原リエ 「爽風」

宮城県・吉林省友好省締結35周年記念交流事業

文化芸術交流 35年目の現在地 工芸・写真展

宮城県・吉林省友好省締結35周年記念活動
文化芸術交流 35年の此时此刻 工芸・撮影展

宮城県・吉林省締結友好省35周年記念活動
文化芸術交流 35年の此时此刻 工芸・撮影展



宮城県・吉林省友好省締結 35 周年記念交流事業 文化芸術交流工芸・写真展

書

令和五年三月、東日本大震災から十二年が経過した。あの時、書道はできるのだろうか、書道活動をしていいものだろうか、多くの人が苦悩した。そのような中、多くの支援を頂きながら、或いはこういう時だからこそと心を奮い立たせ、書活動を再開、或いは書の活動を通しての復興支援などに取り組み、その後、少しずつ、少しずつ日常を取り戻していった日々であった。

しかし、約三年前から新型コロナウイルスの影響により、様々な活動が制限され、書道界においても延期・中止となった書展が数多くあり、各個人においても、自分が毎年行っている活動サイクルに変更が生じたことで、モチベーションを保つことが難しく、その活動範囲を制限したり、作品制作を断念したりといったことがあった。

宮城県書道界は、戦後から復興の中、全国的な書の旺盛の時代の昭和と時を同じくしながら現在に至っている。河北書道展を始めとした書展は活気を呈し、様々な書道団体も元気であった。時を経て令和の時代は、人口減少や少子高齢化、趣味や娯楽の多様化などもあり、徐々にではあるものの出品者数や会員数が減となるなど、先行きが見通せない時代となっ

てきている。

そのような中、令和四年は、コロナ対策も一定程度進み、様々な対策を取りながら、そして、何よりそれぞれの団体、関係機関、代表、そして各書家、皆さんのご努力と絆により、書活動を行ったり、書道展が開催された。

作品も、ベテランから中堅作家は、作品の錬磨が進み、見応えのある充実した作品が発表され、若手作家も数は多くはないものの、個性的で多様性を感じる魅力的な作品が見られるようになってきたところである。

各公募展・書展などは、以下においてまとめるところであるが、中でも、厳しい中において開催された個展は、目を見張るものがあり、それぞれの活動に敬意を表するものである。

主な書展

◎日展入選者 片倉恵仙 小日向慶可 佐々木香峰 末永瑞鳳 高野芳月 中條天真 畠山翠香

◎第六十九回河北書道展

（前期九月三日から六日、後期同九日から十二日まで、TFUギャラリーミニモリ。主催 河北新報社・公益財団法人河北文化事業団、特別協賛 日本航空）

応募点数八百三十二点、入賞・入選作と顧問を始め審査会員などを含めた九百八十六点を展示。例年同様、一般と会友を分けて審査が行われた。

巡回展は九月二十八日から十月二日、大崎市民ギャラリー緒絶の館で開催。主な受賞者は次のとおり。

一般部門

河北賞 山田華風 松本茂子 田代香春 加藤徳善 深山佳風 北沢南鵬 玉淵良章

宮城県知事賞 本間青鴻 仙台市長賞 道塚紫音 宮城県教育委員会教育長賞 太田誠人 高橋奎媛 仙台市教育委員会賞 佐藤玄風 宮城県芸術協会賞 木村朱雲 JAL賞 久保田彩華 東北福祉大学賞 永井明子 東北電力賞 吉田まつみ 東北放送賞 千葉光龍 土井聡 藤崎賞 石川煌風 奨励賞 木村松柳 千坂妙恵 石田蒼龍

会友部門

河北会友賞 菅原紫雲 佐々木青霞 赤間裕子 松本玉水 小泉玲子 会友秀逸賞 大山雪柳 渡邊由紀子 辺見芳紅 津川えり

か 嶋貫敬子

委嘱作家特別賞 末永瑞鳳 黒田清苑 浅野彩紅 小野和子 金沢泉明 菅原脩景

◎第七十三回毎日書道展・東北仙台展

（九月十九日から二十三日まで、アエル 松栄ホール）

漢字、かな、近代詩文書、大字書、篆刻、刻字、前衛書の七部門の作品約九百点を、二会場に分けて展示した。

県内の入賞者

毎日賞 江戸妙鶴 佐藤葵心 高橋彩遊 高橋清琳 近江美雪 長南一恵

秀作賞 遠藤紫桐 小野寺加都 神作朱雀 桑名千鶴 齋田舞夢 佐藤紅栖 新田雄山 阿部雅悠 齋藤杏邑 玉淵良章 佳作賞 阿部緑玲 小山内谷玲 加藤紫翠 金子美千 丸藤紫苑 近藤桜紅 齋藤杏邑 佐々木眸心 中塩朱華 若見苑柚 西館四草 早坂萌香 星野京子 遊佐香風 太田邑蓉 小泉潤 千葉光泉 茂木絢水 菅原誘花 深畑紅華 U23 安部祿乃 加藤美煌 遠山詩穩 芳賀真桜 渡邊夏月 曾根麻由 富樫千尋

◎第三十九回産経国際書展東北展

（九月十三日から十八日まで、宮城県美術館県民ギャラリー）

七〇八月開催の本展の上位入賞者作品に加え、東北在住者の入選・入賞作品など計二百六点を展示。伊達政宗賞 木村翠川

県内の入賞者は、産経国際書会会長賞 岩佐登花

産経国際書会理事長賞 荒井裕水 産経準大賞 齋藤雅貴

無鑑査会員特別奨励賞 田中眞由美 会友賞 一条侑琴

特選 川崎朝子 佐藤良子 秀作 蒔田桜蘭 阿部雲峯

渋谷眞智美 水戸廣臣 など

同時に「二〇二二産経ジュニア書道コンクール」の上位入賞作品四十点も展示した。

◎第五十九回宮城県芸術祭書道展

(七月九日から十二日まで、せんだいメディアアテーク)

前年に引き続き会期を四日間に短縮しての開催となった。

「出品者の熱い思いを感じてほしい」との宮城県芸術協会会員の想いが結集し、開催された。

入賞者

宮城県芸術祭賞 鈴木霽月 宮城県知事賞 建部紘子 仙

台市長賞 遊佐聖心 河北新報社賞 藤原紅雲 宮城県教育

委員会教育長賞 西條玉静 宮城県教育委員会教育長特別賞

佐藤華炎 島津和子 仙台市教育委員会教育長賞 六戸青園

宮城県議会議長賞 大友四峰 仙台市議会議長賞 永澤翠雪

(公財) 宮城県文化振興財団賞 石井秀苑 大友きか子 菅原

紫雲 (公財) 仙台市市民文化事業団賞 笹野美智子 門伝勝

太郎賞 佐々木一峰 宮城県芸術祭奨励賞 赤川恵舟 浅野

彩紅 伊藤煌容 小元

佳香 木村笙園 斎藤

晴雲



「春のあけぼの」佐々木香峰 第9回日展



「翼」 浅野彩紅 第 69 回河北書道展



「高青邱詩」 鈴木霽月 第 59 回宮城県芸術祭書道展

社中展、グループ展、個展ほか

(二月)

◎東北書道新春選拔展(会長 後藤 大峰)

十四日から十九日まで、せんだいメディアアテーク

役員選拔展 縦二・四メートル、横〇・六メートル、同一・八メートル、〇・九メートルなどの大型作品、計六十六点を展示。

◎斉藤文春個展

十八日から二月二十日まで、塩竈市ビルドスペース

塩竈市市制施行八十周年、会場を運営するビルド・フルーガス誕生十五周年を記念した作品展。「言葉が持つリズムやタッチ、身体感を大切にした」という、俳人の佐藤鬼房さんら同市ゆかりの文化人の俳句や短歌を書き表した三十八点を展示した。

◎第一回全国書道パフォーマンスグランプリ

二十三日、イオンモール幕張新都心

全国の地区予選を勝ち抜いた出場十三校が競い、東北・北海道代表の仙台育英校が優勝した。同校は「紡ぐ」をテーマに、和太鼓と舞を交えて日本伝統文化伝承の思いを表現した。

◎第十一回仙台三余会美しいかな書展(会長 田頭 一舟)

二十九日から二月一日、せんだいメディアアテーク

会員による社中展、かな作品五十点のほか、特別出品・賛助出品として、桑田笹舟氏等の作品十点も展示した。

(二月)

◎第二十八回くれない会書展(会長 神作 花紅)

二十二日、二十三日、若林区文化センター

漢字かな、近代詩の作品、十代から八十代までの会員二十四人の作品、計四十三点を展示。

(三月)

◎書道芸術院役員展(総局代表 浜田 堂光)

十九日から二十三日まで、せんだいメディアアテーク

書道芸術院の創立七十五周年を記念した役員作品巡回展。宮城、山形、福島三県の会員作品計約七百点を集めた東北総局展も併催された。香川峰雲氏や加藤翠柳氏など歴代会長のほか、グランプリにあたる春華賞を受賞した大町青蓮の前衛書などが並ぶ。

◎佐々木鈴優書展

二十六日から二十九日まで、東京エレクトロンホール宮城

二〇一二年から十年間、毎日欠かさず書き続けた三千六百五十枚のうち、初の一書である格言の一部を書いた「十駕」など、日々の反省や格言などを揮毫した百五十枚を展示した。

(四月)

◎二〇二二みやぎを魅せる書展(実行委員会代表 佐藤象雲)

三十日から五月四日まで、せんだいメディアアテーク

三十代から六十代の六十一人により、漢字、かな、近代詩文、墨象、篆刻など、様々なジャンルの作品が並び、縦三メートル、横二メートルの大作が目立つ。「宮城」をテーマに据え、それぞれが自由な発想で取り組んだ。

(五月)

◎第六十七回東北書道展(会長 後藤 大峰)

十三日から十八日まで、せんだいメディアアテーク

漢字、かな、篆刻、各部の作品計二百五点が並んだ。

高校・大学生の学生部作品約九十点、幼年から中学生までの教育部作品約千二百点も併せて展示した。

◎加納鳴鳳書展

二十日から二十三日まで、大崎市民ギャラリー緒絶の館

「祈り」をテーマに二十点を展示。一点を除いては全て新作。

与謝野晶子や宮沢賢治の近代詩文のほか、自身の人生観が反映されたという漢字、自作の言葉の作品が並んだ。

(六月)

◎第六十七回圖南書道展(会長 八乙女 清峰)

二十五日から二十九日まで、せんだいメディアアテーク

漢字、かな、調和体、少字の各部門による作品約三百五十点が並んだ。幼年から高校生までの教育部作品約千二百点も展示した。

(七月)

◎玄穹社選抜書展(主宰 千葉 蒼玄)

十八日から八月二十八日まで、道の駅 硯上の里おがつ
漢字、近代詩、墨象など、選抜会員の多彩な作品約五十点を展示した。

(九月)

◎加納鳴鳳書展

十六日から十九日まで、大崎市民ギャラリー緒絶の館

「待つ」をテーマに二十九点を展示。四十年前の和紙にたっぷりとした筆跡で書かれた「曲則全」などの作品が並んだ。

◎高泉冬木作品展

二十二日から二十八日まで、大崎市民ギャラリー緒絶の館

草書と金文、隸書を使い分けて漢字ごとに、躍動感や力強さを表現したという「破体書」作品二十六点を展示した。

◎第十五回瀧墨書会書作展(会長 梶田 瀧田)

三十日から十月二日まで、宮城県美術館

一般の部二十点、教育部百五十五点を展示。一行の大字の漢字や、かな作品なども並んだ。

(十月)

◎東北書道秀抜展(会長 後藤 大峰)

五日から九日まで、せんだいメディアアテーク

役員選抜展 軸装による「茶掛け」体裁の漢字、かな、篆刻、調和体の作品、計百九十一点を展示。吉語や禅語、近現代詩

などの作品が並んだ。

◎第五十二回宮城書芸院展（会長 加納 鳴鳳）

二十日から二十三日まで、大崎市民ギャラリー緒絶の館

近代詩文や漢字などの大作から小品まで約七十点を展示。

大学生、高校生の作品も並んだ。

幼稚園児から中学生までの作品約七百点を集めた教育部展も併催した。

◎第六十一回洗心書道展（会長 中塚 仁）

二十七日から三十日まで、宮城県美術館県民ギャラリー

未就学児から九十代までの会員による漢字やかななど、約三百点を展示。日本三古碑の一つ「那須国造碑」の拓本や唐代の「敦煌經」なども展示した。

（十一月）

◎第七十回川開書道展（日院書道会主管）

三日から六日まで、宮城県美術館県民ギャラリー

「世界遺産」を課題とした。参加団体は百五十八団体。

出品点数は三千四十二点。文部科学大臣賞三点をはじめとする二千百十二点を展示した。

◎玄穹社現代書展（主宰 千葉 蒼玄）

十四日から十二月十二日まで、道の駅 硯上の里おがつ

漢字、近代詩、墨象など、会員の多彩な作品約六十点を展示した。

◎第三回双松会書展（代表 保科 雙苑）

二十三日から二十七日まで、岩沼市図書館

漢字、かななどの作品約二十点、小中学生の作品約三十点を展示した。

◎第三十九回櫻仙書道展（代表 片倉 恵仙）

二十六日から二十七日まで、若林区文化センター

漢字、調和体の会員作品四十五点、教育部作品十五点を展示。櫻墨書院名誉会長植松弘祥氏、同会長植松龍氏の作品も展示された。

（十二月）

◎第七十一回県高校書道展（主催 宮城県教育委員会など）

八日から十一日まで、宮城県美術館県民ギャラリー

漢字、仮名、漢字かな交じりの書、篆刻・刻字、大字の五部門で、推薦、特選、金賞以上には二百九十九点が選ばれた。

特別企画として、岩沼高（岩沼市）など学園の生徒による書七十一点も展示した。

◎第十五回河北小中学生書道展（主催 河北新報社）

二十五日から二十七日、TFUギャラリーミニモリ

最高賞の河北賞を含む上位賞十九点、金賞六十一点、銀賞六〇六点、銅賞六〇五点と入選作品を加えた計三千七百六十八点を展示。今年からミニ条幅部門が新設され、過去最多の応募数となった。

「いよいよこれから」と「充実」という言葉があてはまるような一年であったと感じる。コロナの収束とこの活動が次年度以降に継承され、確かな歩みが再び刻まれていくことを願うところである。

寄稿にあたっては、できる限り情報を収集し取りまとめたが、紙面の都合で割愛せざるを得なかったところがある事、敬称を略させていただいた事をご容赦願いたい。

渋^{しぶ}谷^や青^{せい}龍^{りゅう}

(宮城県芸術協会書道部部长)



「俳句・短歌と書の交感」 齊藤文春個展作品



全国高校書道パフォーマンスグランプリ 仙台育英高校記念写真

写真

はじめに

新型コロナウイルスの猛威も三年目に入り、「新しい生活様式」が普通（ノーマル）となってきた二〇二二年。今度は、ロシアによるウクライナへの軍事作戦が始まった。当初はロシアの電撃的かつ一方的な侵攻により苦戦を強いられていたウクライナだったが、欧米各国の兵器支援により一進一退の膠着状態が続いた。マリウポリやキーウ、チェルノービリといった戦場の激戦を伝える画像を見ると、「写真」は世界で起きた様々な悲劇的な事件を特に瞬時に伝える「メディア」であつたことを思い出させる。これらの侵攻によって既存の国際秩序は揺らぎ、国家間の国境や信頼といった当たり前と思われていたものが激変した一年だつた。

しかし、なんと言つても一番驚いたのは、安倍元首相が狙撃され亡くなったことだ。先進国である日本の総理大臣経験者がテロによって死亡するという事件は大変驚愕した。暗いニュースばかりではなかつた。スポーツでは大変盛んな年だつた。「サッカード杯」の日本代表戦は国民の多くの胸を熱くし

た。野球では大谷翔平氏のベーブ・ルース以来の二桁勝利二桁本塁打の大活躍が告げられた年となつた。更に夏の甲子園では、仙台育英高校の優勝は東北勢としては初の快挙となつた。また「北京五輪」の日本勢も、メダルが冬季最多となつた。それから、今年はいくさんの有名人が他界した年であつたとも言える。エリザベス英女王、ミハイルⅡゴルバチョフ氏、サッカー選手のペレなどの逝去は世界に驚きを与えた。世界の人口は八十億人を突破。原油の急騰、円安に歯止めがかからず商品の値上げが相次いだ。

さまざまなニュースは多くの写真画像と共に世界を駆け巡る。世界史の転換点ともいえる激動の一年でもあつた。それでは今年の全国の写真展の概況を振り返りたい。

国内の写真展の概況

長く続いたコロナ禍によって、文化芸術のジャンルも、総じて大きなイベントは控えられ少なくなつてきていた。収束と拡大を交互に繰り返すこの感染症により、大きなイベントの運営はとても困難になつていた。しかし、その様な中でも

事前の予約や、会話を抑制した制限付きの美術鑑賞はかなり「新しい生活様式」が定着されてきたように思う。大型の展覧会についても、静かにそして着実に開催が続いてきた。大きなミュージアムについて（特に海外から巡回されてきたプロックバスター展など）は、来館者の爆発的な増加が大きな課題であったが、インターネットを通しての予約入場システムを活用しながら、安定的に運営させるということが定着してきた。

まず四月。コロナ禍を機に秋に会期を移して開催してきた、「KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭二〇二二」が従来の四月・五月の会期に開催された。今回で十回目。建築家の遠藤克彦氏の「遠藤克彦建築研究所」は、今回は京都市京セラ美術館別館にて行われているアメリカ人写真家アーヴィング・ペンの作品のセノグラフィ―（展示空間デザイン）を担当し話題となった。同じくこの時期、話題となったのがアーティゾン美術館で開催された、「ジャム・セクション 石橋財団コレクション×柴田敏雄×鈴木理策 写真と絵画―セザンヌより柴田敏雄と鈴木理策」である。とてもよく練りあげられ充実した展示だったといえる。そして構想約四十年、準備室発足から約三十年。ついに「大阪中之島美術館」がオープンした。その開館記念展のひとつが「みんなのまち 大阪の肖像（一）第一期／「都市」への道標。明治・大正・昭和戦前」展である。

絵画、版画、写真、ポスター、書籍、映像などの作品や資料が約二百七十点展示されたが、中でも写真は秀逸な作品が多かった。

それから、カスヤの森現代美術館で、仙台市出身の中村ハルコ氏の「光の音 Part II: echo」が開催された。故中村ハルコ氏は、二〇〇〇年の写真新世紀展において、「海からの贈り物」でグランプリを受賞。その才能が惜しまれた早過ぎる逝去から十六年。没後、写真展を経て、写真集『光の音 pure and simple』（フォルマーレ・ラ・ルーチェ、二〇〇八）にまとめられた作品の続編というべき企画だった。

今年の写真展での大きな話題は、写真のみならず広く現代美術界を代表する世界的アーティストのゲルハルト・リヒターの回顧展だった。今年で九十歳。久しぶりの日本の美術館でのメモリアルなタイピングで、シリーズから選ばれた百二十二点が展示された。中でもとりわけアウシュビッツ・ビルケナウ収容所で密かに撮られた四枚の写真イメージから描かれた「ビルケナウ」。多くの謎を秘めたこの作品は、今でも心をざわつかせる作品と言える。

秋から冬にかけては、今年で十九回目となる東京都写真美術館の企画展「日本の新進作家」が開催された。このタイピングにあわせて、二階、三階、地下と、写真美術館の全てをつかって二つの企画展も同時に開催された。「見るは触れる

日本の新進作家 vol.19、「野口里佳 不思議な力」、そして「写真新世紀三十年の軌跡展 写真ができること、写真でできたこと」である。「野口里佳展」と「写真新世紀三十年の軌跡展」は筆者にとっても大変感慨深い展示であったし、「新進作家展」との対比によって、日本の写真表現が歩んできた道のりと現在の多様な表現について、しみじみと感じることとなった。そして、最後になるが、やはり日本写真界の生きたレジェンドといえば、「祈り・藤原新也」展の藤原新也氏に他ならないだろう。五十年以上にわたる表現者としての歩み、そこに産み落とされてきた写真、書、絵画、そして言葉を一堂に会した大展覧会である。初期作から最新作まで、二百点以上の作品が並ぶ会場だった。それでは、県内の状況を見ていきたい。

一月―三月の動き

○「瀬戸正人 記憶の地図」

会期 二〇二一年十二月四日―二〇二二年一月三十日

会場 福島県立美術館（福島県福島市）

現代日本を代表する写真家の一人として高い評価を受けている瀬戸正人さんの写真展。本展では、タイと日本を往還しながら、半世紀以上にわたりアジア各地の人々にレンズを向けてきた瀬戸さんのデビュー作から最新作までを辿った。

○第五十八回観光のしおがま写真コンクール

会期 一月二十五日―四月十四日

会場 ふれあいエスブ塩竈など（塩竈市）

塩竈市の自然や史跡、行事の写真を募ったコンクール。市内外から百三十九点の応募があり、審査会で入賞作品十八点が決められた。入選作品は観光パンフレットやリーフレットに使われ、塩竈市のイメージ向上につなげられる。

○「東日本大震災発生十年特別企画展 あの時、現在 そしてこれから」

会期 二月五日―三月二十一日

会場 リアス・アーク美術館（気仙沼市）

震災発生直後から現在までの沿岸部の風景の変化に注目し、人々の心や地域文化への影響についても考察した展示。震災直後の気仙沼市や南三陸町の写真約三百五十点をはじめ、十年が経過して整然とした街並みに生まれ変わった、現地の様子を展示した。

○「スマホ大衡村百景展」

会期 二月五日―三月十三日

会場 宮城大学大和キャンパス図書館（大和町）

スマートフォンのカメラで撮った大衡村内の風景などを募り、展示した企画展。中学生から六十代までの二十九人が出品した。自然風景をはじめ、農作業や子どもの日常の様子な

どを映した四十点の写真が並んだ。

○「日常 フォルダの中の好きなモノ」

会期 二月六日～二十二日

会場 角田市市民センター（角田市）

主催 宮城県教育委員会、仙南二市七町教育委員会

仙南二市七町の住民らがスマートフォンのカメラなどに収めた、景色や暮らしの一場面を集めた写真展。身近な自然や旅先での風景、育児に取り組む若い父親の姿など、多彩なモチーフの作品約百二十点が展示された。

○「こダネ！」

会期 二月十八日～二十七日

会場 福沢市民センター（仙台市青葉区）

仙台市青葉区の東照宮付近の今と昔を伝える写真展で、本展は二か所目となる開催。二〇二一年十二月に、五枚の写真パネルで始まった本展は、高齢者の地元愛を覚醒させ、地域住民から百枚以上の作品が持ち込まれた。

○「四国八十八カ所霊場遍路より 折り part 二 勤行」

会期 二月二十五日～三月一日

会場 東北工業大学一番町ロビー（仙台市青葉区）

東日本大震災を機に仙台市から高知県に移住し、四国遍路の巡礼者を撮り続けた写真作家、野沢文夫さんの写真展。巡礼者の深いしわが刻まれた手、一心に合掌する様子など、巡礼者の

手をクローズアップしたモノクロ写真五十四点が展示された。

○「The Unseen―被災地の見えない気配―」

会期 三月一日～三十一日

会場 多賀城市立図書館（多賀城市）

仙台市の写真家、木戸孝子さんの写真展。東日本大震災の被災地を撮影した作品をまとめた写真集より、二〇一一年～二〇二一年に七ヶ浜町や名取市などで撮影した写真二十一点が展示された。

◎「おらほのアルバム―縁側で見るまちのオモイデ写真―」

会期 三月一日～六月十九日

会場 せんだい3・11メモリアル交流館（仙台市若林区）

仙台市沿岸部で東日本大震災前に撮影された写真を展示し、かつての風景や暮らしをたどる企画展。写真をもとに語り合い、地域や震災について考えるきっかけにしてほしい、という目的で企画され、市民から募った約百点の写真が展示された。

○銀河浴写真展

会期 三月十八日～二十二日

会場 東北工業大学一番町ロビー（仙台市青葉区）

仙台市出身の天文写真家、佐々木隆さんの個展。宮城蔵王の樹氷の頭上に輝く星空を捉えた作品など、東日本大震災被災地を含む、国内外の夜空を撮った三十五点ほどの写真が展示された。

○「小斎伝統 奉射祭 三十年の軌跡」

会期 三月二十四日～三十一日

会場 小斎まちづくりセンター（丸森町）

主催 小斎振興協議会、小斎奉射祭保存会

丸森町小斎の鹿島神社で続く「奉射祭（やぶさめ）」が、新型コロナウイルスの感染拡大で三年連続の中止となったため、住民に写真で振り返ってもらおうと企画された。近年に撮影された写真約四十点が展示された。

○宮城オルレ気仙沼・唐桑コースフォトコンテスト

会期 三月二十七日～五月二十九日

会場 唐桑半島ビクターセンター（気仙沼市）

主催 気仙沼市観光協会唐桑支部

韓国版トレッキング、宮城オルレの気仙沼・唐桑コースをテーマにしたフォトコンテスト。オルレコースで撮影した風景や動植物などの写真を対象として、プリントとフェイスペインクの二部門で行われ、合わせて三十四人から百点の応募があった。

四月―六月の動き

◎「第二十五回仙台コレクション」

会期 四月十二日～十七日

会場 SARP せんだいアーティストランプレイス（仙台市青葉区）

変わりゆく仙台市の風景をモノクロ写真で記録するプロ

ジェクト「仙台コレクション」の今回で完結となる展覧会。作品はモノクロでの「表現」を目指さず、記録に徹した。食堂や理髪店、ビルの間の木造家屋などを、四十一一点の写真が展示された。

○第二回加美町インターナショナル写真展

会期 五月十七日～六月二十七日

会場 宮崎公民館（加美町）など

主催 加美町役場

加美町の魅力を外国人の視点で紹介する写真展。町内外の外国出身者十七人が「町の映えスポット」や「町のご当地グルメ」をテーマに撮影した写真、二十五点が展示された。

七月―九月の動き

◎中村ハルコ「光の音 Path・echo」わたしと呼ばばあなたが答え、あなたが呼べば わたしはここに。

会期 七月七日～九月四日

会場 カスヤの森現代美術館（神奈川県横須賀市）

○写真展・写真公募展「フォトサミット in sendai 二〇二二」

会期 七月十六日～十九日

会場 せんだいメディアテーク（仙台市青葉区）

主催 宮城県芸術協会、県、仙台市、河北新報社など

第五十九回宮城県芸術祭が開催された。写真展には七十三点、フォトサミットには全国から応募された千二百二十一点のうち、入選・入賞作品百六点が披露された。

○「町の顔二〇二二」

会期 七月二十四日～八月二十日

会場 川北交流広場、中町商店街（栗原市）

主催 なかまち振興会

旧若柳町出身の金野さんが、「若柳の誰もが町の主人公」町の顔」をテーマに撮影したモノクロ写真を展示した写真展。地元にも暮らす隣近所の人をモデルにした写真二十二点が、商店街や広場に展示された。

○「平和を願って戦争写真展」

会期 八月十二日～十四日

会場 仙台市福祉プラザ（仙台市青葉区）

主催 宮城平和遺族会

太平洋戦争中の写真から平和の尊さを伝える写真展。仙台空襲直後の街の焼け跡や、戦死者の遺骨が車に載せられ運ばれていく様子など、戦時中の写真約四十点が並んだ。

○リボン・アート・フェスティバル二〇二二～二〇二二〔後期〕

会期 八月二十日～十月二日

会場 石巻市市街地、牡鹿半島

主催 リボン・アート・フェスティバル実行委員会

宮城県石巻市を舞台とした、アートと食、音楽の総合芸術祭。東日本大震災の被災地の復興を後押ししようと二〇一七年から始まった。五つの会場で計二十六作品が展示され、歌手のスカシカオさんによる音楽イベントや、期間限定のレストランもオープンした。

○第二十七回写団みちのく写真展

会期 八月二十四日～二十八日

会場 大崎市民ギャラリー（大崎市）

主催 写団みちのく

大崎地域の写真愛好家で作る「写団みちのく」の三年ぶりとなる写真展。七十六点の作品のうち四十点は、今回のテーマである「山」にちなんだ写真で、山の魅力をそれぞれの感性で撮った作品が並んだ。

○仙台写真月間二〇二二

会期 二〇二二年八月三十日～十月三日

会期 八月三十日～九月四日

① 八月三十日～九月四日

② 八月三十日～九月四日

③ 九月六日～九月十一日

④ 九月六日～九月十一日

⑤ 九月十三日～九月十八日

⑥ 九月二十日～九月二十五日

⑦ 九月二十八日～十月三日

会場 仙台アーティストランプレイス

作家 ① 黒田菜月「動物園で見つめる先に、」

② 阿部明子「土地をぬう道、ヤトがくる」

③ 松山隼「Meadow after waves」

④ 高橋親夫「ものが語る土地」

⑤ 城田清弘「フラットハウス」

⑥ 坂本政十賜「Genius Loc 東北」

⑦ 植田優子「分室」

「仙台写真月間二〇二二」と題して七人の作家のそれぞれの写真展示を一月にわたって連続で開催した。

また「仙台写真月間二〇二〇―二〇二二」と題して十一人の作家による過去作・新作を発表する企画展を開催した。他に、上映会やアーティストトークイベントなど、さまざまな関連プログラムを会期中に開催した。

関連プログラムアーティストトーク

九月四日 若山満大×黒田菜月×阿部明子

九月十日 佐藤豊×高橋親夫

九月十一日 高田彩×松山隼

九月十七日 大沼洋美×布田直志×城田清弘

九月二十四日 坂本政十賜×植田優子

○せんだい21アンデパンダン展

会期 九月二十八日～十月九日

会場 中本誠司現代美術館（仙台市青葉区）など六ギャラ

リー

主催 せんだい21アンデパンダン展実行委員会

仙台市内の六ギャラリーなどで開かれた無鑑査の公募展。三年ぶりに完全対面方式で開催され、映像作品や創作楽器なども展示された。社会の動きを敏感にとらえた作品から自己の内面を掘り下げた意欲作まで、多彩な作品が並んだ。

十月―十二月の動き

◎ドレスデン国立古典絵画館所蔵フェルメールと17世紀オランダ絵画展

会期 十月八日～十一月二十七日

会場 宮城県美術館（仙台市青葉区）

主催 宮城県美術館、河北新報社、仙台放送

十七世紀オランダ絵画約七十点を紹介する絵画展。なかでも、フェルメールの「窓辺で手紙を読む女」は、四年にわたる調査と修復作業後の初公開であり、連日多くの観覧者が訪れた。また、レンブラント、メッソー、ファン・ライスダールなどの十七世紀オランダ絵画の黄金期を彩る名品も併せて展示された。これらの絵画は写真誕生の黎明期を語る上でも非常に重要な作品であると言える。

○第二十九回県高校写真展

会期 十一月九日～十三日

会場 宮城県美術館（仙台市青葉区）

主催 宮城県高等学校文化連盟写真専門部

県内四十五校の生徒が撮影した三百六十六作品が展示された。身近な景色や活気あふれる催し、学校生活の様子などを切り取ったさまざまな作品が集まった。写真部顧問やプロの写真家による審査の結果、このうち十六点が入賞作品に選ばれた。

○第三十回宮城シニア美術展

会期 十二月一日～四日

会場 宮城県美術館（仙台市青葉区）

主催 宮城県社会福祉協議会

六十歳以上のアマチュアを対象にした美術展。日本画、写真、工芸などの五部門から計二百十四点の応募があり、最高齢の出展者は九十二歳だった。

○「11」ダネー！

会期 十二月一日～九日

会場 上杉山中学校（仙台市青葉区）

仙台市内を定点撮影し、新旧の写真を比べる写真展「ここダネー！」の一環となる展示が上杉山中で開かれた。展示された写真はJR仙台駅や宮城県庁など、市内の中心部十か所を

撮影したもので、現在の写真の一部は同校生徒が撮影した。

○第十回駒美会写真展

会期 十二月九日～十一日

会場 栗原文化会館（栗原市）

主催 栗駒写真クラブ駒美会

栗原市の写真愛好家の作品を紹介する写真展。会員十三人の写真、計六十八点が出展され、栗駒山の雪景色や田園風景などを収めた写真が並んだ。十回目の節目を迎えた今回は新コーナー「思い出のベストショット」も開設された。

写真集

◎『3・11キラクのキロク、そしてイマ。』

仙台市の市民団体「3・11オモイデアーカイブ」が発刊した、「3・11キラクのキロク」シリーズの第三弾。市民から提供された震災直後の写真と、十年間にメンバーが同じ場所で撮影した写真の、計百二十九点が掲載された。

◎『十年の幸福写真』

東日本震災でのボランティアをきっかけに石巻市へ移住した写真家、平井慶祐さんによる写真集。被災地で生きる人たちの今を切り取り、「石巻の人たちの未来が幸福であってほしい」という願いをこめた。

○庄子典男さんの作品集

仙台市太白区のアマチュア写真家、庄子典男さんが出版した写真集。七年前に間質性肺炎を発症した庄子さんは、それでも「カメラを構えると元気が湧いてきます」と、酸素ボンベを携え、週一回のペースで東北の自然を撮り続けている。

その他

○写真展示館「南三陸の記憶」の改装

会場 佐良スタジオ（南三陸町）

南三陸さんさん商店街で、東日本大震災前後の町の様子を伝える写真展示館「南三陸の記憶」が、大型スクリーンを設置し、グッズ売り場を広げてリニューアルした。より入りやすく、記憶に残る見せ方になるように改装が行われた。

○田沼武能氏死去（六月一日）

世界の子どもたちの撮影をライフワークとし、文化勲章を受けた写真家の田沼武能さんが、九十三歳で死去した。田沼さんは世界百か国以上を訪れて、戦争や貧困の中でも瞳の輝きを失わない子どもたちの写真を撮影した。

おわりに

今年は数多くの著名人の訃報を聞いた年であった様に思う。年末のニュースに取り上げられていた人を見るだけでも、た

とえば、石原慎太郎氏（八十九）、西村京太郎氏（九十一）、白川義貞氏（八十七）、藤子不二雄A氏（八十八）、青山真治氏（五十七）、田沼武能氏（九十三）、森英恵（九十六）、三宅一生氏（八十四）、アントニオ猪木氏（七十九）といった諸兄が泉下の客になった。昭和生まれの筆者にとってはこういった時代を彩った著名人の旅立ちとは、時代の移り変わりを痛切に感じる。

筆者の身内で不幸があり、それで苦労したのが、遺影の準備である。通夜や葬儀の準備の中で、一番忘れてしまいがちななかなか遺族が気に入った遺影を仕上げるのができず、困惑するのだそう。遺影は今の時代、動画や連続写真といったものもあるそうだが、やはり静止画で紙にプリントされ黒縁の額に入っている写真が主流である。写真黎明期の写真家の大切な仕事の一つに、肖像写真の撮影という仕事があった。フランスの写真家ダゲールが発明したとされる「ダゲレオタイプ」に始まり、写真史における名作と言われるものの中には肖像写真が数多く存在する。

その中で、とある男性誌が始めた企画に驚くものがあった。多くの著名人が熱望する写真家に遺影・プロフィール写真を撮ってもらおうという前代未聞のプロジェクトだ。撮影当日はプロのヘアメイクを用意し、撮影後はその写真家と一緒に写真を三枚セレクトし、セレクトの一枚はプリントして額装さ

れる。価格は二百二十万円で限定四名。確かに一瞬を切り取る金額としては高額だが、その遺影が百年も使われるとしたら思わず納得してしまうかもしれない。遺影のプリント写真は残された遺族にとって故人の最期の記憶であり、また肉体的な質量は失われたとしても、その人をこの世に繋ぎ止める、唯一残された紙に焼きつけられたアウラなのかもしれない。

清^し

水^{みず}

有^{もち}

(せんだいメディアアーツ企画・活動支援室長・写真史)



写真展「おらほのアルバム～緑側で見るまちのオモイデ写真～」

会期 3月1日～6月19日 会場 せんだい3・11メモリアル交流館（仙台市若林区）



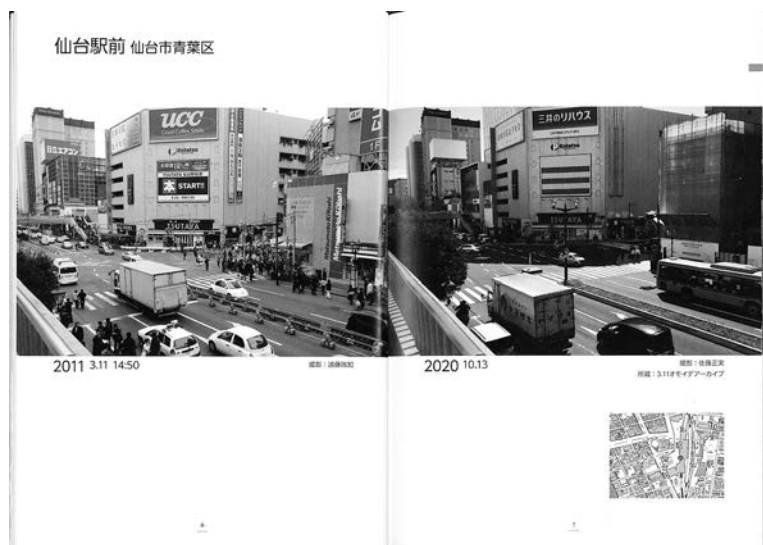
写真展「第25回仙台コレクション」

会期 4月12日～17日 会場 SARP 仙台アーティストランプレイス（仙台市青葉区）



中村ハルコ「光の音 Part II - echo」 “ わたしが呼べば あなたが答え、あなたが呼べば わたしはここに ”

会期 7月7日～ 9月4日 会場 カスヤの森現代美術館（神奈川県横須賀市）



写真集『3・11キヲクのキロク、そしてイマ。』

文芸

概観

第百六十五回芥川賞受賞の石沢麻依が、一月二十八日、宮城県・仙台市・市議会から表彰を受けオンラインでドイツから参加するなど、芥川賞受賞後の華やかな話題にこと欠かなかった。また、河北新報のエッセイも継続連載されている。年末には、令和二年度宮城県芸術選奨新人賞の佐藤厚志が第百六十八回芥川賞候補に挙げられ、二年連続、宮城県在住者の受賞への期待も高まった。

この二つの喜ばしい出来事の間にも、国内外で不穏な動きが続いた。二月二十四日、ロシアがウクライナに侵略。この時代に大国が新たな戦争を開始し、世界中に大きな衝撃が走った。欧米の支援を受けるウクライナの戦いは、未だに終結を見ることなく十二月に入っても継続している。わが国は常に中国、ロシア、北朝鮮の軍事的脅威にさらされている。ウクライナの戦いを見て国民が真剣に防衛を考える大きなきっかけとなった。

三月十六日、深夜に宮城県、福島県で最大震度六強（マグニチュード七・四）の地震が発生。県内の住宅被害は

二万千八百三十九棟に及び、東北新幹線は白石市内で脱線、運転再開まで一ヶ月を要した。災害は日常である。東日本大震災を思い出した人々も多かったことと思う。

七月八日、奈良市内で参議院選挙の街頭演説中に安倍晋三元首相が、銃撃を受け暗殺された。安全を世界に誇る日本で、しかも白昼街頭で起こったこの事件は、社会のどこかに大きな空洞があるように感じさせた。

コロナ禍は日常と化し、七夕祭りが三年ぶりに通常の開催となり、コロナ前の賑わいを取り戻したが、丈の短い七夕飾りが頭上をなびく様子は、なにかひとつもの足りなさを感じさせた。

真夏の甲子園、東北勢十三回目の決勝で仙台育英が優勝。深紅の優勝旗の白河越えの悲願を実現し、東北は歓喜で包まれた。

これらの社会的な出来事は、それぞれに大きな意味を持っている。時間のなかで文学に少なからず影響を及ぼすものと考えられる。コロナ禍からの出口が見えないなかで、感染対策を徹底、各種大会の会場開催と誌上大会が入り混じり、コ

ロナ禍以前の日常が少しずつ回復してきていると考えられる。

河北新報歌壇の選者を三十三年務めた佐藤通雅が八十歳を機に、十二月いっぱい選者を退任。後任選者に「このころの花」の本田一弘。

仙台市を拠点とする俳誌「きたごち」が三十四年の歴史に幕を閉じた。創設者で主宰の柏原眠雨の高齢と会の後継者不在が要因となった。

四月、白鳥省吾記念館の初代名誉館長に佐藤吉一（栗原市）が就任した。

十月、第三十七回国民文化祭美ら島沖縄文化祭二〇二二「詩（ことば）の祭典」で佐々木洋一が審査員を務めた。

第五回仙台短編文学賞（選考委員・玄侑宗久）は、「道の奥には」の大谷勉（亘理町）が選ばれた。選考委員の玄侑宗久は「実在する地名や伝説を無駄なく挿入し、抑制された文章。熟成された悲しみを書くことでさらに熟成され、説得力のある異界を作り上げた」と評した。

宮城県芸術選奨は、『貝に続く場所にて』で芥川賞を受賞した小説家石沢麻依、詩誌『ココア共和国』を主宰、詩集『十二歳の少年は十七歳になった』の秋亜綺羅が受賞した。文芸部門で芸術選奨の二人同時受賞は快挙。

十二月、第三回仙台短編文学賞受賞者である佐藤厚志の『荒地の家族』が第百六十八回芥川賞候補に選ばれた。

伊坂幸太郎（仙台市）が英国推理作家協会賞（ダガー賞）翻訳部門の最終候補にノミネートされた。

仙台文学館の第二十五回ことばの祭典は事前応募形式。ことばの祭典賞、短歌「十六の唇触れるリコーダー音楽室に海が鳴るまで」で花月大師（東京都板橋区）、俳句「何をするわけでもなくて春野かな」山本啓（奈良県葛城市）、川柳は該当作なし。

第三十七回全国高等学校文芸コンクール、優秀賞 詩 村山真子（古川三年） 短歌 星野永遠（気仙沼一年）、優良賞 詩 阿部優（仙台三年） 短歌 大塚悠水（宮一二年） 小説 土井雅美（宮一一年）。

第五十九回宮城県芸術祭文芸部門の入賞者は以下の通り。
宮城県芸術祭賞は短歌部門の八田一夫（仙台市）、宮城県知事賞 詩 斉藤砂火絵（仙台市） 短歌 菊地かほる（大崎市） 俳句 日下節子（大河原町） 川柳 藤本真喜子（大崎市）、河北新報社賞 俳句 佐藤みね（美里町）、宮城県文化振興財団賞 短歌 岡本勝（仙台市）、宮城県芸術祭奨励賞 川柳 粕谷ゆきみ（仙台市）。

十月二十二日、東京エレクトロンホール宮城で第五十九回宮城県芸術祭文芸祭が開催され、ロナ禍で二年連続中止したが再開。休止期間があったにもかかわらず、これまでとは変わらぬ応募があった。席上第七回文芸作品公募入選作品

の表彰が行われた。

詩部門 一般の部最優秀賞・優秀賞該当なし。ジュニアの部最優秀賞該当なし。優秀賞 青山陽咲（岩沼中二年）。短歌部門 一般の部 最優秀賞 濱泰斗（太白区） 優秀賞・宮城県歌人協会賞 猪股玉穂（青葉区） ジュニアの部 最優秀賞 櫻井太智（岩沼中二年） 優秀賞・宮城県歌人協会賞 稲村玲子（仙台白百合学園中一年）。俳句部門 一般の部 最優秀賞 池添怜子（泉区） 優秀賞・宮城県俳句協会賞 升川枝里（青葉区） 優秀賞 荒木那智子（泉区） 前田礼子（宮城野区） ジュニアの部 最優秀賞 渡邊壮介（仙台市桜丘中二年） 優秀賞・宮城県俳句協会賞 佐藤果琳（岩沼中二年） 優秀賞 橋村茉那（仙台市桜丘中三年） 大久凛桜（岩沼中一年）。川柳部門 一般の部 最優秀賞 佐久間洋子（白石市） 優秀賞・宮城県川柳連盟賞 梅津良昭（泉区） 優秀賞 橋爪志津代（太白区） 佐々木隆子（大崎市）。ジュニアの部 最優秀賞 平見啓太（仙台市八木山中一年） 優秀賞・宮城県川柳連盟賞 津川泰輝（仙台市第一中一年）。エッセイの部 一般の部 最優秀賞 間英雄（泉区）。

宮城県芸術祭表彰式は、十一月二十八日、ホテルメトロポリタン仙台で昨年同様、コロナの感染予防のため茶話会形式で実施。主催、共催、受賞者など関係者のみで行われた。

宮城県芸術協会主催の文学散歩は、コロナ禍の状況を踏ま

え、宿泊をホテルの個室とし、十月六日・七日で「秋の庄内とミイラ寺」の旅。参加者二十三名、大日坊、海向寺、山居倉庫、藤沢周平記念館等を訪れた。

新聞関係の選者は、河北新報歌壇は佐藤通雅、花山多佳子、同俳壇は高野ムツオ、西山睦、同柳壇は雫石隆子、朝日新聞宮城版みちのく歌壇は梶原さい子、同俳壇は渡辺誠一郎、同柳壇は木田比呂朗、読売新聞宮城版よみうり文芸歌壇は梅内美華子、同俳壇は辻桃子、同柳壇は千葉朱浪がそれぞれ担当した。毎日新聞宮城版文園歌壇は金沢孝一、同俳壇は坂内佳彌、同柳壇は新藤孝廣が担当してきたが、三月一杯で文園の掲載が終了した。

各部門

詩

第二十三回白鳥省吾賞（栗原市主催）。最優秀賞は、一般の部 為平滯（京都府八幡市）、小中学の部 蜂谷杏琉（栗原市鷲沢小二年）。

第六十三回晩翠わかば賞は「線こう花火」で、ちばきら（登米市上沼小一年）、晩翠あおば賞は「かき氷」で鈴木朋花（仙台市八軒中一年）。

あきは詩書工房主催、第二回秋吉久美子賞 森崎葵（名古屋市）、第二回いがらしみきお賞 伊藤テル（五泉市）、第七

回YS賞 菅沼きゅうり（柏崎市）。

第四十四回青森県詩人連盟賞に白鳥光代（富谷市）の詩集『終着駅まで』が選ばれた。

宮城県詩人会の詩祭、ポエムカフェは中止。

活動としては玉田尊英&松宮栄典の「第二回詩と絵の二人展」（東北工大一番町ロビー 六月十日～十四日）
詩集

宮城県詩人会編『宮城の現代詩二〇二二』 色川幸子『イマジン』の樹 安俊暉『武蔵野』 金起林『作品集Ⅰ 新しい歌』
原田勇男・詩 東北大学OB合唱団楽譜『はじまりのとき』
原田勇男、詩 混声合唱とピアノ連弾のための楽譜『光のかたち』 佐藤円『カイゴノカクゴ』 鈴木修『佐々木喜善年譜』（令和版） 前原正治『詩想の湧く泉の辺で』（エッセイ集）

詩誌

「回生」「霧笛」「ひびき」「風花」「仙台演劇研究会通信ACT」「as」とんてんかん」「ココア共和国」「白鳥省吾研究会会報」「よそ見通勤」「想音窟だより」「風の靴を穿いて」「THROUGH THE WIND」「ササヤンカの村」「次の、明後日」

小説・散文・絵本

第五回仙台短編文学賞は三月六日に決定。大賞「道の奥には」大谷努（亘理町）、仙台市長賞「金魚の帯」なつせさちこ（東

京都）、河北新報社賞「あなたは春名美咲（東京都）、プレスアト賞「帰還する光たち」洗村静樹（埼玉県）、東北学院大学賞「夜を失う」大久保蓮（福島県）が選ばれた。

小説

伊坂幸太郎『マイクロスバイ・アンサンブル』 恩田陸『愚かな薔薇』月曜日は水玉の犬 佐伯一麦『作家の老い方』『Nさんの机で』 斎藤吉勝『くす師・秋成と近世呪術文学』（電子書籍） 石沢麻依『月の三相』 熊谷達也『孤立宇宙』『明日へのペダル』 伊集院静『君のいた時間 大人の流儀 Special』『旅行鞆のガラクタ』 山野辺太郎『孤島の飛来人』『仙台短編文学賞作品集2017～2022』

絵本

あいはらひろゆき『ちよつちよつちよきーん』『えすでいばあズーちきゅうをまもる100さいのばあちゃんたち』『パッピブツペポーのパンケーキ』

文芸誌

「仙台文学」「波動」「新生」（東北新生園） 随筆中心の「みちのくふだん記」 詩と随想の「みちのく春秋」「麦笛」

短歌

宮城県歌人協会の代表者会議が二月二十六日、駅東交流センターで開かれ、令和四年度の事業計画他が決定された。会

長は岡本勝。

第六十九回宮城県短歌大会が河北新報社・宮城県歌人協会主催で六月十日、仙台文学館で開催された。河北新報社賞「ガラス一枚あらぬ遺構の建ちてゐていまゆうらりと西の陽は差す」大和昭彦（石巻市） 宮城県歌人協会賞「さよならも言つてくれずに去る人の別れのように白鳥帰る」三浦周子（仙台市）。

河北新報社・日本歌人クラブ・宮城県歌人協会主催の第四十九回東北短歌大会は十月九日、エルパーク仙台で開催される予定であったが、コロナ禍のため、誌上大会となった。河北新報社賞「汚染土の置き場なりし田耕して飼料米の苗植ゑ終はりたり」山崎ミツ子（南相馬市） 日本歌人クラブ賞「六キロを越えるみどり児双の手にいだけば夏の太陽を蹴る」中野茉莉子（十和田市） 宮城県歌人協会賞「Tシャツの胸にスヌーピー遊ばせて九十二歳の夏が始まる」金野和江（山形市）。宮城県短歌賞・歌人の集いが宮城県歌人協会主催で十一月二十七日、東京エレクトロンホール宮城で開催された。短歌賞は新作二十首の競詠で行われた。宮城県歌人協会賞「修羅の世いまだ」坂野井ふみ（仙台市）「呉藍に木瓜の花芽のふくらみぬ降りくる朝のひかりの中に」他十九首 次席 安部律（仙台市）「しつとりと木の芽を濡らす春の雨つちの匂いを呼び起こしたり」他十九首。

歌集

上林節江『忍冬（すいかずら）』（エッセイ集） 鈴木啓子『ふたつの山』 大坂康子『安寧』

歌詠

「群山」「収穫」「砂丘」「登米短歌」「波濤みやぎ」「麻刈」「北杜歌人」「個性の杜」

俳句

一月四日、第四十六回「宮城県俳句賞」本賞は佐藤信昭（岩沼市）。第十八回滝春秋賞に富澤栄子（仙台市）。第二十八回滝奨励賞に山本峰子（仙台市）。第四十三回角川春樹賞奨励賞に宮野かほる（美里町）。第六回芝不器男俳句新人賞・対馬康子、奨励賞に浅川芳直（名取市）。第五十二回「宮城県俳句大会」は紙上大会であったが、選者講評はユーチューブで初の動画配信を試みた。兼題の部 河北新報社賞は「黙禱の刻まで逢摘みゐたり」及川源作（塩竈市）、宮城県知事賞「北窓を開けB面に針降ろす」星節子（仙台市）、宮城県俳句協会賞は「青邨の居間より見ゆる巣箱かな」伊藤一男（仙台市）、「くちびるを噛み黙唱の卒業歌」木村螢雪子（大崎市）。

佐藤鬼房記念第四回塩竈ジュニア俳句コンクール、佐藤鬼房賞「海鼠あらう誰も傷つけないの」菊地真帆（岩手県水沢高）、ジュニア大賞「おかえりと最初に言った雪だるま」

上村利緒（東京都江戸川区南篠崎小）。

第七十一回登米芭蕉俳句大会が六月に、兼題の部のみで実施された。投句は一般三百六十三句、小・中・高は二千八百九十二句。宮城県俳句協会賞は「少年の書架にデカルト夏に入る」伊藤一男（仙台市）。

俳人協会主催の第三十三回東北俳句大会・宮城大会が九月に紙上大会として開催された。大会賞「蝌蚪生まれる村に帰郷の人増えて」高宮義治（仙台市）、「花は葉に戦は人を数に換ふ」佐藤綾泉（気仙沼市）、「囀りの大樹をのこし廃校す」丸山千代子（仙台市）、「象の背の高きに揺れて春惜しむ」寒河江桑弓（仙台市）。

現代俳句協会主催の第三十六回俳句東北大会・宮城大会は、コロナ禍のため事前投句のみで実施。現代俳句協会長賞に「まつさらな空に手を入れ剪定す」の小野寺東子（一関市）。第十七回大崎市俳句大会は十月九日に開催された。宮城県知事賞に「今年米母となる子へ先づ送り」丸山千代子（仙台市）。十月二十三日、『壺の碑』全国俳句大会はオンラインで開催された。

十一月十三日、第六十八回松島芭蕉祭並びに全国俳句大会の法要は一般参加なしとしたが、俳句大会は通常の開催となった。招聘選者は対馬康子、能村研三。松島町長賞「翁忌の天地を統ぶる光る海」伊藤一男（仙台市）、「海苔簾の海面の小

春翁の忌」赤間学（仙台市）。宮城県知事賞「冬霧のなごりかすかに五大堂」菊地美紀（仙台市）、「箒目の上を落葉の鬼遊び」坂下遊馬（巨理町）。

句集

佐藤みね「稲の香」小田島渚『羽化の街』 及川奈奈夫『鰻捕り』 佐々木潤子『春満月』
句誌

「滝」小銀座「む」宮城野「飛行船」ほそ道「花野」柳絮「荒星」むじな「しろはえ」冬林檎「駒草」きたごち（十二月終刊号）

川柳

第四十九回宮城県利府川柳大会が四月十七日、利府町文化交流センターリフノスで開かれた。宮城県川柳連盟賞に「真ん中は夕陽のために空けておく」を詠んだ鎌田京子（仙台市）が選ばれた。

第七十一回東北川柳大会は九月二十五日、東京エレクトロンホール宮城で開かれ、河北新報社賞に「コンパスを回すわたしのテリトリ」を詠んだ木本朱夏（和歌山市）、川柳宮城野社賞に仁多見千絵（仙台市）が選ばれた。

第四十九回河北川柳投句者大会は十一月五日、東京エレクトロンホール宮城で開かれ、河北新報社賞に「空振りを恐れ

るなかれ警報音」を詠んだ板橋豊子（仙台市）が選ばれた。

第五十一回仙台市民川柳大会は誌上大会となり、仙台市長賞に「葛藤の分だけ深い色で咲く」を詠んだ萩原鹿声（相模原市）が、仙台市民川柳会賞に「生と死の間で揺れるところとは」を詠んだ渡辺進（仙台市）、河北新報社賞に飯田ふく江（岩沼市）が選ばれた。

柳誌

「川柳宮城野」

玉^{たま}

田^だ

尊^{たか}

英^{ひで}

（宮城県芸術協会文芸部長）

洋楽

音楽だけではなく、全ての芸術活動は、社会情勢からの影響は避けられない。令和四年は、二月二十四日にロシアによるウクライナへの軍事侵攻があり、本原稿を執筆している現在（令和五年）も、戦争と言ってよいこの状況が改善するには程遠い。新型コロナウイルスの感染症による社会活動制限は、緩和されつつあるが、通常の文化活動に回復するまでには至っていない。平成二十三年の東日本大震災からは、すでに十年余りの歳月が経過しており、復興は進んでいるが、その傷跡は残り、まだ少なからず生活に支障をきたしている人々もいる。そのような状況下で、復興コンサートなどが開催されている。その内、軍事侵攻と感染症の二点について、音楽関係へどのような影響を与えたのかを、簡略的に挙げておきたい。

○ロシアによるウクライナへの軍事侵攻に関連して

コンクールで、ロシア人音楽家の参加を認めない、ロシアの作品の演奏を排除しようという動きもあった。しかし、仙台国際音楽コンクールでは、あらゆる国籍の参加者に門戸を開いており、第八回のコンクールでも同様の方針をとった。

ウクライナを支援しようという動きは、チャリティーコンサートの開催という形で表れた。五月三十日に開催された、クラリネット奏者のダビット・ヤジンスキーらによる「アンサンブル・コア・ドウ・ロゾー」のチャリティーコンサートなどが挙げられる。

○新型コロナウイルスによる感染症の影響

感染症対策による活動制限は、令和二年頃より始め、現在も続いているが緩和されてきている。しかし、急激な感染拡大によって、中止になったコンサートもある。例えば、七ヶ浜国際村で二月十二日に予定されていた仙台フィルハーモニー管弦楽団特別演奏会などが挙げられる。逆に、過去に中止を余儀なくされたコンサートの延期公演なども見られ、今後そのような傾向は、多少なりとも続くと考えられる。

一. オーケストラ

(1) 仙台フィルハーモニー管弦楽団（以下、「仙台フィル」と省略）

定期演奏会のプログラム構成には、近年、積極的に様々な

ジャンルを取り上げようとしていることが窺える。注目される演奏曲目としては、ジュニファー・ピグドンのハーブ協奏曲（第三百五十一回定期演奏会）、矢代秋雄のピアノ協奏曲（第三百五十五回）などが挙げられる。

指揮者と楽団との関係においても、興味深い定期演奏会がある。常任指揮者の飯守泰次郎が、ブラームス交響曲シリーズを第三百五十五回定期演奏会で完結させた。第三百五十七回定期演奏会では、桂冠指揮者パスカル・ベロが四年半ぶりに登場した。

七月二十三日に仙台フィルハーモニー管弦楽団・山形交響楽団合同演奏会がやまぎん県民ホールで開催され、ブルックナーの交響曲第八番を山形交響楽団の桂冠指揮者、飯森範親が指揮した。

十二月二十四、二十五日には、年末恒例のベートーベンの交響曲第九番の特別演奏会が日立システムズホール仙台であった。指揮は角田鋼亮、合唱は、「仙台フィルと第九をうたう合唱団」などが参加した。

学校コンサート関係では、仙台フィルのメンバーが、新型コロナウイルスの影響によるオーケストラ鑑賞会の代替企画として、令和二年より訪問コンサートを行っているが、仙台市内の小学校に七月から十一月の間、計六十六校を訪問した。

(2) 在京オーケストラ公演

読売日本交響楽団は、創立六十年を記念して東北三県のツアーを行い、十月九日に石巻市のマルホンまきあーとテラスで小林健一郎の指揮で開催した。東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団は、十月十九日に気仙沼市民会館で藤岡幸夫の指揮による特別演奏会があった。

(3) 仙台ジュニアオーケストラ

第三十回定期演奏会が十月二十三日に日立システムズホール仙台で開催され、サンサーンスの交響曲第三番などを太田弦の指揮で演奏した。

二．器楽・室内楽

室内楽作品をさまざまな切り口でプログラムに取り上げるコンサートシリーズ、「ミュージック・フロム・パトナ」（宮城野区文化センター等主催）の公演では、二月十七日、四月二十七日、七月三十一日、十月二十七日の計四回開催され、助川龍、三宅進らが出演した。

仙台フィル首席チェロ奏者の吉岡知広が企画する演奏会シリーズ「イズミノオト」第七回は、二月二十七日に仙台銀行ホールイズミティ21で開催された。この会では、ドビュッシーの作品によるプログラムで、ヴィオラの井野辺大輔、ピアノ

の野平一郎らが共演した。仙台銀行ホールイズミティ21の改修中は、「イズミノオト」の番外編的なコンサートである「イズミノオトドケコンサート」を数回開くことになり、十一月五日にはチェロの吉岡知広とピアノの加藤直子の演奏で、仙台市泉区高森東小学校にて行われた。

宮城教育大学教授でクラリネット奏者の日比野裕幸は、二月二十二日に宮城野区文化センターでリサイタルを開催し、ブラームスのクラリネットソナタ、吉川和夫、松波匠太郎の作品を演奏した。ピアノリストの倉戸テルが共演した。

これまでの仙台国際音楽コンクールの入賞者は、宮城県内での活躍が多く見受けられるが、第六回同コンクールピアノ部門第三位の北端祥人は、七月一日にアイビーホールでリサイタルを行っただけでなく、室内楽の分野などにおいても令和四年には県内で幅広い活動を行った。

ピアノリストの浅野繁は、十月三十日に仙台市シルバーセンターのリサイタルにおいて、ショパンのエチュード作品二十五全曲などを演奏した。

ピアノリストの柴田千賀子は、五月十一日に宮城野区文化センターでリサイタルを、十二月十三日には、ボストン交響楽団ピオラ奏者のマイケル・ザレツキーのリサイタルで共演した。

バロック時代の作曲家であるジャン・マリー・ルクレール

(二六九七―一七六四年)のバイオリンソナタ全曲演奏会を小池まどかが行っており、第三回を十一月五日に仙台市青葉区のスターダストなどで演奏するなど、年内に数回開催した。

チェロ、ピオラ・ダ・ガンバ奏者のエマニュエル・ジラーとバイオリンの神谷美穂らによるアンサンブル・マレツラは、十月三十日に仙台川平教会で演奏会を行い、バロック時代の作品などを取り上げた。

三. 声楽・合唱

令和四年に死去し、合唱指揮者の今井邦男が指導した混声合唱団グリーン・ウッド・ハーモニーは、七月九日に定期演奏会を仙台市青年文化センターで開き、その中で今井の作品も取り上げた。

九月十八、十九日の両日、仙台オペラ協会第四十八回公演「コジ・ファン・トゥツテ」(W. A. モーツァルト作曲)を日立システムズホール仙台で開催したが、オーケストラパートを電子オルガンとピアノで演奏した。

登米市出身の畠山千代子(昭和五十七年没)が書いた詩による女声合唱曲の作曲を、女声合唱団「ハーモニーなでしこ」が小山和彦に委嘱し、十月九日に登米祝祭劇場で初演した。

十二月一日に、演奏団体「ドレミファピアチェレ」によって、メノッティのオペラ「電話」が日立システムズホール仙

台で上演された。

ザ・キングズ・シンガーズの仙台公演が、十二月八日に電力ホールであった。

四、作曲

若い人たちに作曲を通じた良質な音楽体験を提供することを目的とした未来の作曲家コンサートin東北2022（YCC東北主催）は、八月二十一日に宮城野区文化センターパトナホールで開催された。十九作品（内、プレコンサート選出八作品）が選出され、フルートは多久潤一朗、ピアノは田中絢子、菊地みほ（プレコンサート）によって演奏された。

第四十二回宮城県芸術協会音楽コンクールのピアノ部門本選会は、三月十三日に開催されたが、本選課題曲を佐藤博幸（初級）、門脇治（中級）、小山和彦（上級）が作曲し、コンクールの参加者が演奏した。

五、コンクール

第八回仙台国際音楽コンクールが、五月から六月にかけて日立システムズホール仙台で開催された。ピアノ、バイオリンの両部門には五百七十三人が応募し、六十八名が出場した。バイオリン部門では、過去最年少の中野りなが優勝した。なお、日本人では、第二回の松山芽花以来の優勝者となる。ピアノ

部門では、中国のルウオ・ジャチンが優勝した。第二位はヨナス・アウリミラー（ドイツ）、第三位は、太田糸音（大阪府）。第三十七回宮城県管打楽器ソロコンテスト（宮城県吹奏楽連盟、河北新報社主催）が六月五日に加美町の中新田パッパホールであり、八十人が参加した。仙台第一高等学校の山谷こころが宮城県吹奏楽連盟会長賞を受賞するなど数名が入賞した。

第六十五回東北吹奏楽コンクール（東北吹奏楽連盟、朝日新聞主催）が、九月に福島県いわき市のいわき芸術交流館アリオスであり、宮城県から出場した石巻市万石浦中学校、東北学院榴ヶ岡高等学校、東北福祉大学、名取交響吹奏楽団、泉シンフォニックウインドオーケストラが東北代表として第七十回全日本吹奏楽コンクールの東北代表に選ばれた。

第三十四回宮城県合唱アンサンブルコンテスト（宮城県合唱連盟主催）は、十二月十七、十八日に日立システムズホール仙台で開催され、計五十七団体が出場した。仙台青陵中等教育学校合唱部、聖ウルスラ学院英智高等学校合唱部、仙台室内合唱団「紡輝」曜の三団体は河北新報社賞を受賞し、全国大会に出場が決まった。

「陽だまりアンサンブルコンクール」と称された弦楽アンサンブル競技会が、八月に亘理中央公民館であり、四部門七組が出場した。

六. 受賞

十月に開かれた第九十一回日本音楽コンクールのフルート部門で、仙台市出身の畢曉樺（ひつあきか）が第二位に入賞した。

古川黎明高等学校教諭の鈴木麻由子は、十月に開催された国際音楽コンクール東京（一般社団法人カンタームス主催）で、グランプリ部門、歌曲部門とともに第一位に選ばれた。

声楽の小野綾子は、令和四年度宮城県芸術選奨新人賞を受賞した。

七. イベントなど

宮城県庁で開催されている県民ロビーコンサートは、令和四年は定期的に毎月一回開催され、八月のスペシャルコンサートでは、宮城大学管弦楽団などが出演した。

平成二十七年に始まった「第八回仙台・子供の夢ひろば『ボレロ』」は、七月三十、三十一日に、日立システムズホール仙台で開催された。これは、ピアノリスト小山実稚恵の企画で、広上淳一指揮のもと、子供たちと共演した。

とっておきの音楽祭は、六月に開催された。感染症対策でオンライン開催が続いていたが、三年ぶりの屋外開催となった。

定禅寺ストリートジャズフェスティバルは九月十、十一日の

両日に行われた。コロナウィルスの「第七波」を警戒して、規模をかなり縮小しての開催だった。最終的には九十八組の出演という形になった。

第十六回仙台クラシックフェスティバル（愛称せんくら）が九月三十日から十月二日まで開催され、福田進一（ギター）、津田裕也、山下洋輔（ピアノ）、上野耕平（サクソフォン）らが出演した。フィナーレ公演では、太田弦指揮の仙台フィルが、伊藤圭（大崎市出身）をソリストに迎えて、モーツァルトのクラリネット協奏曲を演奏した。

第五十九回宮城県芸術祭（県芸術協会、河北新報社等主催）関係では、音楽コンクール入賞者による第六回ガラコンサートが九月にあった。

十二月四日に角田ベートーヴェン第九「喜びの歌」を歌おう会の公演は、かくだ田園ホールで開催された。指揮は佐藤寿一、オーケストラ編成は、ピアノ連弾と弦楽器を中心としたミニオーケストラで行った。

第四十四回東北吹奏楽の日演奏会が、十二月二十五日にトークネットホール仙台であり、二十六団体が参加した。

八. その他

日本初の童謡専門誌を発行した「おてんとさん社」がルーツの「おてんとさんの会」が、組織的な活動を休止すること

になった。おてんとさん社は、郷土文化研究家の天江富弥と詩人のスズキヘキを中心に結成され、童謡専門誌を創刊した。会の休止の理由は、会員の高齢化による。

小^こ山^{やま}和^{かず}彦^{ひこ}

(作曲家・宮城学院女子大学教授)

邦楽・芸能

古典芸能

令和四年も新型コロナウイルスの影響は継続した。感染対策を徹底した演奏会の開催が少しずつ増えた一方で、感染者拡大の状況下で中止されたものも多かった。以下に、令和四年の古典芸能の公演について、開催状況を「雅楽」「能楽（能・狂言）」「歌舞伎」「文楽」の順に報告する。

雅楽

仙台市青葉区の大崎八幡宮で、八月十二日の夜、御鎮座記念祭の後に「雅楽の夕べ」が開催され、今様「白薄様」、神前舞楽「浦安の舞」、管絃「太食調音取」「仙遊霞」「抜頭」、御神楽「其駒・人長舞」、神前神楽「萬代の舞」、退出音声「長慶子」が演奏された。また、翌十三日には「第十一回雅楽をうたおう 雅楽の夕に、」が開催された。平成二十三年に東日本大震災からの復興を祈念して始まった催しであるが、前回の第十回を区切りとし、今回からは雅楽に親しんでもらうことを目的とした催しとなった。東京の雅楽団体である伶楽舎

と大崎八幡宮の職員を中心に、一般の雅楽愛好家も一部参加する形で実施され、管絃「三台塩急」「越天楽」「鶉徳」「胡飲酒破」、舞楽「陵王」、神楽「萬代の舞」「青葉の舞急」が演奏された。来場者が歌で雅楽の演奏に参加できる曲もあり、雅楽を身近に楽しむ良い機会となったと思われる。

十一月十七日に名取市文化会館大ホールで「雅楽の友垣宮城」が開催された。東京の雅楽団体である特定非営利活動法人雅楽道友会の主催公演で、宮城野雅楽会が共演、また山形県の林家舞楽が客演し、管絃「越天楽」、舞楽「青海波」「還城楽」、林家舞楽による「納曽利」と「陵王」、雅楽道友会による「陵王」が演奏された。客演の林家舞楽は、中央の舞楽の変遷に影響されずに古い舞楽の型を留めていることが特徴で、「陵王」を二つの演奏で鑑賞できる大変貴重な機会であった。



「雅楽の友垣 宮城」で「環城楽」を演じる
宮城雅楽会（写真提供：宮城雅楽会）

能楽

白石市の碧水園能楽堂で一月十六日と二十三日に「新春碧水園能楽堂特別公演」が開催された。能楽協会による「日本全国能楽キャラバン」としての公演であった。十六日は観世流公演で、観世喜正による素謡「神歌」、観世喜之による仕舞「景清」、駒瀬直也による仕舞「屋島」、石田幸雄による狂言「鬼瓦」、小島英明のシテによる「安宅 勸進帳 瀧流」が上演された。二十三日は喜多流公演で、中村邦生らによる素謡「翁」、野村太一郎のシテによる狂言「萩大名」、佐々木宗生による仕舞「西行桜」、塩津哲生・香川靖嗣・佐々木多門らによる能「石橋連獅子」が上演された。両日とも本公演前に「碧水園初めに能・狂言に親しむ会」が開催され、地元の小中学生を招待し、十六日は小島英明による解説と、高野和憲による狂言「柿山伏」、小島英明による能「土蜘蛛」が、二十三日は塩津圭介による解説と、野村裕基のシテによる狂言「附子」、佐々木多門のシテによる能「羽衣」が上演された。

東京都在住の観世流能楽師八田達弥と森田流笛方寺井宏明による「能楽の心と癒やしプロジェクト」は、三月十一日に気仙沼市で活動を行っている「ともしびプロジェクト」主催のライブ配信「3・11 BLUE CANDLES NIGHT」に参加し、気仙沼市のキャンドル工房に灯された蝋燭の灯の前で観世流能「葛城」を上演した。

五月十四日に電力ホールで「第24回青葉能」が開催された。青葉能の開催は三年ぶりであり、佐々木多門のシテによる喜多流能「養老」、人間国宝の野村万作らによる和泉流狂言「栗焼」、人間国宝の友枝昭世のシテによる喜多流能「枕慈童」が上演された。

夏休みに能・BOXで開催される山中逐晶による「こどものための能講座」は七月二十二日から八月四日までの日程で実施され、八月五日に発表会を行った。

十月三十日に能・BOXで仙台市能楽振興協会による「令和四年囃子と仕舞の会」が開催され、仙台金春会、仙台康謡会、仙台囃子会、金春花修会、香扇会、仙台寛松会、仙台喜宝会などの団体が日頃の稽古の成果を披露した。

歌舞伎

三月十二日に「中村勘九郎・中村七之助 春暁特別公演 二〇二二」が、東京エレクトロンホール宮城の大ホールで開催された。昼夜二公演で、舞踊「高坏」と、七之助が四役を



3年ぶりに開催された「第24回青葉能」(写真提供: 河北新報社)

早替りで演じた『於染久松色読販』より「隅田川千種濡事」が上演された。

例年七月に宮城県文化振興財団が主催し、東京エレクトロンホール宮城で行われていた松竹大歌舞伎公演は、新型コロナウイルス感染症拡大予防のために三年連続で巡業中止となった。

文楽

毎年秋に行われる「人形浄瑠璃 文楽」の公演は、十月十日に電力ホールで開催された。昼の部は『花競四季寿』より「万歳」「鷺娘」、『冥途の飛脚』より「羽織落としの段」と「封印切の段」が、夜の部は「団子売」と『菅原伝授手習鑑』より「寺入りの段」「寺子屋の段」が上演された。

その他

能-BOXで昨年度から始まった「能-BOXゼミナール」の二年目は、「歴史から繙く日本の芸能」という総合テーマで五回のゼミナールが行われた。三回目の九月十七日は平曲演奏家の山内とも子が「平家物語と琵琶」について実演を交えて紹介した。

十月十日に登米伝統芸能伝承館「森舞台」で「平家物語の世界」と題した公演が行われた。日本舞踊の中川雅寛、琵琶

の熊田かほり、尺八の高橋聴雪、観世流能楽師の山中迺晶が共演する形で、山中の脚本・構成・演出による作品「耳無シ芳一」を音楽劇として上演した。

十二月五日に仙台市戦災復興記念館記念ホールで、平家がたり友の会の主催による「平家がり第百回記念演奏会」が開催された。



能-BOX ゼミナール「平家物語と琵琶」
(写真提供：せんだい演劇工房 10-BOX)

小塩さとみ
(宮城教育大学 教授)

民俗芸能

民俗芸能は年中行事で演じられるだけでなく、舞台公演や地域おこしのイベントなどでも演じられる。令和四年も、新型コロナウイルスの影響は継続し、延期や中止となった催事もあったが、三年ぶりに開催できた行事もあった。

一月九日に白石市古典伝承の館「碧水園」で舞台開きが行われ、白石市指定民俗文化財である榊流大町神楽は「神子の舞」を披露した。

一月十六日に栗原市金成の延年閣で南部神楽伝承推進協議会の各団体による「舞初め公演」が開催され、県内からは赤谷神楽（登米市）が「一の谷敦盛首取りの場」と「八雲舞（大蛇退治）」、鶯沢神楽（栗原市）が「敦盛、玉織姫別れの場」を披露した。

三月二十日に栗原市金成の延年閣で南部神楽公演が行われ、栗原市の鶯沢神楽が「曾我兄弟元服の場」、登米市の赤谷神楽が「源平討魔伝より屋島の合戦」を披露した。

四月三十日に栗原市の風の沢ミュージアム二〇二二年度企画展「混思考」のオープニングセレモニーで、栗原市内の中部神楽・栗原神楽・城生野神楽・川北神楽の若手による南部神楽ユニット神友楽が演奏を行った。

五月二日に岩手県平泉町の「春の藤原まつり郷土芸能公演」に栗原市の栗原神楽が出演し、毛越寺と平泉駅前と金色堂前で「五穀舞」を披露した。

六月十四日に「第十六回神楽共演石越大会」が三年ぶりに開催され、登米市石越町の赤谷神楽（鞍馬山の牛若丸）、登米市登米町の岡谷地南部神楽保存会（叢雲）、登米市豊里町の上町法印神楽（笹結）、栗原市鶯沢の鶯沢神楽保存会（那須与一扇の的）、登米市石越町の長下田神楽保存会（高野山物語より石童丸）ほか十団体が参加した。

七月十八日に栗原市の栗原寺で源義経公生誕祭が開催され、中部神楽による「義経一人舞」、城生野神楽による「屋島合戦継信最期の場」、栗原神楽による「勧進帳」が奉納された。

七月二十四日に女川町海岸広場で「第五十五回おながわみなと祭り」が開催された。東日本大震災以後中断していたため、十二年ぶりの開催であった。令和二年に再開予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大のために延期となっていた祭りがようやく復活できたことは、地域にとって大きな喜びであった。船上で獅子振りを披露する



第 55 回おながわみなと祭りでの海上獅子舞（写真提供：女川町）

「海上獅子舞」には十団体が参加、各地区の獅子が船に乗り、女川湾内で勇壮な舞を披露した後、岸壁でも観客の間近で獅子振りを行った。また特設ステージでは女川潮騒太鼓轟会と江島法印神楽の演奏が行われた。海上獅子舞やステージ演奏は、YouTubeでも配信された。

七月三十日と三十一日に仙台駅東口宮城野通りにて「夏まつり仙台すずめ踊り」が開催された。

七月三十一日に登米市迫町で「佐沼夏祭り」が三年ぶりに開催され、佐沼鹿踊が奉納された。

八月六日に「第七十回気仙沼みなと祭り」が開催された。当初予定されていた打ばやし大競演は中止となったが、気仙沼太鼓連合の有志が「安波囃子」「剣囃子」「通り囃子」「海潮音」の四曲を披露した。

八月二十一日に栗原市金成の延年閣で「暑気払い南部神楽公演」が行われ、登米市の赤谷神楽が「鞍馬山の合戦」を、栗原市の鷺沢神楽が「小袖曽我」を、登米市の長下田神楽が「牛若丸鏡ヶ宿」を披露した。

九月四日に女川町生涯学習センターで「第四十三回石巻地方神楽大会」が開催された。石巻地方の法印神楽八団体が出場し、皿貝法印神楽が「空所」、女川法印神楽が「道祖」、寺崎法印神楽が「日本武尊」、雄勝法印神楽が「所望分」、後谷地法印神楽が「笹結」、鹿又法印神楽が「日本武」、牡鹿神楽

古実会が「西の宮」、江島法印神楽が「魔王攻」を演じた。

九月二十五日に石巻市の長面北野神社例祭が行われ、石巻市二子の復興団地内にある集会所広場で神楽奉納が行われた。新しい神楽舞台で女川法印神楽が「三天」「岩戸開き」「魔王神璽」「空所」「笹結」を奉納した。

十月一日に「第十五回くりはら万葉祭―土と火のまつり―」が栗原市一迫の風の沢ミュージアム野外ステージで開かれ、栗原市内の中野神楽・栗原神楽・城生野神楽の担い手による神楽ユニット神友楽が「打ち鳴らし」「三番叟」「森館軍記」を披露した。「森館軍記」は古い神楽演目の復活上演であった。十月八日に南三陸町戸倉長清水の二渡神社祭礼で十数年ぶりに神楽が奉納され、女川法印神楽による「初矢」「磐戸開」「魔王退治」「道祖」「四天」「鬼門」「笹結」「日本武尊」と行山流水戸辺こども鹿子躍が演じられた。

十月八日・九日に「第二十五回みちのくYOSAKOIまつり」が四年ぶりに開催され、仙台市内の五会場（市民広場・勾当台公園他）で全国から集まった七十六チームが演舞した。



3年ぶりに開催された「第43回石巻地方神楽大会」(写真提供：河北新報社)

十月十五日に栗

原市若柳の平野神社の秋の例大祭前日祭が行われた。

神楽大会は三年連続中止となったが、令和元年の神楽大

会優勝団体である栗原神楽が「御山掛け」を奉納した。



「三代目栗原神楽結成 50 周年 +1 記念公演」(写真提供：栗原神楽)

十一月六日に栗原市栗駒のみちのく伝創館で「三代目栗原神楽結成五十周年 +1 記念公演」が開催された。令和二年に開催予定であったが新型コロナウイルス感染拡大により延期となっていた公演である。「源義経物語」の通し公演で、「牛若丸、鞍馬入り」「牛若丸、鞍馬山修行」「鴨越えの坂下し(神楽ユニット神友楽)」「屋島合戦 継信の最期(城生野神楽)」「義経、涙の腰越状」「勧進帳」「藤原秀衡公の最期」「衣川の戦い、義経主従の最期」の八演目が演じられた。

十一月十二日に丸森町金山地区で「秋の豊稂祭」が四年ぶりに開催され、田林神楽と丸森ばやし保存会による和太鼓演奏が披露された。

十一月二十日に角田市のかくだ田園ホールで「角田市民俗芸能大会」が三年ぶりに開催され、角田祭ばやしや藤田神楽、大谷神楽など七団体が参加、三十年ほど前に伝承が途絶え、

地域有志が三年前に復活させた「北根田植え踊り」も小中学生らによって披露された。

コロナ状況下で学校における民俗芸能の伝承活動にも大きな影響が出ているが、感染対策を行いながら演奏発表や体験の機会を設けた学校もあった。

二月七日に山元町立坂元小学校と沖縄県伊江村の伊江小学校の児童が、地域の芸能をオンラインで相互に披露して交流を行った。

六月二十九日に登米市立登米中学校は、伝統芸能伝承館「森舞台」で登米能の体験学習を実施し、三年生が登米能楽会の会員から謡曲「高砂」の一節を稽古し、生徒代表が能「羽衣」で使われる装束の着付けを体験した。

十月十五日に令和四年度に開校した丸森町立丸森小学校で学習発表会があり、三年生が大内地区の「青葉の田植え踊り」を、四年生が民謡「新相馬節」を披露した。

十月二十二日に川崎町立富岡中学校の生徒が文化祭で地域に伝わる「宮城蔵王支倉豊年踊り」を披露した。

十一月十三日に名取市立増田西小学校の三年生が、学習発表会で名取市指定民俗文化財「手倉田枅取り舞」を披露した。

十二月一日に白石市の碧水園で、白石市立深谷小学校の五・六年生と山元町立坂元小学校の四年生が、地域の神楽を相互

に紹介する交流会を開催し、深谷小は深谷神明神楽を、坂元小は坂元こども神楽を披露した。

小^お塩^{しお}さ^さと^とみ

(宮城教育大学 教授)

三 曲

新型コロナウイルスの猛威は徐々に収まりを見せてきたが、伝統芸能である三曲の世界はどう変わったのか。本格的な演奏活動にはまだほど遠いが、活動は徐々に手探り状態ながらも動き出していることは間違いない。前年にプロに転向した尺八の平澤真悟氏は、若さと才能に任せ活発に活動している。

師の大友憧山氏とエレクトーンの相澤暲氏の三名で立ち上げた「テイクツー」は、仙台上に留まらず東北各地を回り、評判は上々である。昨年、第一回のコンサートをピアノサロン・ルフランで開催したが、その情熱はポップスからオリジナルの曲までをこなし、熱く演奏。盛岡、青森、秋田の各地で演奏。日本の伝統楽器・尺八と日本で発明された電子オルガンの組み合わせが、新鮮なハーモニーを創出する。五月には、彼が国際尺八コンクールで銀賞を受賞したことを記念した、コンサートが松音寺の本堂で開かれた。司会と朗読に宮城県芸術協会の演劇部長の大日琳太郎氏が参加。また、クラシックギターの若生智彦氏が協演した。お寺の静寂のなかで奏でられる和洋の音と声の協演は、味わい深いものとなった。

これからも色々な壁を乗り越えた活動は期待を持たせるに十分である。学校への三曲鑑賞授業は皆無かと危ぶまれたが二件あった。最初は二月。尺八の飛沫を恐れ、箏だけの鑑賞

授業のみとなったが、十二月に行われた授業は、新型コロナウイルスが落ち着きを見せ始めたため、尺八の鑑賞もできた。

東日本大震災に遭われた南三陸町、塩竈地区の人たちに「こころの復興支援」の一環として、箏や尺八のコンサートやワークショップが開催された。塩竈に教場を置く佐藤皖山・佳世子夫妻が中心になって実施。ワークショップで箏や尺八に触れ、「さくら」や「チューリップ」などの発表があり、観客が口ずさんで和やかな雰囲気包まれた。東日本大震災から十年余り。いまだ心の傷が癒えない人がたくさんいるなかで、今回の演奏で日本の音に癒されたという人が多かった。これからは是非、この活動を続けてほしい。

六月からは本格的な演奏会が開催された。山田流の上原派真磨琴会の演奏会が塩竈で開催。九月には、生田流の関野由美子氏が代表の「杜に吹く風」が、太白区文化センターで開催。次いで十月には、都山流尺八の定期演奏会が利府のリフノスで開催。いずれも有観客で盛り上がった。

やはり演奏会は、観客と一体になることで成り立つことを実感した。同月、トークネットホール仙台の大ホールで開催の仙台三曲協会の定期演奏会は安全を優先し、無観客で実施。お互いに聴きあう会を目指したが、やはり一般の聴衆のいない会場は緊張感と盛り上がり欠けたものであった。来年からは新型コロナウイルス対策も緩和され、それなりに対策を

とれば観客も安心して演奏を聴けて、演奏者と響き合う会になつてほしいものと願うばかりである。

一月

三日 ところの復興支援コンサート

塩竈市北浜コミュニティセンター 皖山会と一音舎

十六日 ところの復興支援コンサート

南三陸町文化交流ホール 皖山会と一音舎

二月

十日 三曲鑑賞授業 仙台市立鹿野小学校

六年生六十名 伊勢雅之園 鈴木喜千恵

四月

九日 TAKE／TO 第一回コンサート ピアノサロ

ン・ルフラン

大友瞳山 平澤真悟 相澤重

五月

十四日 平澤真悟リサイタル 国際尺八コンクール銀賞受

賞記念

松音寺 助演ギター…若生智彦 朗読…大日琳太郎

六月

十九日 上原派真磨琴会 箏演奏会

塩竈遊ホール 上原真佐喜ほか

七月

二十四日 第九回山田流仙台会

幸町市民センター 大沼萩波寿ほか

九月

三日 第六回杜に吹く風

太白区文化センター楽楽楽ホール 関野由美子ほか

十月

九日 第三十五回都山流尺八演奏会

リフノス文化会館ホール 宮澤寒山ほか

二十三日 第六十四回仙台三曲協会定期演奏会

トークネットホール仙台大ホール 渡辺悦子ほか

十一月

三日 日本の調べ

日立システムズホール仙台 操春会 鶴巻春雲ほか

十二月

二十日 三曲鑑賞授業 仙台市立西中田小学校

六年生六十名 宮澤寒山、田村亮山、田村雅楽徽、
曾根美登利、吉崎喜寿静

みや

ざわ

かん

ざん

澤山
(仙台三曲協会名誉理事)



都山流尺八宮城県支部定期演奏会 会場：リフノス



仙台三曲協会定期演奏会 会場：トークネットホール仙台



鑑賞授業 会場：仙台市立西中田小学校

長 唄

宮城県芸術祭 長唄演奏会

三年ぶりに開催

第五十九回宮城県芸術祭長唄演奏会が、十月十六日にトークネットホール仙台小ホールにて開催された。
新型コロナウイルス感染症が拡大し、演奏会が二年間も中止となり、その残念さを乗り越えた復活公演となった。

演奏番組

一、新曲浦島

杵家会（四挺四枚）

特別企画「長唄、その魅力」

三味線文化譜宗家 六世家元 杵家弥七

一、四季山姥

杵家会（四挺四枚）

一、浦島

杵 屋（二挺二枚）

一、神田祭

合同演奏（七挺七枚）

三年ぶりの開催のため不安も多く、なかなか軌道にのれなかったが、宮城県芸術協会の他の部門の方々から励ましをいただきながら、無事に開催することができた。何かと工夫をこらし、特別企画として「講演」を実施した。また、最後に

出演者十四名で「神田祭」を賑やかに演じた。演奏後は、影アナが挨拶文を読み上げるなか全員で一礼をし、観客の方々に御礼の意を表した。客席より感動の大きな拍手を浴び、充実感に満ちた舞台となった。



第 59 回宮城県芸術祭長唄演奏会 合同曲「神田祭」

『出演者の声』

長引くコロナ禍により、あらゆる分野で活動がさまたげられてきた。今年三年ぶりに会員の皆様の熱意と宮城県芸術協会のお力添えで第五十九回長唄演奏会が開かれた。

出演者の少なくなった杵屋派は、杵家派の三味線方の協力を得て「浦島」を二挺二枚で演奏することができた。また、合同曲の「神田祭」にも出演し、杵家派の家元様の掛け声で十四名が息をそろえて賑やかに演じ、満足感に浸った。プログラムをはじめ、舞台構成も工夫され、四曲の演奏と「長唄、その魅力」と題し、六世家元杵家弥七氏の公演が開かれた。これまで皆様方といっしょに稽古に励み、楽しい思い出がたくさんあった。来年は、マスクを気にせずにお会いし、安心した稽古ができるように精進したい。

(芸術協会会長唄運営委員・杵屋和加富法 記)



第59回宮城県芸術祭長唄演奏会 「浦島」

八本松市民センターまつり

第二十六回うぶすなフェスティバルが十一月六日に開かれた。コロナ禍で、三年ぶりの開催となった。

演芸部門は、伝統文化である日舞・長唄をはじめとして、朗読・地元小学校の合唱・中学校吹奏楽部の演奏等々、見どころ満載で観客を楽しませた。

長唄演奏は、一昨年より練習を重ねてきた「小鍛冶」を八名で演奏。小狐丸という名刀を作り上げる様を三味線で表現し、本手と替手の掛け合いが面白く表現することができた。

今後、練習に励み積極的に参加し、文化活動をとおして町の活性化につなげたい。

杵^{きね}家^{いえ}弥登鈴^{やとすず}
(宮城県芸術協会邦楽部長唄副部長)



うぶすなフェスティバル「小鍛冶」

民謡

令和四年も新型コロナウイルスの影響が残り、演奏会や民謡コンクール、社会貢献活動等々が中止、延期になり、人数制限の開催など皆さん大変苦労しているという声を多く聞く。そのような中で行われた令和四年の民謡公演活動をご紹介します。

民謡コンクール

県内各地で実施されている宮城県の民謡コンクール及び普及活動、演奏会、公演会等。

◎ 七月三十一日（日）

【第一回えんころ節全国大会 in 角田】

【主催】 角田市観光協会

【会場】 かくだ田園ホール

【開催目的等】

この唄は新造船の祝い唄で、歌詞に「お斗藏さまの檜の木を申しおろして船にはぎ」とあり、市内の斗藏寺には鏡内には歌詞を刻んだ碑が建つ。今までは亘理町での大会開催だったが第三十回限りで終了し、角田市で再出発を遂げた。

【成果】 出場者八十六名参加

優勝者 渡辺千恵美（角田市）

◎ 九月二十二日（木）

令和四年度 八本松寿大学「民謡を楽しみましょう」

【主催】 八本松市民センター

【会場】 八本松市民センター 体育館

【開催目的等】

民謡歌手の有住亮子が会主を務める民謡有住会が中心となり、地域貢献活動、日本民謡の普及に努め、民謡の素晴らしさと感動を伝えるため幅広く活動している。

今回は宮城県の代表曲「さんさ時雨」を始め、昔から伝わる「おいとこ」「仙台よしこの節」など宮城県民謡を中心に十四曲を解説しながら披露し、無事に寿大学を終了した。

【成果】 出場者十名 参加者五十名

◎ 十一月十二日（土）、十三日（日）

【第三十八回秋の山唄全国大会】

【主催】 涌谷町

【会場】 涌谷町「勤労福祉センター」

【開催目的等】

この唄は涌谷方面一帯の山林原野で農作業をしながら唄われたもの。この唄をうたうことにより、崑岳山の山の神に五

穀豊穰を祈った。優勝者は崑岳山崑峯寺山唄を奉納する。

【成果】 出場者百十名参加

〔一般の部〕 優勝・渡辺千恵美（角田市）

準優勝・遠藤 憲一（山形県）

〔寿年の部〕 優勝・松本 省三（山形県）

準優勝・高橋 秀明（大崎市）

〔少年少女の部〕 優勝・佐藤 美玖（山形県）

準優勝・岡田 瑚博（塩竈市）



秋の山唄全国大会優勝者 渡辺千恵美（角田市）

◎ 十一月二十七日（日）

【第三十七回さんさ時雨全国大会】

【主催】 宮城県民謡道連合会

【共催】 第三十七回さんさ時雨実行委員会

【会場】 大崎市岩出山文化会館「スコーレハウス」

【開催目的】

民謡「さんさ時雨」は格調高い祝い唄として全国的に知られる宮城県を代表する民謡。この民謡を正しく継承、普及させ、先人から歌い継がれてきた唄を次世代に引き継ぐことが開催目的である。

【成果】 正しい唄の継承が浸透している。出場者数百二十一名

東北六県、東京都・北海道、その他全国からの参加。

〔一般の部〕 優勝・松本莉奈（福島県）

準優勝・永野興吉（仙台市）

〔熟年の部〕 優勝・尾崎壽明（大崎市）

準優勝・庄司良江（仙台市）

〔年少の部〕 優勝・庄子美紅（富谷市）

準優勝・畑中みそら（塩竈市）

新型コロナウイルスによる制約の中、少しずつだが活動のきざしが出てきた。継続してきたコンクールが三年ぶり、何年ぶりと復活し、県民同士の民謡による笑顔が見られるよう

になり安堵している。しかしながら数年前までは年間情報が積極的に集まっていたことに反し、現在はこちらから問い掛け、足を運ばないと集まらない状況に危惧している。これも新型コロナウイルスの影響のようと思われるが、今後も足を運びつつ頑張って情報収集に励みたい。



松本さんがさんさ時雨をうたって締めくくった

二代目
藤^{ふじ}本^{もと}和^{かず}夫^お
(民謡・端唄・小唄・現代楽三味線演奏者)

演劇

令和二年に唐突に始まったコロナ禍は、少しずつ終息に向かいつつあった。しかし、一度、芸術全般に貼られた「不要不急」というレッテルが、人々の意識から剥がれることはなく、コロナ禍前のように、多くの観客が劇場に戻ることはないかもしれない。

それでも、本県の演劇の状況は、首都圏と比べれば、まだ良いかもしれない。その要因として、演劇に関わるアーティストに演劇専門のプロフェッショナルが多くはなく、他に生業を持った者が大多数を占めていたことが挙げられる。

さて、そんな逆風の中、二つの劇場が産声をあげた。仙台市宮城野区のKOMOBASE sendaiと石巻市のシアターキネマティカ&カフェ Citylightsである。

KOMOBASE sendaiは、東京の演劇制作会社、有限会社ゴーチ・ブラザーズが仙台営業所として設けた演劇に特化したクリエティブスペースである。スタジオや倉庫、ラウンジを備えた画期的な民間施設である。

ここでは、十月十六日・十七日、石巻市や大船渡市で上演されてきた『ミュージカル シシ』をこころしずかに遊ぶ我が

連れ』（作：黒川陽子・矢戸優太郎、作曲・演出：前川十之朗）が上演された。

シアターキネマティカ&カフェ Citylights は、石巻市で様々な企画を行っている石巻劇場芸術協会が空き家を改修して設置した施設である。カフェ&バーを併設した劇場であり、演劇のみならず、映画、音楽、飲食イベントなど、様々な活用が可能である。ここでは、いしのまき演劇祭『みる・やる・演劇 in 石巻』の会場として、十一月五日にはインプロ仙台 PAGE☆ANT、十二日にはコマイぬのワークショッブと発表会が行われた。

令和三年の本稿では、公共施設の力が発揮された年と書いたが、令和四年は、民間の底力が噴き出した年となったと言える。仙台市市民文化事業団やえずこホール等公共施設が行ってきた東京で活躍する演出家を招いて作品を制作する事業を、各劇団でも実施していたのは、この年の特徴である。

八月三日～七日、エル・パーク仙台ギャラリーホールで上演された、渡部ギユウプロデュース『リア王』は、シェイクスピアの不朽の名作を、前年『エクスベリメンタル 貧民街

の善人』の訳・台本を担った宮島春彦に新訳台本と演出を依頼し、リアの三人の娘をダブルキャストにするなど、地元で活動する俳優を多数参加させた贅沢な作品であった。

九月十九日・二十日、せんだい演劇工房10-BOX別館能-BOXで上演されたコロノキンセンアワー『明治に先駆けた雪国の女二人』（原作・高田宏）は、遊木理央と茅根利安に橘寿好（筆）が加わる室内楽的な作品ではあるが、東京で活躍する笠井賢一に脚本と演出を依頼して製作され、十二月二十三日には、鍔仙会能楽研修所（東京）でも上演している。

それと同じ流れは、三月二十六日・二十七日、エル・パーク仙台ギヤラリーホールで上演されたクグリド『Franken Stein』（原作・メアリー・シェリー、脚色・武田らこ、演出・小濱昭博）である。「クグリド」は、武田らこが立ち上げた舞台制作ユニットだが、初回として、東京から福原冠（範宙遊泳）、三重県から小菅紘史（第七劇場）を招いて作品を作った。

また、四月十九日（二十四日、せんだい演劇工房10-BOX BOX-1で上演された重力／NOTE『A MAN』（原作・アルフォンソ・リンギス「信頼」、翻訳・工藤順、演出・鹿島将介、出演・小濱昭博）も同様であろう。エッセイを舞台にする試みであり、前作『LOVE JUNKIES』の延長線上の延長戦。演劇の最先端が仙台で上演される奇跡である。えずこシアターも第二十四回公演として『それでもD A

NCE! DANCE! DANCE!』を、八月二十七日・二十八日、えずこホール（平土間ホール）で上演した。演出に山の手事情社の倉品淳子を招いているのは従来通りだが、気鋭の劇作家・釘本光に新作戯曲を依頼している点が新たな試みである。

地域の交流という位置付けは「みちのく演劇フェスティバル」（主催・日本演出者協会）と「とうほく学生演劇祭二〇二二」にも見られる。

「みちのく演劇フェスティバル」は、東北の各県からそれぞれ一つの劇団が参加して、各県を巡回上演する企画である。宮城県からは三桜OG劇団ブルーマー『引き出しの奥に・いつかの春と・愛を込めて』が参加した。各県で全ての劇団を観られる構成にはならなかったが、九月には岩手県と福島県、十月には青森県と山形県、十一月には秋田県と宮城県を巡回し、十一月二十五日（二十七日、エル・パーク仙台ギヤラリーホールでの宮城県上演では、三桜OG劇団ブルーマーと劇団@NDANTE（山形）『越えてゆけ』、演劇ユニットせのび（岩手）『スコープ』が上演された。

また、「とうほく学生演劇祭二〇二二」は十二月三日・四日、せんだい演劇工房10-BOX BOX-1で開催され、東北大学学友会演劇部、劇団さくろう、尚絅学園大学演劇サークル「尚劇団」、東北学院大学演劇部、劇団ダダ、宮城学院女子大学演

劇部が参加し、劇団タダ『悦に浸れないなら死ね』（脚本・演出：瀬川鮎）が大賞を得て、全国学生演劇祭に推薦された。

このように、コロナ禍の空白を埋めるように、県外との交流が活発になっている。

以下に、特記すべきものを記す。

宮城野区文化センター

仙台市市民文化事業団同様、この施設は様々な自主事業を行っている。

舞台スタッフ・ラボ×みやぶん演劇学校 合同公演『ぼくと王子さまー Le Petit Prince』（原作：アントワーン・ド・サン＝テグジュペリ『Le Petit Prince』、参考書籍：大久保ゆう『あときの王子くん』、脚本・演出：渡部三妙子）二月二十日、パトナシアター。舞台スタッフの養成講座の実践の場として、演劇学校修了者のステージを製作。

みやぶんワンコインシアター（会場はパトナシアター）

Vol.6『海、とても』（作：森川樹、演出：高橋菜穂子）二月二十六日。恒例となった仙台短編文学賞大賞受賞作品の舞台化。

Vol.7『飛び花座 宮城野寄席』（出演：三遊亭遊子）六月九日。
Vol.8『井上ひさし『十二人の手紙』を読む』（演出：出演：

白鳥英一）十月十五日。

Vol.9『あなたと夜と音楽と』（原作：恩田陸、演出：高橋菜穂子）十二月二十二日。渡部ギユウ、大橋奈央、佐藤有華（ダンサー）の出演で舞台化。

十二月には、みやぶん演劇学校（講師：よしだめぐみ）を開講し、それがまた、翌年の合同公演につながっている。

せんだい短編戯曲賞（主催：仙台市・公益財団法人仙台市市民文化事業団）

令和二年十月に発表された第七回せんだい短編戯曲賞大賞の授賞式が三月五日、せんだい演劇工房10 BOX BOX-1で行われ、受賞作品、刈馬カオス『異邦人の庭』（演出：大河原準介）、北島淳『春の闇』（演出：真田鰯）のリーディング公演が五日・六日に行われた。

また、十月二十六日には、第八回の大賞に河合穂高「黄色の森」を選出したことが発表された。応募は過去最多の二百八十六作品であった。授賞式とリーディング公演は令和五年度に行う予定。

コマイぬ月いちよみ芝居 拝み屋怪談郷内心瞳を読む

平成三十年に第一夜を開催し、今年は節目の三十夜に到達した。ほとんどの回に作者・郷内心瞳も参加して、創作の裏

話を披露している。今年は三回の開催だったが、回数が少なくなっただけでも、長く続いて欲しい企画である。

第二十九夜『鬼念の黒巫女』（出演…芝原弘（以下特記がなければ出演）、キサラカツユキ）五月二十九日、旧観慶丸商店。

第三十夜『石巻怪開き祭り』（出演…大橋奈央、上島奈津子、菊池佳南、キサラカツユキ、小町、塩田歩く、JUN、瀧原弘子）八月一日、旧観慶丸商店。

第三十一夜『奈落の女』（出演…大橋奈央、紅絹）九月十八日、シアターキネマテイカ。

仙臺まちなかシアター（主催…東北えびず、構成・演出…高橋菜穂子）

仙台市内の飲食店を会場に、朗読劇を楽しむ企画。仙台の新しい名物として、定着した感がある。

前半が五作品、後半が二作品、上演されている。山本周五郎、安部公房、岡本かの子、江戸川乱歩、小川未明、向田邦子、夏目漱石、津島佑子、ラフカディオ・ハーン、宮沢賢治、伊藤左千夫といった様々な作家の作品が取り上げられ、演奏家とのコラボレーションや人形劇もあり、バラエティに富んだプログラムになっている。

九月二十九日～十月一日、エル・パーク仙台ギャラリーホールで「小さな秋の演劇祭」と題して連続上演を行い、新たな

方向を模索している。

また、三重県の演劇祭MPADに『一人語り みちのく』（原作…岡本かの子、出演…菊池佳南、楽士…山本純）で参加している。

仙台・劇のまちトリアルシアター「につかわ文化祭」

十一月十二日・十三日、作並小学校・旧新川分校。

京都でロングラン公演を行うノンバーバル舞台「ギアAGE AR」のショーやワークシopp、お笑いライブ、劇団短距離男道ミサイルの野外公演、音楽ライブ、レティクル座『ノンブレラ』『炎のウツホ』（作・演出…阿部慎一郎）、放課後RUNWAY『蜜柑』『夏の葬列』（演出…小濱昭博）、アクトーズ仙台『Prelude - 天使が生まれた日 -』（作…井伏銀太郎／演出…西澤由美子）、劇団16%『即興 色物語り』（出演…渡辺陽）、遊々亭つばさ（仙台はでなす会）『につかわ落語寄席』、キサラカツユキ『サムライキサラ』（作・演出…横山真）、仙台シアターラボ『注文の多い料理店』『走れメロス』などが参加し、盛大に開催された。

週末演劇ひろば

小濱昭博が中心になり、十二月に発足。「久しぶりに演劇をしたい人」「これから演劇をやってみたい人」に向けて、短期

集中で作品を作り、発表会までを行う。十二月十四日～十六日、KOMOBASE sendaiで第一回目を実施。人材育成という明確な目標を持った企画であり、今後、仙台の演劇に大きな影響を与えるに違いない活動である。

以下に、月を追いながら、一年を振り返ってみたい。

一月

WAKU☆WAKU☆舞台スタッフ体験二〇二一『朗読「猫の事務所」「やまなし」「いちようの実」』（作・宮沢賢治）朗読：渡辺祥子、照明：松崎太郎、音響：梅内久仁生という講師の下、舞台を経験してみる講座の発表会。三十日、多賀城市民会館大ホール

二月

『いのちのかたりつぎー色とりどりの物語がつむぐ、震災のこと 石巻公演』六日：河北総合センタービッグバン。ワークショップ参加者が、震災をテーマに舞台を作った。芝原弘、本田 椋、大橋奈央、渡邊悠生、SAKUYA が出演指導を行った。

二月～三月

White プロジェクト「震災演劇短編集」井伏銀太郎の東日本大震災に取材した短編をクォーター・スタジオ、こまばアゴラ劇場（東京）せんだい3・11メモリアル交流館で連続上演した。

三月

利府町民劇団ありのみ第二十五回公演「利府浪漫街道 第二話「藤田めをと桜 えみしの夢よ、花と咲け！」」（作・演出：伊澤美樹）十九日・二十日、利府町文化交流センター多目的ホール。

A Ladybird Theater Company プロデュース公演『スノウドロップ』（脚本・演出：箱崎貴司）二十五日～二十七日、宮城野区文化センターパトナシアター。

AZ9ジュニア・アクトーズ第二十九回公演『夏休みをとるもどせ！～七ヶ宿の勇者たち～』（作：大信ペリカン、演出：渡部ギユウ）二十六日、えずこホール大ホール。当初、二月の上演を予定していたが三月十二日に延期となり、再延期でこの日の上演となった。

四月

劇団短距離男道ミサイル三十七発目『Ultimate Fancy

Olisan』(作・演出：本田稔)。六日～十日、せんだい演劇工房10-BOX BOX-1。全国的な人気劇団の新作上演。三月三十一日～四月六日、王子小劇場(東京)でも上演。

子どもミュージカル劇団たまごファーム『ゴースト・ビー・ア・スター』(脚本・演出：渡部三妙子) 十六日・十七日、太白区文化センター楽楽ホール。結成二十周年記念公演。

五月

演劇ユニット石川組『わからないこと』(作：石川裕人、演出：宿利左紀子「遙かなり甲子園」、長谷野勇希「兆し」、なかじょうのぶ「わからないこと」) 五日～八日、せんだい演劇工房10-BOX BOX-1。石川組第二回公演は短編の連続上演。短い時間でピリッと決めた構成の妙技が冴える。

AOIオフィス『リタの教育』(作：ウィリー・ラッセル、演出：高江智陽、出演：正仲未龍、蒼井彩乃) 二十七日～三十日、せんだい演劇工房10-BOX BOX-1。第一回プロデュース公演は、約三時間の上演時間を二人の役者が火花を散らす対話劇。

六月

劇団鳥や公演『カタツムリの家』(作・演出：芦口十三) 三日～五日、せんだい演劇工房10-BOX BOX-1。

『猫と縁側』(作・演出：相澤一成、制作：伊藤み弥) 三日～五日、宮城野区文化センターパトナシアター。『ファミリーツリー』の作家の新作。

劇団航海記第十五回公演『君が感じれば、世界は』他二編(作・演出：渡邊意志)の短編オムニバス公演。十一日・十二日、せんだい演劇工房10-BOX BOX-1。

劇団ヤミ鍋 第十五回公演『謎なき謎は謎じゃない』(作・演出：廣田和斗) 十八日・十九日、仙台市市民活動サポートセンター市民活動シアター。

三國裕子一人芝居『風(たこ)になったお母さん』二十六日、マルホンまきあーとテラス小ホール。ウクライナ支援のチャリティ公演。

最強の一人芝居フェスティバルⅡインディペンデントSDNが二十三日～二十六日、せんだい演劇工房10-BOX BOX-1で開催された。宮城からは、『ライカナイの風』(脚本・出演：井伏銀太郎、演出：西澤由美子)、『phantom party』(出演：脚本・演出：本城祐哉)、『10+2』(出演：谷津りりこ、脚本・演出：谷津智里)、『いし』(出演：渡辺睦、脚本：X梨ライヒ、演出：渡辺陽)の四作品が参加。

劇団どんちょうの会 第六十八回公演『広くてすてきな宇宙じゃないか』(作：成井豊、演出：伊藤正裕) 二十四日・二十五日、登米祝祭劇場小ホール。

八月

劇団ざくろう×在仙演劇人 コラボ公演 vol.1 『彼岸の彼方から』 十六日・十七日、せんだい演劇工房10ーBOX BOX 1ー別館能ーBOX。劇団ざくろう『演劇に愛をこめて』あの書割りの町』（作…石川裕人、演出…横山真）、キサラカツユキ一人芝居『サムライキサラ』（作・演出…横山真）、三人の会『父と暮らせば』（作…井上ひさし、演出…横山真）の三本を連続上演。

劇団ひとりっこ第九回公演『朗読劇 女人 源氏物語』（作…瀬戸内寂、演出…宮なでしこ）二十日・二十一日、せんだい演劇工房10ーBOX 別館能ーBOX。竹内典子（朗読）、山本昌子（箏）の出演による朗読劇。

九月

劇団三カ年計画 vol.8 『青は 何色だ』（作・演出…なかじょうのぶ）十日、風の沢ミュージアム アートインレジデンス棟、十月二十三日、中本誠司現代美術館東館二階ギャラリー。

一般社団法人地域舞台創造『Ms『月船巫女と月天子』（脚本・演出…三木弘和）十日・十一日、宮城野区文化センターパトナシアター。

Gin's Bar 色彩シリーズ Act3『BLACKー家族の肖像ー』（作・演出・出演…井伏銀太郎、演出・出演…西澤由美子）十七日

（十九日、二十三日、二十五日、クォーター・スタジオ。アメリカ同時多発テロ直前のニューヨークを舞台に描く代表作。

十月

仙台シアターラボ『溶け合う世界』（構成・演出…野々下孝）一日・二日、仙台市市民活動サポートセンター市民活動シアター。アントン・チェーホフ「かもめ」を題材に、家族の問題に切り込んだ構成演劇。

アクトーズ仙台「仙台オリジン『スリップ』（作…文月奈緒子）『PINK』（作…井伏銀太郎）」（演出…恋宵）八日・十日、クォーター・スタジオ。恋宵が座長に変更後、初の本公演。

十一月

A Ladybird Theater Company 第十九回公演『DEAR』（作・演出…箱崎貴司）四日・六日、宮城野区文化センターパトナシアター。

十二月

演劇ワークショップ Pegs『真夏の夜の夢』（原作…シェイクスピア、潤色…野田秀樹、演出…渡部三妙子）三日・四日、エル・パーク仙台ギャラリーホール。

演劇ユニット何かのかたちリーディング公演『少年の日の

思い出』（ヘルマン・ヘッセ）『トロツコ』（芥川龍之介）演出…

阿部豪毅、出演…武者匠、三日・四日、ギャラリー・スケーナ。

劇団檸檬スバイ旗揚げ公演『キぐるみの富子さん』（作・演出・

出演・真田鰯）六日・七日、エル・パーク仙台ギャラリーホール。

仙台シニア劇団 まんざら 第十二回定期公演『思い出し

てよ！』（脚本…窪田吉宏、演出…大石和彦）九日～十一日、

宮城野区文化センターパトナシアター。

演劇ユニット石川組第三回公演『月の音 フェリーニさん、

おやすみなさい』（作…石川裕人、演出…宿利左紀子）二十三

日・二十四日、仙台市市民活動サポートセンター市民活動シ

アター。

鈴 すず

鴨 かも

久 ひさ

善 よし

（演劇ジャーナリスト）

洋舞

新型コロナウイルス感染症のパンデミックといっても、一年がピークではないか、などと何の確証もなく考えていた。それから三年が過ぎようとしている現状に、自然の脅威には勝てず、情けないくらい打ちのめされている。自分の人生の中で、こんなに衝撃的な出来事が起きるとは、とても信じられずに不思議な気さえする。しかしながら人間は柔軟なもので、三年ともなるとマスク着用も生活の一部として慣れてしまっていることに驚く。少しは精神力や体力が取り戻せたのだろうか、今年は舞台芸術も次々と開催され始めている。感染により直前で中止になった舞台も多く残念でならなかったが、延期開催をした舞台も多く、力強さを感じる年ともなった。やっと日常が取り戻せる時期が来たと、明るい兆しに自分の心も奮い立たせたい気持ちで一杯だ。海外への留学やバレエ団での活躍も、復活したメンバーが多くなってきた。三年間の停滞は、若い世代にとっても貴重な時間をスローな流れに変えてしまったが、以前よりも世界に目を向ける重要性を感じている事に相違ないと信じていたい。但し、ソーシャルディスタンスの後遺症なのか、外出や行事を控える人も多くなっ

たと感じている。まずは身近な所から復活のプロセスを大切に、未来に突き進もうと心から願いを込める日々が続いている。

県内の活動

- 一月二十三日 アウエアネス・スタジオ・アロンジエ 第一回発表会 コッペリア第三幕(抜粋)他、若林区文化センター 大ホール 主宰 佐藤優子
- 五月五日 橘バレエ学校 仙台教室 スプリングバレエコンサート 小品集 電力ホール 芸術監督 三谷恭三
- 五月十五日 靫江ダンススタジオ 発表会 ある日の休日 他、宮城野区文化センター パトナシアター 振付 靫江純子 他
- 七月三日 仙台ノイエタンツ研究所 創立七十周年 第四十九回ジュニア公演 幸の光を求めて 他、電力ホール 主宰 千尋洋子
- 七月十七日 バレエアーツスタジオ 第一回バレエコンサート 小品集 大和町まほろばホール 主宰 水間正育

○七月二十四日 さくらモダンバレエスクール 第二十二回
発表会 幸せの花束 他、日立システムズホール仙台シアター
ホール 代表 横田百合子

○八月七日 バレエクラスニキオ 第二回発表会 コッペリ
ア第三幕 他、石巻マルホンまさあーとテラス 主宰 間中
康枝

○八月十四日 パリエ・クラス・ドウ・バレエ 第二十一回
発表会 ドン・キホーテ(全幕抜粋) 他、太白区文化センター
楽楽ホール 主宰 辻真弓

○八月十七日 クレールバレエアトリエ ガラ・コンサート
DanceV クララの夢、コンサート 他、日立システムズホー
ル仙台シアターホール 代表 高橋厚子

○九月三日 東日本大震災で被災した亘理町の住民が、D A
PUMP(ダ・パンプ)や八代亜紀さんらと共に演ずる音楽イ
ベントがゼビオアリーナ仙台で開かれた。ダンススクールの
インストラクター二十人と萩野目洋子さんの「ダンシング・
ヒーロー」のコラボレーションもあった。

○九月四日 加藤有華バレエスタジオ パフォーマンス
二〇二二 コッペリアヴァリエーション 他、エル・パーク
仙台 スタジオホール六階 主宰 加藤有華

○九月二十五日 ダンススタジオミルウィーユ 十周年記念
コンサート 眠れる森の美女パドシス・ピーターパン 他、

日立システムズホール仙台 主宰 福山桃子

○九月二十五日 エトワールバレエ館 第二十六回ガラ・コ
ンサート コッペリア結婚の場・ピノキオ 他、広瀬文化セ
ンター ホール 芸術監督 川村美佐子

○十月二十三日 バレエスタジオ・テップタップ 第十六回
発表会 白鳥の湖第三幕抜粋・ピーターパン 他、太白区文
化センター楽楽ホール 主宰 斉藤和美

○十月三十日 まりなバレエスタジオ フェ・エ・リ 第
十二回おさらい会 コンサート・ピーターと狼 他、太白区
文化センター楽楽ホール 主宰 小山真利奈

○十一月十六日 第四十七回なとり文化芸術祭 レクダンス、
ステキな仲間。仙台ノイエタンス研究所、振付 千尋洋子「私
たちの国へ」他。クレールバレエアトリエ、振付 高橋厚子「く
るみ割り人形より抜粋」。裕バレエアクト 振付 内海裕子
「シンデレラ抜粋」など、昨年に引き続き開催することができ、
改めて喜びをかみしめた芸術祭として、個性豊かな作品が披
露された。名取市文化会館大ホール

○十一月二十七日 合同パフォーマンス バレエスタジオエ
ルドール 主宰 遠藤深紅 ムーブメントスタジオレヴェデ
ティアム 主宰 山口愛佳 名取市文化会館小ホール

○十一月二十七日 裕バレエアクト 第二十八回発表会 シ
ンデレラ 他、名取市文化会館大ホール 主宰 内海裕子

○十二月二十四日～二十五日 ハイパーウィンド仙台 ウィンターシャイニングウィンド二〇二二 木立に聞こえる子守唄 他、くるみ割り人形、エルパーク仙台ギャラリーホール及びスタジオホール

県外組織団体の公演

○牧阿佐美バレエ団の公演「ドン・キホーテ」が一月に仙台で予定されていたが、出演者のコロナ感染が分かり延期となり、九月末に名取市文化会館で行われた。楽しく見せ場の多い人気演目だ。主役のキトリは仙台出身の阿部裕恵さんが、愛らしく快活な踊りを見せた。

○八月五日～七日 バレエとコンテンポラリーダンス ワークショップ 島地保武、酒井はな 日立システムズホール仙台 練習室四

○十二月十七日・十八日 ダンス公演二 ひとの価値 国際センター駅 青葉の風テラス いま社会には政治はもちろん、経済、社会基盤の教育、SNS、あるいはアートに至るまで、数を基準に物事を評価することで多くの問題が引き起こされている。人と人との結びつきは、数が多ければ多いほど社会的な力となっていく。数値化される評価基準を前に、私たちはどのような行動を選んでいく必要があるのかをテーマとして開催。宮城県出身 平間文朗、藤村港平、他出演。

コンクール（県内）

○二月十九日・二十日 第十七回ダンスコンペティションin仙台二〇二二、日立システムズホール仙台シアターホール「クラシック」出場者百七十四名 「アンサンブル」十六作品 出場「モダンダンス」一三一作品出場 いずれも全国対象。審査員長・うらわまこと。主催・DCS実行委員会 共催・宮城県洋舞団体連合会 会長・佐東悦子

○三月二十九日 第九回NBA仙台バレエコンクール（全国対象） 日立システムズホール仙台シアターホール。参加者二百七十五名 コンテンポラリー 十三作品 主催 NBAバレエ団

○三月三十一日～四月二日 第十七回ALL NIPPON D・A・T・E・クラシックバレエコンペティションMIYAGI（通称・伊達コンペティション 全国対象）マスク着用厳守、除菌、検温をした上での開催。日立システムズホール仙台 シアターホール。参加者二百十三名。リモート審査員ロラランド・ヤーネス、ゲスト審査員オリバー・ホークス、審査委員長・高橋厚子、プレ審査委員長・中村道子

団体（県内・県外）

★若手バレエダンサーの育成を目指す「ジャパンバレエコンペティション」（JBC、名古屋市）の合宿が、加美町のやく



伊達コンペティション場当たり風景



伊達コンペティションワークショップ

らい文化センターで行われた。審査員特別賞を受賞した小学四年生から大学一年生までの二十二人が、全国から町内に集まり八日間練習した。仙台市から二人が参加している。先生の指導とレベルの高い仲間刺激をうけた。地元の市民オーケストラ「バッハホール管弦楽団」が音楽を担当する。観客が幸せな気持ちになれるような公演を目指して、生演奏で踊る貴重な体験になるという。

★全国大会のビッククラス(十三〜四十人)に、仙台商(宮城)天童(山形)が出場し、息の合った見事な演技で客席を魅了した。仙台商はエジプトをモチーフにした衣装で、天空の神「ホルス」が砂嵐の中から現れるさまを表現。二十八人の一糸乱れぬ腕の動きで、古代ロマンを印象付けた。全国大会に初

出場を果たした天童は、クールなロッカー集団をイメージした紫と白のセットアップの身を包み、華麗なブレイクダンスを披露して観客の拍手を誘った。

★東京都の新宿文化センターで第十回全日本小中学生ダンスコンクール東日本大会に中学生部門・オープン参加の部に仙台市の「GEMSTARS」が出場し、銅賞に選ばれた。小中男女七人で、一人一人柄の異なる浴衣に身を包み、LISAの「紅蓮華」に乗せて、楽曲に合わせて熱演。舞台で踊ることへの強い思いを力強く表現した。

★東京ガーデンシアターで第十五回日本高校ダンス部選手権(スーパードリフターズスタジアム)全国大会のスマイルクラス(二〜十二人)に、東北大会を勝ち抜いた仙台城南が出場した。緑色のセットアップと赤いヘアバンドを身にまとい、キレのある見事な演舞に、観客が大きな拍手を送った。活動が激減した昨年と異なり、イベントが増えコロナ禍で身についた短期集中型の練習が役立った。見てもらう機会があることに感謝しながら、全身全霊のヒップホップを踊り切った。

個人(県内)

★熊谷和徳さん 世界で活躍するタップダンサーで、優れたタップダンサーに贈られる米国のフロート賞を日本人で初めて受賞した。コロナ禍で米ニューヨークを離れ、故郷の

仙台市で後進の育成やタップ文化の普及と発信に努めている。タップダンスは奴隸たちが足を踏み鳴らし、感情を表現したのが起源とされる。言語に近い他者とのつながりをつくってくれるもの。マスク着用で感情が伝わりにくくなっている。子供達も自分を表現するツールとして学んでほしいと話す。コロナの落ち着きとともに、東京での活動が活発化。来年のニューヨーク公演も決まっている。

★阿部裕恵さん 仙台市出身で二〇一六年に牧阿佐美バレエ団に入団。「ドン・キホーテ」で主役のキトリを演じるなど着実にキャリアを重ねている。優れた業績を上げ、さらに飛躍が期待される若手舞踊家へ贈られる第二十八回中川鋭之助賞（東京新聞主催）を受賞した。技術だけではなくどんな役柄でもこなせるような表現力豊かなダンサーになりたいと、バレエへの一層の精進を誓い、身を引き締めて励んでいる、活躍が楽しみなダンサーである。この賞の第一回の受賞者は、新国立劇場舞踊芸術監督の吉田都さん。

★佐藤花那子さん 仙台市出身でスペイン在住のフラメンコの踊り手、十七年ぶりの仙台公演は喜怒哀楽に富んだ踊りを三部構成で披露。亡くなった夫のマヌエル・アグヘタさんと共にスペインのフラメンコ、バイレ・ヒターノの伝承に力を注いできた。佐藤さんの踊りに合わせ、アグヘタさんの映像と歌が流れる。踊りの合間にエッセー「フラメンコの深淵」

の一部を朗読する。フラメンコは舞台芸術の印象が強いが、本来まず歌があり、それに触発された感情を踊りで表現する。暮らして根差す文化を伝えたいと話す。

★平多浩子さん 東京新聞主催 全国舞踊コンクールの児童舞踊部・児童舞踊幼児部にて、二〇一二年から現在まで審査員を努めている。

★モウオニエヴィッチ真美（萩原真美） 仙台市出身。五歳よりエトワールバレエ館にてバレエを始める。二〇一二年九月、十六歳からエルムハーストバレエ学校へ三年間留学し卒業。在学中バーミンガムロイヤルバレエ団UKツアーに参加。二〇一六年九月、チェコ共和国「J. K. Týl Theatre」バレエ団入団。入団直後に「白鳥の湖」オデット／オデイルなど主要な役を踊る。二〇一七年一月末バレエ団最高位のソリストに昇格。二〇二一年〜二〇二二年度のシーズンでは百五十五周年三十歳以下のアーティスト賞を「J. K. Týl Theatre」劇場総合監督から受賞。またドン・キホーテのプレミアにてキトリを踊る。七月にポーランド人の元ダンサーと結婚する。



モウオニエヴィッチ真美氏ソロ

個人（県外）

★本城祐哉さん 亘理の地域おこし協力隊として、一月に兵庫県から移住したダンサーで自身が作、演出、振付を手がけた新作「you, Phantom（ユー・ファントム）」を町内の悠里館で公演する。「つながり」や「出会いと別れ」がテーマ。コンテンポラリーダンスの美しい身体の動きや、せりふが織りなすストーリー展開を楽しんでもらいたいと語る。四歳でクラシックバレエ、六歳からジャズダンスとタップダンスを始めた。国内外のダンスイベントに出演。芸術とエンターテインメント性のバランスを大切にした作品づくりに挑む。

★田中月乃さん 若手バレエダンサーの登竜門、第五十回ローザンヌ国際バレエコンクールで第二位に入賞した。大阪出身でスイス北部チューリッヒのバレエ学校に留学中に出場。最終選考には、横浜市出身の高田幸弥さんオーストラリア出身の清水ひょうさんらが進出した。このコンクールは十五、十八歳のプロ活動をしていないダンサーが対象で、大きく飛



チェコ共和国のバレエ団にてモウオニエヴィチ真美氏とカーレル・アウディ

躍する可能性を秘めた若手の発掘と育成に重きが置かれている。熊川哲也さんや吉田都さんらを輩出したことでも知られている。

今我々が求めることは、新型コロナウイルス感染症が一日も早く終息に向かつて行くこと。また、今後デジタル化社会が加速していく中で、人と人との結びつきが最も大切だと感じ、そして心の豊かさを失わないよう心がけることを深く必要とされる時代になること。舞台芸術の役割はますます大きくなっていく中、携わっている我々は未来の希望的な役割を大切にしていきたいものだ。

高^{たか}橋^{はし}厚^{あつ}子^こ
（宮城県芸術協会舞踊部部长）

日舞

●世の中の動向

令和二年一月に国内で感染が確認されて以来続く新型コロナウイルスウィルス感染症の大流行。令和四年も感染者数は増減を繰り返した。一月には感染が拡大し三十四都道府県で「まん延防止重点措置」がとられたが、三月には感染者数が減少し全面解除された。長期に亘る感染流行にコロナと共存する社会経済活動の政策がとられた。国民は「密」を避け、マスクを着用し、手の消毒や手洗いを励行した。コロナ禍の影響で不安定な社会情勢が続く中、追い打ちを掛けるように三月十七日最大震度六強を記録する福島県沖の地震に見舞われた。地震の影響で東北新幹線が白石蔵王駅付近で脱線。郡山―一ノ関間で復旧するまでの約一か月間、運転を見合わせ大きな被害と影響をもたらした。二月にロシア軍によるウクライナ侵略。四月には円が二十年振りに百三十一円台に急落。七月の参議院選挙を前に安倍元首相が選挙応援中に銃撃され死去。九月に東京五輪汚染問題で元理事が受託収賄容疑で逮捕。年末にかけては岸田内閣の閣僚が諸問題で次々更迭されるなど、国内外の政治経済も混沌を極めた。ロシアとウクライナの戦

争の影響で世界的なエネルギー問題が起こり、電気代やガス、ガソリンなどの大幅な値上げが懸念されている。十月の観光シーズンに合わせコロナ禍における緊急経済政策の一環で、旅行代金の割引や、飲食や買い物の一部を補助する「全国旅行支援」が開始された。これを利用し、多くの人が旅行し、全国の観光地が賑わった。混乱と激動の中、先を見通すことの出来ない一年だった。

●歌舞伎座の感染対策

令和二年の緊急事態宣言解除後も引き続き感染防止のための業態別のガイドラインが設けられた。劇場関係にはイベント開催時の入場人数の制限、消毒の徹底、出演者の主催者による行動管理など協力が要請された。

歌舞伎座はこれまでも劇場の感染対策の模範となるべく東京都や保健所、専門家と協議し厳しく徹底的な対策を実施してきた。多くの劇場、会館が歌舞伎座を参考に倣い感染対策を施した。その歌舞伎座も一時は定員の五〇％まで座席の販売を抑えたが、感染状況の沈静化とコロナとの共存を鑑み、

関係各所とも協議の上、切符の購入者をすべて歌舞伎座が把握出来る型を取り、徐々に販売座席数を増やし、十一月の團十郎襲名興行からは定員一〇〇%の全席販売に戻した。また「地方」と呼ばれる舞台で演奏する演奏者達も、感染防止の観点から黒いマスクをして演奏していたが、マスクを外しての演奏に戻った。

観客の側は、引き続き「マスク着用」と「体温測定」「手指消毒」は求められたものの「飲食」については指定された場所での黙食が認められ、コロナ禍前の観劇形態に少し戻った。

十一月から劇場指定の関係者による「大向う」がアクリル板で囲われた場所で、マスクを着用し、かつ事前に当日誰が入るか歌舞伎座が把握する万全の対策の上で再開された。歌舞伎には必要不可欠な「掛け声」も異例な型ではあるが、三年振りに復活した。

●日本舞踊の舞踊会

歌舞伎座の感染対策緩和に倣い、国立劇場をはじめとする各地の劇場で、コロナ禍で中止や延期を余儀なくされていた舞踊会の開催が目に見えて増加した。宮城県内でも延期されていた舞踊会が開催された。感染対策に万全を期さなければならぬ苦労はあっても演者も観客も開催の喜びはひ

としおで、たいへん喜ばしい事であった。

●宮城県内の日本舞踊界の動向

令和四年度の（公社）日本舞踊協会宮城県支部の会員を中心とした舞踊家は終息をみない新型コロナウイルス感染拡大と地震に見舞われ、出口の見えない不安と混乱の世相の大きな影響を受けた。その状況下で新型コロナウイルスの感染状況を鑑みながら、延期となっていた舞踊会が開催されたことは明るい話題となった。

◎コロナ禍における日常の稽古

緊急事態宣言の自粛期間中、多くの指導者は稽古を休みにせざるを得なかった。コロナとの共存が掲げられ稽古を再開したものの、コロナが完全に終息した状況ではなく、不安がすべて解消された訳ではない。再開を喜び稽古に励む弟子もいるが、不安から再開を躊躇する弟子も多い。一度お休みになったことをきっかけにやめてしまう弟子も多いと聞く。日本舞踊界にとって、コロナ禍は厳しい状況をさらに深めてしまった。

◎コロナ禍での宮城県内舞踊公演の開催

その状況下で、コロナ禍で延期になっていた舞踊会が相次いで開催されたことは明るい話題となり、コロナ禍前の日常

に戻る大きな光明となった。開催された会ではコロナと社会活動を共存させていく社会状況、方向性を踏まえ、感染状況を鑑み、前述した歌舞伎座の感染対策を参考に感染防止のガイドラインに沿った対策を施した。有事の際のため、入場者の連絡先を把握し、舞台上の立方以外は裏方関係者も観客もマスクを着用し、場内での飲食や会話は控え、出演者以外楽屋への出入りも遠慮してもらうなどの対策をとった。会主の苦労は大きかったと思うが、演者、観客双方の心構えと対策の順守が功を奏し、舞踊公演から感染クラスターが発生することは無く無事に会を納めることが出来た。

●コロナ終息後の日本舞踊の課題

コロナ禍が終息すると、人々の気持ちも前向きに晴れ、新しい事を始めたり、心や人生の充実を求め文化的なことに目を向け、習い始める人も多いのではないだろうか。

希望がある反面、課題も大きい。少子高齢化、世の中のデジタル化、物価高騰、生涯賃金や年金が見通せない不安、核家族化、女性の社会進出など日本舞踊を取り巻く環境の厳しさは年々増している。かつて生活に密着していた着物や三味線音楽などの日本文化も戦後の生活の西洋化で、いまや馴染みのない人達には遠い異次元のものになってしまった。日本舞踊は不変の人間の喜怒哀楽を表現しているとはいえ、江戸

時代の風俗や生活感を描く日本舞踊は「難しい」「敷居が高い」「お金がかかるからお金持ちがやるもの」といったような誤解を与えている。

そして、驚く事に今の若者は、多くの舞踊作品に登場する物語「忠臣蔵」も「頼光の鬼退治」も「弁慶義経」も知らない。昭和の時代、日本人なら誰もが知っていた常識が、令和の今日では常識ではないのだ。この状況下で日本舞踊の伝統を後世に繋いで行くことは並の努力では難しいだろう。現状のままでいたら日本舞踊に携わり愛好する人は「絶滅危惧種」になるだろう。そうならないためには今にも増して、日本舞踊を知らない人、間違った理解をしている人達に対し「真の日本舞踊の魅力」を伝える努力が必要だ。踊る楽しさ、見る楽しさを伝えてゆく地道な活動が必要だ。一般の人達への「露出」がもっともつと必要であろう。

さらに、時代に合わせた構造改革からも逃れられないと感じている。非常に難しい事だが考え方もやり方も、しきたりも慣習も変えるべき所は変える、変えてはいけない所は守る。大局を見て大鉦を振るうことも微細に見て修正することも必要に応じて行わなければならないだろう。

少子化でこれから愛好者の間口はどんどん狭まるだろう。その中でも切り口はたくさんある。国際化の中で日本人として日本文化を理解するために日本舞踊は役に立つ。かつ、社

会人としての礼儀や師弟関係、人間関係も学ぶ事が出来る。稽古では体と頭両方を使う日本舞踊は中高年の健康維持に適している。また稽古では着物や浴衣を着るので、着物を着慣れる。着物を楽しむための日本舞踊。そして生き甲斐、人生を豊かにする日本舞踊。表現する喜びは生きた喜びに繋がる。舞踊を通して季節や人の感情の機微に敏感になり、音曲や絵画、歴史にも興味や教養が深まっていく。様々な魅力が、伝統に培われた日本舞踊にはある。宮城県の舞踊家は日本舞踊の伝統を次代に継承するため常日頃から努力を惜しまず体現している。その輪をさらに一致協力して広げて頂きたい。多くの人達が日本舞踊を身近に感じ、その魅力「日本舞踊の真のよさ」を知ってもらうために。

●宮城県内のホール会館の移転、新築

東京エレクトロンホール宮城（宮城県民会館）やトクネストホール仙台（仙台市民会館）の移転新築の話が出ている。新しいホールが日本舞踊を上演しやすい劇場になるよう県内の舞踊家には主体性をもって働きかけて貰いたい。地方に本当の意味での良い「場」がなければ人口だけではなく文化の都会への流出も、逃れられないだろう。

●宮城県内外での舞踊公演の記録 ○【多賀城市】

五十周年記念 第十一回 花柳流
ひろはな会

令和四年五月一日

多賀城市文化センター・大ホール
会主 花柳 尋葉奈

清 元	花がたみ	特別出演	花柳	登代尋
常磐津	東都獅子	新名取	花柳	奈ち葉
長 唄	二人道成寺	新師範	花柳	奈々舞
		新名取	花柳	奈幸貴
常磐津	屋敷娘	新名取	花柳	奈立華
長 唄	舞さくら		花柳	尋奈由
清 元	北 州		花柳	奈与染
常磐津	山 姥		花柳	奈由妙
清 元	吉原雀	特別出演	花柳	真貴夫
		会主	花柳	尋葉奈
大和楽	河	特別出演	花柳	貴代人
		他	計	二十一番

コロナ禍で一度は会の延期を余儀なくされたが、無事に



吉原雀 花柳真貴夫・会主 花柳尋葉奈

開催。五十周年を寿ぐに相応しい大曲が並ぶ華やかな舞踊会となった。会主の花柳尋葉奈は、子供の頃より花柳登代尋のもとで研鑽を積み、昭和四十六年「ひろはな会」を創設。以来五十年に亘り数々の舞台に立ち活躍し、大勢の門弟を育て慕われてきた。また地元多賀城市の教育委員会委員、多賀城市芸術文化協会会長の要職にも就き、芸術文化、教育の振興、発展にも寄与して来た。四名の新名取と一名の新師範が披露された。

序幕は会主の師である花柳登代尋の「はながたみ」から。花札に描かれる草花や役を歌詞に取り入れ四季を表現する曲。さらりとした粋な風情の中に、品格と弟子への愛情を感じさせる懐の深い踊りを見せ良い序開きになった。出演者は小学生から九十歳の方まで幅広く、日頃の成果を披露する。「二人道成寺」や「二人三番叟」、「連獅子」などの大曲が続き、意欲的な「さくら」で調和のとれた群舞を見せる。会主花柳尋葉奈は特別出演の花柳真貴夫と「吉原雀」を品のある素踊りで。放生会や吉原の風俗を情緒たっぷりに粋に見せる。「河」特別出演の花柳貴代人が隅田川を背景に様々な登場人物を的確にさらりと踊り分け盛況な会を締め括った。

○〔仙台市〕

（公社）日本舞踊協会宮城県支部

第三十四回 各流舞踊公演

令和四年六月五日

仙台 電力ホール

主催（公社）日本舞踊協会宮城県支部

共催 宮城県扇の会

常磐津 松の名所 若柳 梅京

長唄 島の千歳 藤間 宝園

地唄 珠取海士 吉村 花照

常磐津 夕月船頭 水木 歌惣

大和楽 鐘 水木 和歌那

長唄 手習子 藤間 寿和枝

長唄 四季の山姥 支部長 水木 歌泰

長唄 浦島 特別出演 山村友五郎

他 計二十一番

長唄 杵屋直吉・杵屋六三郎

常磐津 常磐津初勢太夫・常磐津文字蔵

地唄・三弦 井上佐誉文

囃子 望月太喜右衛門社中 出演

創立六十周年を迎えた日本舞踊協会宮城県支部の所属会
員出演の会。師範・名取の質の高い舞踊が見られる会とあつ
て楽しみにしている舞踊ファンも多い。地方の演奏者も活
躍している一流どころが顔を揃え、協会の会に相応しい。
コロナと地震で二度の延期を余儀なくされたので役員の苦
労、心労はいかばかりだったかと察する。

上方の名流、山村流六世宗家・山村友五郎を特別出演に
迎え、宮城県支部会員七流派二十二名が出演した。

序幕は若柳梅京の「松の名所」。由緒ある各地の松、尉と
姥の長寿を寿ぐ格調高い素踊り。男舞の扮装がめずらしく
鼓の調べにのった拍子舞があざやかだった藤間宝園の「島
の千歳」。母の子を思う強い気持ちで舞に込められた吉村花
照の「珠取海士」。小気味のよい江戸前の踊り、水木歌惣の
「夕月船頭」。恋への執着と無情を表現した「鐘」水木和歌那。
歌舞伎の人間国宝七代目中村芝翫が「子供が素で見せるか
芸を積んだ年功者が芸で見せるしかない難曲」と芸談を残
した「手習子」。寺子屋に通うあどけない無垢な可愛さを藤
間寿和枝が芸で見せる。元は美しい傾城、足柄山の金太郎
の母にして現在は靈魂をもった山の神という山姥。支部
長を勤める水木歌泰が懐の深い踊りで美しい女、母の滋味、
大自然の四季のめぐりを表現した「四季の山姥」。大喜利は
特別出演の山村友五郎「浦島」二枚扇を巧に自由自在に操

る技に目を奪われる。角々のきまりがきつぱりしていて、
さすがの名品。他の出演者も「流儀らしさ」「作品の持ち味」
を十二分に踊りに込めた佳品の舞台だった。場内満員の観
客も出演者も開催の喜びを共有し舞台と客席の一体感を感
じた嬉しい舞踊会になった。

○【仙台市】

第二回宮城県各流子ども舞踊大会

令和四年七月二十四日

仙台市福祉プラザ ふれあいホール

主催 (公社) 日本舞踊協会宮城県支部

共催 宮城県扇の会

(公社) 宮城県芸術協会

十社中 十九名参加

日本舞踊を次世代に継承し、コロナ
禍で活動が制限された子供達の活動の
場を広げる趣旨で行われた「子ども舞
踊大会」が、昨年に引き続き第二回が
開催された。今回は「未就学児の部」「小
学生低学年の部」「小学生高学年の部」
「中学生の部」と年齢別に四部門に分け



子ども舞踊大会出演者

ての開催。

子供達が日頃の稽古の成果を披露した。少子高齢化、親子ともに日本舞踊離れが著しい昨今、日本舞踊を習う子供達の目標となり、意欲と技量が高まること。流派を越えての舞台となること。出演者の友達、家族に日本舞踊を見てもらい知ってもらう絶好の機会であること。など大きな成果が期待できる意義のある会である。

宮城県の文化向上のため、日本舞踊の後継者、愛好者育成のため是非これからも継続して開催してもらいたい。

○【仙台市】

西崎千久沙 師籍四十周年記念発表会

令和四年九月四日

仙台 電力ホール

会主 西崎 千久沙

主催 千久沙日本舞踊学園

千久沙日本舞踊学園後援会

小品集

箏曲演奏 常磐木学園高等学校

西崎 沙雪 他

長 唄 鷺 娘

新名取披露 西崎 沙泰

常磐津 神楽娘

新名取披露 西崎 沙月

長 唄 賤の苧環 新師範 西崎 沙少
長 唄 まかしよ 会主 西崎 千久沙
他 計十番

会主の西崎千久沙師籍四十周年を記念する会。一名の新師範と二名の新名取の披露。会主はもつと気軽に日本舞踊に触れる場を作るため、千久沙日本舞踊学園を創設した。プログラムの出演者のコメントから学園の和気あいあいの雰囲気と真摯に学ぶ生徒の姿が覗えた。



まかしよ 会主 西崎千久沙

○【白石市】

第十一回チャリティリサイタル

若柳 梅京 華舞台

令和四年十月三十日

白石市古典芸能伝承の館（碧水園能楽堂）

主催 若柳 梅京後援会

ゲスト 荒川 洋（フルート）

常磐津 松の名所 若柳 梅京

フルート演奏 荒川 洋

長 唄 島の千歳 若柳 梅京

会主の若柳梅京は白石に拠点を持ち、東京や仙台での舞台出演、宮城県芸術協会執行理事等で活躍。地元白石の文化芸術振興の発展に寄与し、国際オリンピック委員会に勤務した経歴から真の国際人養成を目指し、地元の子供達に日本舞踊を体験させる教育にも力を注いでいる。東奔西走の活躍の中、十一回目のリサイタルを碧水園能楽堂で開催した。会場は立ち見もでるほどの満席で熱気に包まれた。「松の名所」では素踊りの表現の魅力ときまりの形のよさを格調高く見せた。「島の千歳」は美しい白拍子で登場すると客席に「ジワッ」が起きる。前半の舞は優美。後半は拍子にのる面白さを味わう踊りだった。幕間のフルートもジャンルの異なる文化交流の意義ある演奏だった。



松の名所 若柳梅京



島の千歳 若柳梅京

○【仙台市】

第二十回 歌泰会

令和四年十一月二十七日

仙台 電力ホール

会主 水木歌泰

長 唄 春秋伊達模様

水木 綾女

水木 歌六

他四名

長 唄 連獅子

水木 泰幸

新名取

長 唄 花咲爺 会主

水木 歌泰

口上

清 元 青海波

水木 妙歌

清 元 喜撰

水木 理恵歌

清 元 玉屋

水木 歌奈穂

長 唄 京鹿子娘道成寺

水木 歌久人

長 唄 傀儡師 特別出演

水木 佑歌

他全十七番

長 唄 今藤政貴・杵屋栄敏郎

清 元 清元梅寿太夫・清元紫葉

小唄 田村 成美・田村 てる
囃子 望月太喜衛門社中

会主の水木歌泰は水木流東京水木会の重鎮。(公社) 日本舞踊協会の支部長も務める。コロナ禍で会の延期を余儀なくされたが無事開催。流儀でも舞踊協会でも重責を担う立場での会の開催は心身共に相当の苦勞があったと察する。会主は長唄「花咲爺」を飄々と踊る。



まかしよ 会主 西崎千久沙

誰もが知る昔話を仕方斬で踊る。前割の素踊りだが登場した瞬間「無垢な妖精」が現われた様。その飄逸な踊りにぐいぐい引き込まれてゆく。昔話の絵巻を読み聞かされているような、味わいのある踊りだった。口上には揃いの着物で名取が勢揃いし社中一門の隆盛を感じた。

大喜利に水木流東京水木会理事の水木佑歌の「傀儡師」。

○【仙台市】

歳末たすけ合い
第五十九回各流舞踊大会
令和四年十二月四日
仙台 電力ホール

主催 (公社) 日本舞踊協会宮城県支部
共催 宮城県扇の会

若柳尋寿賀社中「蓬萊」・水木歌惣社中「青海波」・若柳梅京社中「藤娘」・「夕月」・花柳雅好社中「千代の松」・「大黒舞」・吉村花照社中「小廉の戸」・水木和歌那社中「重陽」・藤間寿和枝社中「松」・花柳登代尋社中「潮来出島」・「新さんさしぐれ」・「武田節」 水木歌泰社中「春秋伊達模様」 藤間勘そめ社中「鶴と亀」・「藤むらさき」

他 計二十七社中出演



花柳尋葉奈社中



藤間寿和枝社中

二部構成での上演。収益と募金は「NHK歳末たすけ合い」と「宮城県社会福祉基金」「仙台市社会福祉協議会」へ贈呈された。コロナ感染も沈静化に向かい、客席は日本舞踊愛顧の大勢の観客の熱気に包まれた。出演者からも一年を無事過ごせた安堵と新年の安寧を祈る気持ちを感じられた。一年の舞納めのおめでたい舞台となった。

おお 須賀 豊
す か ゆたか

(日舞名取・歌舞伎大向弥生会副会長)



ご挨拶

茶 道

令和四年に入っても、新型コロナウイルス感染症の終息がいまだに見られない。毎日発表される感染者数に一喜一憂し、昨年同様、大きな茶会は中止となった。各流派、感染予防に徹しつつ、行事に携わったようである。

宮城県芸術協会茶道部研修会が行われ、京菓子や創作菓子などを学んだ。ZoomやYouTubeによる研究会等を行った流派もあった。

令和五年度は各地でのイベント（仙台七夕まつり等）も平常通り行われるようであり、茶会も復活の兆しがみられる。茶会が平常の形に戻るのは、まだまだ先のことであろうが、一日も早い再開を心から願っている。

第二十六回杜の都大茶会

宮城県芸術協会茶道部（加入十一流派）と河北新報社との共催で「杜の都大茶会」は、毎年五月に開催されていたが、今年も昨年同様、コロナ禍のため中止となった。

第五十九回宮城県芸術祭茶会

輪王寺において、毎年十月に開催されていた茶会が、コロナ禍のため、昨年同様中止となった。

「仙庵」寄贈五十周年記念講演会

―裏千家十五代家元鵬雲斎千玄室大宗匠―

茶道裏千家十四代家元夫人で、仙台市名誉市民の故千嘉代子氏が、太白区の茶室「仙庵」を、市に寄贈してから半世紀になることを記念し、五月二十二日、仙台国際センターにおいて、嘉代子氏の長男で十五代家元の鵬雲斎千玄室大宗匠（九十九歳）による講演会が開催された。嘉代子氏との思い出などを振り返り、小学二年生ごろに嘉代子氏の指導で始めた日課を紹介した。洗顔後に映った自分にあいさつするというもので、「鏡の中の自分に言えるなら、みんなに挨拶できる」と教えられた。今でもやっている」と話した。



茶室寄贈から半世紀 裏千家 15 代
家元 母の思い出語る

家元を継ぐ立場として、特に厳しく育てられたという千大宗匠。「今の私をつくってくれたのは母」と感謝の思いを口にした。裏千家淡交会宮城支部が主催し、オンラインを含め、県内の関係者約六百人が参加した。講演に先立ち、仙庵での茶会もあった。

茶道の礼儀作法 白石の児童学ぶ

白石市の小学四年生を対象にした伝統文化体験教室が十一月八日、市古典芸能伝承の館碧水園で開かれた。越河・太平の二校の児童十八人が茶道と日本舞踊を学んだ。茶道は碧水園の子ども教室で講師を務める遠藤宗清さんが教え、茶室に入る手順やお茶の飲み方、たて方を説明した。体験教室は二〇〇五年から毎年実施。十二月までに全九校の児童が参加した。

「大條家茶室」を紙芝居で紹介

（震災で被災の山元町文化財復旧着手）

山元町坂元地区にあり、仙台藩に仕えた大條家ゆかりの町指定文化財「茶室」の価値を発信するイベント「お茶室のことを知って、皆に話せるようになろう！」が十二月三日、坂元地区の徳本寺本堂で開かれた。

町教育委員会が東日本大震災で被災し、立ち入り禁止が続

く茶室の復旧事業に着手したことを踏まえ、同町のNPO法人ポラリスと町民ら有志でつくる「山元いっ茶組」が企画した。イベントでは、いっ茶組が制作した茶室の概要や歴史を紹介する電子紙芝居を上映した。

いっ茶組発起人の徳本寺の早坂文明住職（七十二歳）は「お茶室の存在を広く知ってもらうとともに、再公開後にどう活用できるか、展望を考える機会になると良い」と話した。

表彰

令和四年度

宮城県芸術協会功績者表彰

守 宗玲（表千家）

大橋宗恵（江戸千家）

五島桃苑（煎茶道三彩流）

竹丸京葉（煎茶道三彩流）

三河南朋（織田流煎茶道）

根本仙喜（大日本茶道学会）

樋渡宗広（遠州流茶道）

心よりお祝い申し上げます。



震災で被災の山元町文化財復旧着手 大條家茶室魅力知って

謹弔

細田 宗倫殿（裏千家） 二月十日

大和田宗嬌殿（裏千家） 六月一日

朝比奈南樹殿（織田流煎茶道） 九月十二日

岡崎 宗澄殿（裏千家） 十二月三十日

謹んでお悔やみ申し上げます。

主な茶会と関連事項

一月 九日 織田流煎茶道明徳会初煎会

（ホテルメトロポリタン仙台）

十六日 石州清水流初釜

三十日 玉川遠州流支部総会並びに初釜茶会

（トークネットホール仙台）

三月二十七日 裏千家宮城支部総会（書面）

四月 石州清水流道閑総会（書面）

九・十日 裏千家第一回研究会

（オンライン視聴・宮城支部道場）

十七日 三彩流師範等の研究会

二十四日 大日本茶道学会第五十二回仙台支部総会

（資料発送にて対応）

五月 三日 第二十回塩竈神社観桜茶会

（コロナ禍のため中止）

二十二日 裏千家「仙庵」寄贈五十周年記念茶会

（仙庵）

同日 裏千家「仙庵」寄贈五十周年記念講演会

（仙台国際センター）

二十八日 第二十五回杜の都大茶会（各流派）

二十九日（コロナ禍のため中止）

六月 五日 玉川遠州流 風炉研修会

（トークネットホール仙台）

同日 裏千家栄西忌

（コロナ禍のため法要のみ）

二十九日 宮城県芸術協会茶道部研修会

（せんだいメディアテーク）

七月 九日 表千家資格者講習会

九・十日 裏千家第二回研究会

（オンライン視聴・宮城支部道場）

十日 表千家支部総会・一般講習会

同日 三彩流売茶忌

九月二十五日 玉川遠州流茶道研修茶会（鳴子 大沼旅館）

二十八日 表千家教授者講習会

第五十九回宮城県芸術祭茶会

（コロナ禍のため中止）

二日 三彩流緑香会茶会

同日 塩竈市芸術文化祭茶席 織田流

(塩竈市壺番館遊ホール)

三日 織田流明徳会献茶式 (新坂町家元宅茶室)

十日 史都多賀城万葉まつり茶席

織田流煎茶道

(多賀城駅前)

十六日 開山玉舟和尚及び片桐石州每歳忌法要・茶会

二十二日 江戸千家不白会仙台支部茶会

三十日 七ヶ浜町芸術文化協会文化祭

織田流煎茶道茶席

(七ヶ浜国際村)

十二月

三日 表千家支部茶会及び青年部十五周年記念茶会

同日 しばた茶会 伏見晋冲 (玉川遠州流)(如心庵)

猪股宗鶴 (裏千家)(郷土館茶室)

同日 多賀城芸術文化協会文化祭茶席

織田流煎茶道

(多賀城市文化センター)

五日 泉区民文化祭茶席

織田流煎茶道

(日立システムズホール仙台)

六日 泉区民文化祭茶席 遠州流

十二・十三日 裏千家第四回研究会

(オンライン視聴・宮城支部道場)

十三日 玉川遠州流 炉研修会

(トークネットホール仙台)

二十日 石州侯忌及び二代動閑忌茶会

十二月 九日 年納めの茶会 渡邊晋祥 (玉川遠州流)

(青峰堂)

十八日 裏千家宗旦忌・茶筴供養

(コロナ禍のため法要のみ)

(瑞鳳寺)

児玉

宗陸
(裏千家宮城支部参与)

華道

新型コロナウイルスによるパンデミックから丸二年が経った。その間、殆どの文化催事は中止、或いは延期や期間の短縮、出品者の削減等開催規模を縮小しての開催となった。

一般社団法人宮城県華道連盟の活動も他団体と同じく、新型コロナウイルス感染症の波に吞まれ、多くの事業を中止とせざるを得ない時期となった。

しかし何もせず、ただ手をこまねくだけではなく、YouTube を利用したオンラインいけばな展を開催。また、震災十年を迎えるにあたり心の復興をもう一度掲げ、南三陸町でいけばなワークショップを開催し、語り部講話も拝聴し、その模様もYouTube に上げていった。

そして華道連盟の創立八十周年記念華展の模様を作品集としてまとめ発行したのも、家に籠もりがちになり、花と親しむことを忘れてしまいそうなか、華やかな華展に思いを馳せられ、とても良い事業となった。

その様にしてこのコロナ禍を乗り越えようと奮闘してきた甲斐もあり、コロナが落ち着いている時期には、従来の事業を再開することが出来るようになった。また、第七波、第八

波と感染が爆発となれば事業を延期、または見送ることにも皆が慣れてきていたようにも感じた。

これがウイズコロナでの事業姿勢であつただろう。

そのような中で、第八十回を迎えた春のいけばな展は「宮城の春に華が舞う」と題して令和四年二月五日から八日まで開催された。

센다いいメディアテークを会場に、前年は中止となつた春のいけばな展。来場者全ての検温と手指の消毒。そして開催終了後二週間ほどでチケットを破棄することをお約束した上で、チケットの裏に氏名と連絡先を記入して頂くことを全てのお客様に願ひし、何とか開催にこぎ着けた。

特筆すべきは朴澤一堂理事長（本原遠州流）、伊藤翠華副理事長（池坊）を始め、所属八流派の代表者・加藤静香（池坊）・倉田豊輝（小原流）・高橋理雪（古流松藤会）・西村一観（清泉古流）・佐々木海風（仙昇池坊）・佐藤華畊（道風流）・朴澤一草（本原遠州流）・手塚菖園（龍生派）という錚錚たるメンバーが、前期・後期の四日間を通して作品を展示するという

企画を実行した。普段よりも大きな作品と、そして一般会員の倍の四日間という期間を通して、花の変化に深みを感じられるとお客様の好評を得た。

また、一度とはいえ中止となった悔しさをバネにするのかのように例年に勝る力作が並び、二月の仙台に一足早く春が来たようだと、言う声が会場のあちこちから聞こえた。本場に嬉しいことだった。

例年会場としているせんだいメディアテークが令和四年九月から五年の三月いっぱいを目途に改修工事が行われるため、また次回華展が中止となるとあって、前年中止の分と合わせ三年分の思いが乗っていたのかも知れない。手前味噌ではあるが、とても良い華展であったと思う。

これからはアフターコロナを視野に入れて活動を本格化、活発化させていく時となる。マスクの義務化も解除され、新型コロナウィルス感染症も五類へと引き下げられていく中で、いかに安心・安全を担保した事業を開催できるか。軋轢を生む場もあるかと予想されるが、なんとか知恵を絞って、お互いが気持ちよく芸術鑑賞できる場を作っていかなければならないと今から覚悟し、情報の収集に努めている。今後は公益社団法人宮城県芸術協会のような各分野の芸術家が参加している場で情報の共有、知恵の共有を図っていきたいと考えている。

さて、県内のいけばな事情に目を移すと、やはり前年よりもずっと多くの華道展が開催されたように感じる。

四月十六日から十八日まで龍生派宮城県支部がせんだいメディアテーク五階ギャラリア・bを会場に「龍生派宮城県支部展 はれやかに」を開催。こちらは昨年、一昨年と支部創立八十周年を記念する華展をコロナ禍で中止せざるを得なかっただけに、三年ぶりにその無念さを吹き飛ばすような、力作が揃った作品展となった。コロナ禍の二年間、家で、教室で、自然の中で花と対話し、仲間と研鑽に励んだその結晶が発露されていて、時に清々しさと、時に歴史を振り返るような重厚さを感じられる作品が並んだ。また石巻の桃生地区でガーベラを生産している農家のグループJ A いしのまき桃生ガーベラ部会との交流から、展示されたガーベラの作品もとても華やかで春らしさを感じさせてくれて、会場には沢山のはれやかな笑顔が溢れていた。

四月二十日から二十五日まで池坊の華展が「いけばなの根源池坊展 聖徳太子一四〇〇年大遠忌記念『和と美』」と題して仙台三越本館七階ホールで開催された。こちらは東北地区の池坊華道家が集まって開催した華展となり、タイトルにもあるとおり聖徳太子の一四〇〇年大遠忌を記念した、テーマ性の高い華展であった。前半は聖徳太子の資料は基より、仏

教といけばなのつながりを感じさせる三具足（花瓶・香炉・燭台）の花瓶に立花が立てられ、隣に香炉、燭台が並んだ一つの作品や、聖徳太子の逸話を元にした作品の展示など、いつもの華展では見られない作品が並んだ。そして後半は「いけばな植物園」をテーマに、バラ科・アヤメ科・蘭・観葉植物・そして東北の花と五つにカテゴライズされた作品が並び、それぞれの植物としての美しさに加え、それをいけた作品の素晴らしさにいけばなの魅力を改めて感じた来場者が多かったのではないだろうか。また前半の歴史、学術的なテーマと、後半の親しみやすく興味を惹きやすいテーマ、この緩急の違いとでもいうべきか、幅の広い楽しませ方は、私個人としても、とても勉強になるものであった。

七月九日から十二日まで、前述のせんだいメディアテークのリニューアル閉館により、例年の秋から大幅に前倒しされた形で第五十九回宮城県芸術祭華道展がせんだいメディアテーク五階ギャラリーAにて開催された。華道にとって開催時期の二か月の違いはとでも大きく、花材は盛夏を楽しむものが多くなり、秋とは違い夏の生命力に溢れた華展となった。筆者は芸術協会の執行理事も務めているので内情を知るが故に難しいのはわかってはいるのだが、芸術の秋だけではなく、芸術の春、芸術の夏、冬だってあって良いワケであるから、

日本独自の四季、季節感の溢れる芸術祭も良いのではないかと、そう思った夏開催の芸術祭であった。

十一月一日から六日まで、小原流仙台支部 みんなの花展「宮城の花と器」が東北電力グリーンプラザ・ギャラリーNORTHにて開催された。例年、若手主体の「みんなの花展」。今回もそのフレッシュさを遺憾なく発揮した作品が会場に並び、感心したりほえんだり、楽しませてくれる作品展であった。またSDGsをサブテーマとし、空き缶や空き瓶を組花器として利用し、新たに花器を買わずとも花を「オシャレ」（ココがとても大事）にいけられるというのは、もともと若い世代にも知って欲しいことであった。そして宮城県の工芸産業が長く続くようにと県内在住作家の作品を多数使用し、また作家ごとにQRコードを付けて展示することで、興味を持った来場者が作家と直接繋がれるというシステムも良いものであった。QRコードなど知らない、使えないという方もいらつしやるだろうが、そこはスマホ世代に頭を下げて、教える請うのも良いのではないだろうか？そこからだって新たなつながりが生まれなくても限らない。可能性を広げる楽しみをもっと貪欲に欲してもらいたいと願うばかりである。

古流松藤会宮城県支部では「創立四十五周年・佐藤理依先

生いけばな褒賞杯受賞記念 二〇二二宮城県支部展 感謝の
思い・花によせて いけばな・伝承の心と私たち」と題した
華展を南三陸町スポーツ交流村ベイサイドアリーナ文化ホー
ルを会場に十一月十九日・二十日の両日開催した。

まずいけばな褒賞杯とは、公益財団法人日本いけばな芸術協
会の名誉総裁であらせられる常陸宮妃華子殿下より協会への長
年の在籍・功績と長寿を祝い授与されるもので、華道人にとつ
てはとても名誉なことであることをお伝えしたい。そして令和
二年十一月に佐藤理依先生が栄えある受賞をされたのである。

コロナ禍ということで延期されていた受賞を祝う華展と支
部創設四十五周年が重なったのも何かの縁だったのだろうか。
震災から十年以上が経過し、笑顔が街にだいぶ戻った中で、
更に笑顔の花を咲かせるおめでたい華展が出来たこと、多勢
の来場者が町内外から訪れたこと、また久々の華展が出来た
喜び、本当に佐藤先生の笑顔は周りの皆を更に笑顔にし、素
敵な花とも相まって良い華展、良い時間であった。

これからもお元気で、華道連盟の名誉会員として後進の育
成に励んで頂きたいと切に願う。

また、華道連盟には所属されていないものの活躍があった
県内の流派、華道家をご紹介したい。

いけばな褒賞杯といえど石巻在住の華道家で古流庵家会家
元の稲井理善氏が受賞されたことも祝意と共にお伝えしたい。
おめでとうございます。

草月流宮城県支部が六月四日から六日までせんだいメディア
テーク六階ギャラリーにて宮城県支部草月いけばな展「今だ
からこそできる草月いけばな展―宮城の生産者とともに」を開
催した。大作のインスタレーションや、併設として宮城草月作
家協会展の展示をするなど工夫を感じる企画が展開されていた。

令和五年はアフターコロナが本格化し、街に人の溢れる景色が
戻ってくるだろう。もしかしたら新たな変異株が出てくることも
あるのかも知れない。その事に一喜一憂することなく、自分の花
をコツコツといけていく、それがこの二年のコロナ禍で学んだこ
と。そして仲間と乗り越え、喜びを分かち合うことの尊さを知れ
たのはコロナ禍での数少ない良かったことの一つだろう。

さあ、仕切り直すには良いタイミングだ！新たな芸術の景
色を目指して、臆せず一步を踏み出そう！

西村 一 観
にし むら いっ かん

(宮城県華道連盟 常務理事・清泉古流家元)

(一社) 宮城県華道連盟
 第八十回 春のいけばな展 宮城の春に華が舞う

理事長席 朴澤一堂 本原遠州流



副理事長席 伊藤翠華 池坊



加藤静香
池坊



倉田豊燿
小原流



高橋理雪
古流松藤会



西村一観
清泉古流



佐々木海風
仙鼻池坊



佐藤華畊
道風流



朴澤一草 本原遠州流



手塚昌園 龍生派



メディア芸術

オミクロン株が猛威を振るうなか、二月にロシアがウクライナに侵攻、三月に最大震度六強の福島県沖地震が発生、七月には安部元首相が銃撃により殺害される。二〇二二年は疫病、戦争、災害、テロと続けざまに災厄に見舞われた。あまりのことに夢か幻ではないかと感覚が麻痺しそうだが現実である。これらの出来事と比べれば小事ではあるが、八月、一九九七年から毎年開催されてきた文化庁メディア芸術祭が九月の第二十五回開催をもって終了することが公式ウェブサイトで発表された。「役割を終えた」というのが文化庁の言い分のようにあるが、あまりにも唐突な終了の告知だった。なにより国によるアートの公募機会がひとつ失われることは残念である。賞を与えることで、作家や作品が権威付けられ、形式主義に陥ることは問題だが、少なくともメディア・アートに関しては、この二十数年間そうした事態からは免れている。逆に言えば、それだけ作品発表の機会がなく、市場が小さいことの証でもある。またメディア・アートの中心的な技法である映像や音響によるインスタレーションは、コンテンツラリー・アートという大きな範囲で見た場合でも、今日の中心的な表現技法であり、メディア芸術

祭のメディア・アート公募は、結果的にアート全体への展望や評価軸を示すものでもあっただろう。これまでメディア・アートは、進歩していく技術を先んじて用いてみせることで、イリュージョンを提示してきたが、インターネットをはじめとする情報環境が社会インフラ化したことで、技術は個人の手から遠のき、イリュージョンはそれらのシステムに与えられるだけになりつつある。だが大衆化が完了したがゆえに、技術（＝アート）によって技術を相対化し批評する公的な枠組は、今日あるいは将来においても大きな社会的意義を持つのではないだろうか。なお、メディア芸術のなかでも、マンガやアニメなど商業ベースの表現系については、国から賞を贈られる以前に、既に作品が世間的評価を得ているものが大半であり、そのポピュラリティによって、むしろメディア芸術祭の周知が支えられてきた。そのことが明らかにしているように、芸術祭自体が、批評性よりも大衆性の獲得を意図していた側面がある。いずれにしても、大衆化と権威化の往復運動ではなく、批評精神の継続こそ公的な芸術祭や公募の役割であるとして欲しいものだ。

*

八月から十月にかけて、Reborn-Art Festival 2021-22「利他と流動性」の後期プログラムが開催された。後期は和多利恵津子と和多利浩一がキュレーターを務めた。今回から展示場所が石巻の中心部にまとめられているように感じられたが、これは、市街地だけでなく、新たに復興祈念公園の周辺が展示場所として使えるようになったためだろう。牡鹿半島の自然とともに作品を鑑賞できることは、確かにこの芸術祭の利点だが、同時に短時間での広範な移動が必要となり観客には大きな負荷でもある。そのため、ある程度、場所は集約されているほうがありがたいのも事実なのだ。さて今回も、音楽プログラムを含め多数の催しの全てを見られていないのは申し訳ないが、印象に残った作品について紹介する。

市街地の展示では、元鮮魚店「プロショップまるか」を利用した、弓指寛治と朝吹真理子による《スウィミング・タウン》が秀逸だった。これは絵画表現を主とする弓指と、小説家の朝吹によるコラボレーションである。二人は、石巻の生活者に取材して、震災体験や日々の暮らしぶりを聞き取り、物語を紡いだした。十年以上が経過した現時点から、あえて震災について直裁に扱うことを恐れず、ナラティブの表現として結実させたのである。二十人ほどの人々の物語を、建物の内部に絵と言葉によって配置し、全体をひとつの絵巻物のよう

にあらわした。こうしたインスタレーションの手法は、近年よく目にするものであるが、本作の全体をとおして感じられるのは、弓指と朝吹の石巻の街や人への親愛である。技法の目新しさや、主題の新奇性に傾かず、聞き取りを元に実直に表現しながら、なおかつ物語や展示空間の細部にまで気を配ることで、元鮮魚店自体が見事にルポルタージュのメディアとして活かされた。映像を学びながら、母の死をきっかけに絵画表現をはじめた弓指にとって、描くことや展示することは、負の記憶や感情を「生」の活力へと「手」で化学変化させていくことなのかもしれない。そのためには、機械で撮影し編集するのではなく、直接描くことが必須なのだろう。また、毎日新聞二〇二二年十月一日号の記事によれば、新聞記者の「アートが被災地にできることは」という問いに対し、朝吹は「芸術にできることは常にはない」とはっきり答え、作り手として、他人や被災地を自らが救えると考えことは傲慢であるという考えを示している。影響を与える側に立つのではなく、自分はまだ石巻の声を受け止め、そっと丁寧に「置く」のであると。この作品は「有用性」に囚われず、また過去と未来を現時点で短絡させず、土地と人と歴史へ向き合い、寄り添った作品だったのではないだろうか。

先に触れた復興祈念公園の周辺には、いくつもの作品が設置されたが、それらのなかで特に印象的だったのは、SIDE

CORE (BIEN/ EVERYDAY HOLIDAY SQUAD) の《タ
ワリング・バカンシー》、さらひわきの《幻想考 The
Butterfly Dream 2022》、保良雄の《This Ground is still alive》
である。これらについて個別に紹介している。はじめに
SIDE COREである。SIDE COREは、高須咲恵、松下徹、西
広太志の三名で構成されるが、状況に応じて複数の表現者と協
働でプロジェクトを進めている。彼らの参加は二〇一七年、二
〇一九年に続き三回目である。Reborn-Art Festivalでは一貫
して震災復興工事による風景の変化と、その象徴としての防波
堤を主題にしている。今回は、北上川の河口の突端、日和大橋
の袂の防波堤に囲まれた空き地に、シートに囲まれた「何も作
り出さない工事現場」を出現させた。作らない工事現場とは相
反したコンセプトであるが、スケートボードなどのストリート
カルチャーへの強い関心に根ざした彼らにとって、そうした文
化と、資本主義社会の宿命であるスクラップ&ビルドは、都市
生活において表裏の関係にあるという認識なのだろう。スケー
トボードは、土や礫のない人工的な平滑面無しには成立しない
のである。さて内部では、東京や石巻各地で集められた多様な
音が、拡声器型の多種のオブジェから発せられ空間内で交錯し
ていた。その後、囲いの外側を散策すると、聞くことになった
耳は、自然と波や風の音をひろう。彼らは、防波堤に囲まれた
エアポケットのような石巻の一画で、ここでしかなくどこにで

もありそうな、コンテンツポラリーな都市の音景を浮かび上げら
せ、社会への諦念と肯定が、かろうじて平衡を保つ臨界領域へ
と観客を導こうとしているように思われた。

映像を用いたインスタレーションを主な手法とするさわひら
きは、小さな旅客機が室内を飛び回り、さながら空港のように
離着陸を繰り返すモノクロームの映像作品で世に出た。特に物
語展開をせず、淡々と繰り返されるその様は、日常のなかでの
小さな幻視体験のような作品である。彼は幻想について、現実
の比較対象として用いられるような弱いものとして捉えてはい
ないようだ。むしろ自然現象のように、現実生活のなかで必然
的に発生するものと位置づけている。さてしかし、今日の情報
化した社会で、そうした幻想的想像力を働かせる機会、あるい
は幻想を信じる経験はほとんどないだろう。幻想は、スマート
フォンやディスプレイを介して与えられるパターン化した消費
要素となった。また幻想のためのメディアである画像や映像は、
合成や自動生成も容易になり、フェイクニュースとして頻繁に
伝播している。情報空間に常時接続された社会でわたしたちは、
個人による幻想をゆるささないほど、幻想的にふるまう過剰な現
実に苦しんではいないだろうか。さて彼は今回、日本製紙の旧
社宅を用いて展示をおこなった。長屋のような平屋の社宅郡は、
外観からしてノスタルジックであり、そこに暮らした人たちが

と想いを馳せずにはいられない記憶装置である。それらの建物を《幻想考 The Butterfly Dream 2022》と題して内外部を用いたインスタレーションとした。他者や場所の記憶が、ミラーボールなどのオブジェクトや、映像の配置された家屋のなかで詩的に醸し出され、総じて、ゆるやかに流れる時間が表現されているようだった。そうした感慨を受けるのは、胡蝶の夢とタイトルにあるように、夢と現実、そのどちらをも主体性に基づいて肯定しようとする作者の寛容さゆえだろう。また、本作では音楽を、宮城県出身で活躍中のラッパー・環ROYが担当した。

保良雄は、復興祈念公園の脇の空き地の真ん中を耕して畑を設け、植物が生い茂るシェルターのようなインスタレーションを作り上げた。保良がこの作品《This Ground is still alive》を設置した場所は、整地され、砂利が敷かれた状態の土地である。作品の周囲はそうした状態のまま。いずれ舗装されて駐車場になるのか、某かの店舗が建てられるのか定かではないが、自然の循環とは切り離された人工的な場所である。そこを、保良は重機を使わず手で耕し、牡蠣殻を混ぜるなどして土壌改良するところからはじめた。土に微生物が増え、植物が生え、各種の虫が集まり受粉がおこなわれ、鳥が捕食に飛来するようになり、畑の見た目も見事なものになった。実際、わたしが訪れたときには何種類もの青々とした夏野菜でいっぱいだった。そうした生命力自体が、真夏の太陽に照

らされた灼熱の空き地に展示されたのである。空き地の砂利敷きと作品領域のコントラストは明瞭であり、実ったトマトの匂いや、湿気、虫の羽音によって、素直に生命の喜びを感じられる。保良が身体によって土地と格闘し、複数の生を蘇らせた本作は、まさにエラン・バイタルそのものだと言えるだろう。

保良はこの場所だけでなく、渡波エリアの旧水産加工場でも展示をおこなった。こちらの作品《fruiting body》は、前述した生命の躍動とは対照的に、太古からの連続した時間の尺に現在性を再配置しようとするもので、視覚的には抑制が効いた静の表現である。工場の人工的な空間のなかに、岩塩、海水、鯨の骨、電球などが糸で繋ぎ合わされて、互いに影響を与えながら静かに作用が循環するように配置された。地殻変動によって海底が隆起することで生まれる岩塩は、数億年前の海水の化石のようなものだ。そこに、現在の海水が少しずつ垂らされ、溶かされていく。電球の明滅や、空間に響くかすかなノイズによって、観客は作用の連関を感じ、自分も保良によって仕立てられた特別な循環機構に入り込んだことを意識する。そして、岩塩のような数億年の時間的存在、現在を生きる自分自身、震災を経たこの工場跡地など、複数のものが同時に存在することを改めて知るのである。本作は、

相当に広い空間を扱っているにもかかわらず配置が絶妙であり、コンセプトだけでなく、保良の卓抜した空間構成技術が際立っていた。

*

Chat GPT (Generative Pre-trained Transformer) が十一月にリリースされた。これは、人工知能の研究開発機関である OpenAI が開発したソフトウェアである。ユーザーからの質問や要請にチャット形式で応じる。全世界に無料で配布され、使われてトレーニングされることで、回答の正確さの精度が向上していく。最新の Chat GPT-4 は有料であるが、複数の入力情報から処理をおこなうマルチモーダル AI である。これまでのようにテキストだけ、画像だけ、音声だけといった入力ではなく、それら全てを総合判断するものだ。GPT-4 は、生成されたテキストや翻訳文だけを見ても、GPT-3 からの進化具合は凄まじく、更にマルチモードになったことで、より多くの情報の多様な組み合わせのフィードバックが得られることを考えると、この先の進化は想像することも難しい。すでに一億人以上が利用しているこのサービスだが、これまでにあった Apple の Siri や Amazon の Alexa とは次元が異なり、現在の社会の構成そのものに影響を与える可能性がある。すでに Chat GPT については、倫理的に警戒を示す識者も多く、大学などの教育現場では使用を制限しているところもある。表現分野において

も、いわゆる n 次創作的なものについては、Chat GPT のような AI が中心となっていくかもしれない。ただし、これは消費の観点から見た場合であって、Chat GPT によって、人の表現すること自体の欲望が満たされることはないはずだ。そのためこうした AI が、複製やアレンジを積み重ね、性能の洗練が進むほど、表現することの真価は違うところにあることが明確になるだろう。一例では、GPT-4 はユーモアを身につけたと言われているが、ユーモアを生む前提となるベロソスとの関係性についてはどうだろうか。有限であり、身体的な限界を抱えた存在である人間の意識の揺れ動きを、AI が模倣することは果たして可能なのだろうか。いや、それ以前にその模倣行為に意味はあるのかという疑問を呈さざるを得ない。とはいえ、数年前の近い将来、表層的には判別不可能なほど、こうした AI の技術的な洗練は進むに違いなく、その前では「メディア芸術」と呼称して、進化するテクノロジーの表現利用を焦点化してきた事実は、まさに胡蝶の夢に等しいだろう。しかしそのときこそ、メディア芸術は、未来や進歩ではなく、失われるものや過去との接続を、ユーモアやベロソスによって表現するという役割へと転換を果たすのではないだろうか。

清^し水^{みず}建^{けん}人^と

(せんだいメディアテーク企画事業係長／学芸員)



朝吹真理子、弓指寛治《スウィミング・タウン》



SIDE CORE (BIEN EVERYDAY HOLIDAY SQUAD) 《タワリング・バカンシー》

いずれも写真提供：Reborn-Art Festival



さわひらき 《幻想考 'The Butterfly Dream' 2022》



保良雄 《This ground is still alive》

いずれも写真提供：Reborn-Art Festival



保良雄 《fruiting body》

広域文化団体の 文化活動記録の

(公社) 宮城県芸術協会
宮城県文化協会連絡協議会
(公社) 日本舞踊協会宮城県支部
宮城県吹奏楽連盟
宮城県合唱連盟
宮城県おかあさん合唱連盟
仙台三曲協会
宮城県能楽振興協会
宮城県洋舞団体連合会
宮城県歌人協会
宮城県俳句協会
宮城県川柳連盟
宮城県詩人会
(一社) 宮城県華道連盟
宮城県民藝協会
(公財) 日本民謡協会宮城県連合会
全国民謡連盟宮城県連合会
宮城県民謡道連合会
宮城県写真連盟
宮城県文化財友の会

県内の文化団体のうち二十団体を
掲載。
(令和四年十二月三十一日現在)

■凡 例

- ①…………… 所在地
②…………… 電話番号
③…………… 代表者
④…………… 構成員数
⑤…………… 構成員の資格
⑥…………… 創立年月
⑦…………… 定期刊行物

公益社団法人 宮城県芸術協会

〒九八〇―〇八〇二 仙台市青葉区二日町十六―一

二日町東急ビル五―B

〇二二―二六一七〇五五

理事長 吉田 利弘

千九百二十九名

正会員になるためには会員二名以上の推薦を受け、理事

会の承認を得なければならない

昭和三十九年五月

機関誌「はなやま」(年四回発行)

「宮城県文芸年鑑」(年一回発行)

開催月日 催事名 場 所

7/24 第二回宮城県各流子ども舞踊大会 仙台市福祉プラザ

9/21~25 宮城県・吉林省友好県省締結 宮城県美術館

三十五周年記念交流事業

「芸術文化交流三十五年目

の現在地」工芸・写真展

11/9~13 第三回杜のみやこ工芸展 T F U ギャラリーミニモリ

11/11~1/20 書道部による県内小中学校 県内小中学校十六校

の講師派遣事業

11/30~12/6 第五十九回宮城県芸術祭絵画展 東京エレクトロンホール宮城

受賞者作品展

12/12~18 第九回定禅寺フォトコンテスト展 東京エレクトロンホール宮城

〈第五十八回宮城県芸術祭〉

2/13 第四十二回音楽コンクール予選 日立システムズホール仙台

3/13 第四十二回音楽コンクール本選 日立システムズホール仙台

〈第五十九回宮城県芸術祭〉

7/9 開会式 せんだいメディアアテーク

7/9~12 華道展 せんだいメディアアテーク

7/9~12 書道展 せんだいメディアアテーク

7/16~19 写真展 せんだいメディアアテーク

7/16~19 フォトサット in Sendai 2022 せんだいメディアアテーク

7/16~19 絵画展 (公募の部) せんだいメディアアテーク

7/16~19 彫刻展・彫刻公募展 せんだいメディアアテーク

7/23~26 絵画展 せんだいメディアアテーク

9/25 第四十二回音楽コンクール 日立システムズホール仙台

ガラコンサート

10/6~7 文学散歩 山形・庄内方面

10/15 「宮城県文芸年鑑」発行

10/16 長唄演奏会 トークネットホール仙台

10/22 文芸祭 東京エレクトロンホール宮城

10/28 音楽会 日立システムズホール仙台

11/9~13 工芸展 T F U ギャラリーミニモリ

11/28 表彰式 ホテルメトロポリタン仙台

宮城県文化協会連絡協議会

⑧ 千九八六―〇八三二 石巻市泉町三丁目一―六三
石巻市文化協会内

⑨ 〇二二五―二二―四六八九

⑩ 会長 足立 岳志

⑪ 六十一文化協会(約三万三千五百名)

⑫ 宮城県内市町村を単位とした文化・芸術協会

⑬ 昭和五十三年六月

⑭ 会報「くぐなり」(年一回発行)

⑮ 宮城県文化協会運営状況「心の華」(二年に一回発行)

開催月日	催事名	場 所
9 / 15	第四十一回宮城県文化協会 蔵王ふるさと文化会館 運営研修会	
11 / 26・27	第二十五回みやぎ県民文化祭 はまなすの館・本吉 総合体育館	

実施の中止・延期などがあったが、今年度は、担当ブロック協会の協力のもと無事開催できた。
この事業を中心として新しい文化活動の方法を模索しながら進めていく。

(会長 足立 岳志)

公益社団法人日本舞踊協会宮城県支部

⑧ 千九八〇―〇〇二三 仙台市青葉区北目町四―三―九〇一
(事務局 藤間寿和枝方)

⑨ 〇二二―二二―一六七〇一 (藤間寿和枝方)

⑩ 支部長 水木 歌泰

⑪ 百九十六名

⑫ 公益社団法人日本舞踊協会会員であるとともに宮城県支部

⑬ 会員(扇の会会員含む)、師範名取・普通名取であること

⑭ 昭和三十五年十一月

開催月日	催事名	場 所
6 / 5	(公社)日本舞踊協会宮城県支部 第三十四回各流舞踊公演	電力ホール
7 / 24	(公社)日本舞踊協会宮城県支部 第二回宮城県各流子ども舞踊大会	仙台福祉プラザ ふれあいホール
12 / 4	(公社)日本舞踊協会宮城県支部 歳末たすけ合い第五十九回各流舞踊大会	電力ホール

宮城県支部に加盟している各流派は、コロナウイルス感染症の対策を万全にし、それぞれ活動をした。

令和五年十二月十五日 文化庁 総括団体によるアートキャラバン事業（コロナ禍からの文化芸術活動の再開事業支援 本部企画）本部企画演目四番、支部演目一番 合計五番の構成。電力ホールにおいて開催予定。

その他（公社）日本舞踊協会本部の指示による事業への協力並びに県下、関連団体との連絡提携及び地域交流の親睦を深めることに努めている。

（庶務 吉村 花照）

宮城県吹奏楽連盟

〒九八一〇九〇四 仙台市青葉区旭ヶ丘三―三四―一〇

キャピタル旭ヶ丘三〇二

〇二―二七五―六七六一

会長 三塚 尚可

九千二十名（三百三十六団体）

宮城県内の小学校、中学校、高等学校、大学、職場、一般の吹奏楽団体

昭和三十三年

すいそうがく（全日本吹奏楽連盟発行）（年四回発行）

HP 「宮城県吹奏楽連盟」 www.abao.or.jp/miyagi/
Facebook 「楽器BANK 宮城県吹奏楽連盟」

開催月日 催 事 名 場 所

1 / 15・16	第五十五回宮城県アンサンブルコンテスト	仙台銀行ホール イズミティ21
2 / 13	第四十九回東北アンサンブルコンテスト	仙台銀行ホール イズミティ21
5 / 21・22	第三十七回宮城県管打楽器ソロコンテスト予選	仙台市立上杉山通小学校
6 / 5	第三十七回宮城県管打楽器ソロコンテスト	中新田バッハホール
7 / 29・8 / 1	第六十五回宮城県吹奏楽コンクール	マルホンまきあーとテラス
9 / 11	第四十一回全日本小学生バンドフェスティバル宮城県大会	カメイアリーナ仙台
9 / 11	第三十五回全日本マーチングコンテスト宮城県大会	カメイアリーナ仙台
12 / 25	第四十四回東北吹奏楽の日演奏会	トークネットホール仙台

令和四年は、新型コロナウイルス感染症の感染対策を講じ、できる限りコロナ禍以前の内容に戻しながら事業を進めてきた。各事業とも一定の制限は設けたものの有観客で開催でき、出演者は聴衆の前で演奏する喜びを改めて感じる事ができた。

令和五年は開催を見合わせていた「みやぎスーパースターバンド演奏会」と「六十二万石吹奏楽祭」を含めた全ての事業を開

催できるよう、より一層、加盟団体や各関係機関と協力して
いきたい。

今後の事業については「宮城県吹奏楽連盟ホームページ」
と「Facebook 宮城県吹奏楽連盟」などインターネット等で
も確認していただきたい。

(事務局長 菊地 憲昭)

宮城県合唱連盟

〒九八〇—〇〇〇—一 仙台市青葉区中江二—二四—五

(事務局 八巻輝子方)

〇九〇—二九五七—二九七五

理事長 水口 裕子

千八百名

宮城県内の中学校・高等学校・大学・職場・一般の合唱団

昭和二十四年五月

ハーモニー(全日本合唱連盟発行)(年四回発行)

開催月日 催 事 名

場 所

1 / 10

第二十三回男の合唱まつり in みやぎ
第一節(コンサート)

第二節(交流会)の開催は中止

2 / 27

日立システムズホール仙台
フォーマンスフェスティバル

PRAY FROM MIYAGI

(未来につなげるコンサート)

5 / 8

第七十四回宮城県合唱祭
講師・鈴木義孝 三野宮まさみ
多賀城市文化センター

7 / 30・31

宮城県合唱講習会
(正会員講習会を兼ねる)
若林区文化センター

講師・辻秀幸

8 / 28

内容・合唱団のための講座
第七十四回全日本合唱コン
クール宮城県大会
名取市文化会館

審査員・伊東恵司、北原幸男、
長谷川 冴子

12 / 17・18

第三十四回宮城県合唱アン
サンブルコンテスト
日立システムズホール仙台

審査員・吉川和夫、中村優子、
福永一博

開催にあたっては、「合唱活動における新型コロナウイルス
感染症拡大防止のガイドライン第三版(全日本合唱連盟/六
月七日策定)」、その後改訂された「合唱活動における新型コ
ロナウイルス感染症拡大防止のガイドライン第三・二版(全日本
合唱連盟/令和五年一月二十四日策定)」のに基づき運営
し、歌唱にあたってはマスクの着用を義務付けている。マス
クの着用等については、今後の新型コロナウイルス感染症の
状況に応じて判断していく予定である。

今後の行事等については、宮城県合唱連盟のホームページ
をご確認いただきたい。

(事務局長 八巻 輝子)

宮城県おかさん合唱連盟

- ⑧ 千九八一―八〇〇三 仙台市泉区南光台二―二―二七
(塩川裕子方)
- ⑨ 〇二二―二七―〇九五六 (塩川裕子方)
- ⑩ 副理事長 平川 敬子
- ⑪ 四百三十五名
- ⑫ 宮城県内の女声合唱団で当連盟に加入している会員
- ⑬ 昭和四十八年十月
- ⑭ 機関紙「うたごころ」(年二回発行)

開催月日 催事名 場所

- | | | |
|---------|------------------------|---------------------|
| 1 / 7 | 臨時指導者会議 顧問会議 | 仙台市市民活動
サポートセンター |
| 2 / 10 | 機関誌「うたごころ」九十一号発行 | |
| 2 / 15 | 総会及び第一回幹事会 | 太白区文化センター |
| 6 / 21 | 第二回幹事会 | 太白区文化センター |
| 7 / 18 | 第五十回記念宮城県
おかさん合唱祭 | 日立システムズホール仙台 |
| 10 / 10 | 合唱講習会 講師 なか
にしあかね先生 | 日立システムズホール仙台 |
| 11 / 22 | 第三回幹事会 | 太白区文化センター |
| 11 / 22 | 機関誌「うたごころ」九十二号発行 | |
| | 定例理事会(年九回) | 仙台市市民活動
サポートセンター |

令和四年は昨年に引き続きコロナ禍ではあったが、全行事感染防止対策を行った。七月には待望していた第五十回記念合唱祭を日立システムズホール仙台で開催することが出来た。練習が出来なくて脱会する団もあったが、ほとんどの団が参加し、四人の歴代理事長ゆかりの曲を参加団体で合唱した。十月には合唱講習会も開催し、県下より沢山の人数が集まった。昨年からは理事長不在のままだったが、副理事長を中心に理事全員が協力し活動した一年だった。

(事務局 塩川 裕子)

仙台三曲協会

- ⑧ 千九八二―〇〇二二 仙台市太白区長町南三一―一八一―一
(渡辺悦子方)
- ⑨ 〇二二―二四七―八五二八 (渡辺悦子方)
- ⑩ 会長 渡辺 悦子
- ⑪ 五百四十二名
- ⑫ 協会所属の各流派会員で教授資格の有する者並びに日本音楽を愛好する者
- ⑬ 昭和三十年十月
- ⑭ 仙台三曲協会三十年史(昭和62年9月発行)
- ⑮ 仙台三曲協会年史・続編一(平成3年11月発行)
- ⑯ 仙台三曲協会年史・続編二(平成8年11月発行)
- ⑰ 仙台三曲協会年史・続編三(平成13年11月発行)
- ⑱ 創立五十周年記念仙台三曲協会年史(平成18年11月発行)
- ⑲ 仙台三曲協会年史・続編五(平成24年11月発行)

開催日	催 事 名	場 所
1/3	心の復興支援コンサート	北浜コミュニティセンター
1/16	心の復興支援コンサート	南三陸町文化交流ホール
2/10	三曲鑑賞授業	仙台市立鹿野小学校
4/9	ティクツ	ピアノサロンフランド
5/14	平澤真吾リサイタル	松音寺
6/19	上原派真磨琴会等演奏会	塩竈遊ホール
7/24	山田流仙台会	幸町市民センター
9/3	第六回杜に吹く風	太白区文化センター
10/9	第三十五回都山流尺八演奏会	利府町文化交流センター「リフノス」
10/23	第六十四回仙台三曲協会演奏会	トークネットホール仙台
11/3	日本の調べ	日立システムズホール仙台
12/20	三曲鑑賞授業	仙台市立西中田小学校

宮城県能楽振興協会

⑦ 千九八一一八〇〇二 仙台市泉区南光台南三丁目二一―一九
 (鈴木敏彦方)

⑧ 〇二二―二五二―一四七〇 (鈴木敏彦方)

⑨ 会長 鈴木 敏彦

⑩ 九百七十名

⑪ 謡曲・仕舞・囃子・狂言の指導者及びその指導者に師事

している者

昭和四十九年六月

HPで公開中

HP <https://sendai-nogaku.org/>

開催日	催 事 名	場 所
6/17	登米中学校能体験事前講義	登米市立登米中学校
6/29	声の出し方、仕舞の所作など	登米市森舞台
7/30	登米中学校能体験	登米市森舞台
10/30	声の出し方、仕舞の所作など	登米市森舞台
11/13	喜多流能公演	登米市森舞台
	能「杜若」シテ 佐々木多門	能―BOX
	令和四年 囃子と仕舞の会	能―BOX
	居囃子一番、独調四番(小鼓、太鼓)、笛二番、仕舞十三番	能―BOX
	伝統芸能伝承会	登米市森舞台
	能「橋弁慶」	登米市森舞台

〇仙台市

一 仙台市能楽振興協会の事業

(二) 仙台市能楽振興協会の令和四年の事業は、新型コロナウイルス感染症防止のため、「囃子と仕舞の会」のみの開催となっていた。

(二) 二月二十日開催予定の「能―BOX開館十周年記念 謡と仕舞の会」は、素謡十番、連吟一番、独吟一番、仕舞五番で番組を作成しながら、直前になって、新型コロナウイルス

ウイルスの感染拡大により中止となっていた。折角の正常化気運が頓挫した状況であった。

二能―BOXゼミナール

仙台市能楽振興協会は、(公財)仙台市市民文化事業団が主催する「能―BOXゼミナール」に協力の立場で参画しているが、開催二年目となる令和四年は、「歴史から繙く日本の芸能」を総合テーマとして、五回にわたりゲストスピーカーの話を中心に、様々な切り口から能と日本文化を考えるべく開催されていた。

○白石市

一 活動予定の「碧水園能―喜多流―」及び「碧水園観世流能」は、新型コロナウイルス感染防止のため中止となっていた。

二 文化庁の支援事業を活用し、「子供たちのための 高砂を謡う会」が高砂を謡う会実行委員会により、全十一回の教室で、延人数八十九名の参加で開催されていた。

○登米市

一 例年実施している「登米狂言」及び「登米秋祭り薪能」は新型コロナウイルス感染防止のため中止となっていた。

二 コロナ禍ではあったが、月例会(月並会)を合計十回、公民館、森舞台を会場に開催し、更に、登米市の各施設で、能、狂言、謡の指導、鑑賞、公演を行っていた。

(会長 鈴木 敏彦)

宮城県洋舞団体連合会

所 千九八九―六一七 大崎市古川旭一丁目一三一〇

(佐東悦子方)

専 〇二二九―二二八四八一(佐東悦子方)

代 会長 佐東 悦子

総 七団体

格 宮城県内に在住し、洋舞活動をしている団体の主宰者及び指導者

創 昭和四十五年十一月

刊 洋舞公演十年の歩み(昭和五十五年四月発行)

洋舞公演二十年の歩み(平成三年三月発行)

洋舞公演三十年の歩み(平成十二年十月発行)

洋舞公演四十五年の歩み(平成二十八年三月発行)

開催日 催事 場 所

2 / 19

第十七回全国ダンスコンペティション
in 仙台(クラシック部門) (アンサンブル部門)
日立システムズホール
仙台シアターホール

2 / 20

第十七回全国ダンスコンペティション
in 仙台(モダンダンス部門)
日立システムズホール
仙台シアターホール
(副会長 千尋 洋子)

宮城県歌人協会

⑧ 千九八一—〇九二三 仙台市青葉区東勝山三丁目一五—二九

(岡本勝方)

⑨ 〇二二—三九三—六一八七 (岡本勝方)

⑩ 会長 岡本 勝

⑪ 団体加入 十五団体 (二百二十八名) 個人会員 十八名

⑫ 宮城県内の短歌結社等の団体に所属する者、又は宮城県

内に在住し活動する歌人

⑬ 昭和二十四年四月

⑭ 宮城県歌人協会年報 (年一回発行)

⑮ 第三十三回宮城県短歌賞作品集二〇二二 (年一回発行)

開催日	催事名	場所
6/10	第六十九回宮城県短歌大会	仙台文学館
10/9	第四十九回東北短歌大会	
	(誌上大会)	
11/27	第三十三回宮城県短歌賞 東京エレクトロンホール宮城 授賞式・歌人の集い	(会長 岡本 勝)

宮城県俳句協会

⑧ 千九八五—〇〇七二 塩竈市小松崎一一—一九

(渡辺誠一郎方)

⑨ 〇二二—三六七—一二六三 (渡辺誠一郎方)

⑩ 会長 高野 ムツオ

⑪ 二百八十三名

⑫ 宮城県在住者及び出身者で、本会の目的に賛同する者

⑬ 昭和二十九年六月

⑭ 宮城県俳句協会会報 (年三回発行)

開催日	催事名	場所
1/10	新春賀詞交歓会	
2/27	定時総会(令和四年度)(中止)	
4/29	第五十二回宮城県俳句大会	
11/14	応募句のみの選考実施	
	第六十八回松島芭蕉祭・全国大会	瑞巖寺・松島町文化交流会館

宮城県川柳連盟

⑧ 千九八〇—〇〇一一 仙台市青葉区上杉二丁目四—八

⑨ 朝日プラザ上杉六〇七

⑩ 〇二二—二二七—〇五七五

⑪ 理事長 雫石 隆子

⑫ 二百五十名

⑬ 加盟結社(吟社)二十三社の会員

⑭ 昭和四十八年九月

⑩ 宮城県川柳連盟会報（年一回発行）
宮城県川柳大会報（年一回発行）

開催日 催事名 場 所

4 / 16 第五十回宮城県川柳大会 東京エレクトロンホール宮城

（事務局長 堀之内 稔夫）

宮城県詩人会

⑨ 千九八〇—〇八〇五 仙台市青葉区大手町二二五—五〇三
（汐海治美方）

⑧ 〇二二—七二一—三二五八

⑦ 会長 佐々木 洋一

⑥ 三十六名

⑤ 宮城県在住または出身者及びそれに準ずる者で、詩作品
の実作者及び研究者

④ 平成十七年三月

③ 宮城県詩人会会報（年一回発行）

② アンソロジー『宮城の現代詩』（年一回発行）

宮城県詩人会は平成十七年に発足して以来、詩に関係する者の交流・切磋琢磨する場となってきた。コロナで二年間、カフェや詩祭など交流行事は中止となり、会報とアンソロジーのみの活動だったが、今年は二月十七日の「ポエトリールカフェ」を皮切りに、毎月一回のカフェを計画（今年は十二月まで毎月一回決定）実施する予定である。カフェ開催の場

所も地下鉄西公園駅から一分の「オフィス汐」になり、会員以外の方々にも開かれた場所として賑わうようになっていく。

（理事長 汐海 治美）

一般社団法人宮城県華道連盟

⑨ 千九八〇—〇〇一四 仙台市青葉区本町二丁目四—四十五

⑧ 西村方

⑦ 〇二二—二一一—〇八六〇（西村一観方）

⑥ 理事長 朴澤 一堂

⑤ 二百十九名

④ 池坊、小原流、古流松藤会、清泉古流、仙昇池坊、道風流、

③ 本原遠州流、龍生派 全八流派

② 華道教授者（諸流派師範）の資格を有し、門下を育成する者

① 昭和十二年三月

④ 会報「はないづみ」 年一回発行

開催月日 催事名

場 所

12 / 23

講演会（中止）

施設訪問

仙台市福祉プラザ

宮城県啓佑学園

新型コロナウイルス感染拡大に伴い厚生担当常務理事及び事務局長のみ訪問

〈主催いけばな展〉

2 / 5 ~ 8 第八十回春のいけばな展 せんだいメディアテーク

宮城県の春に華が舞う

〈加盟流派いけばな展〉

4 / 16 ~ 18 龍生派 宮城県支部いけばな展 せんだいメディアテーク

はれやかに

4 / 20 ~ 25 池坊 いけばなの根源池坊展 仙台三越

聖徳太子千四百年大遠忌記念

〔和と美〕

7 / 9 ~ 12 公益社団法人宮城県芸術協会 せんだいメディアテーク

第五十九回宮城県芸術祭 華道展

芸術協会所属十二流派が参加（うち連盟所属七流派）

11 / 1 ~ 6 小原流仙台支部 みんなの花展 東北電力グリーンプラザ

「みやぎの花と器」

4 / 19 ~ 20 古流松藤会宮城県支部 南三陸町スポーツ交流村

創立四十五周年・佐藤理依先 ベイサイドアリーナ文化

生いけばな褒賞杯受賞記念 ホール

二〇二二宮城県支部華展

感謝の思い・華によせて

いけばな・伝承の心とかたち

1月~12月 宮城県庁 挿花 宮城県庁ロビー 他

連盟所属の八流派が毎月

交代で担当

（事務局長 西村 一観）

宮城県民芸協会

（所） 千九八〇—〇八一— 仙台市青葉区一番町一丁目四—一〇

（光原社内）

（電） 〇二二—二二三—六六七四（光原社内）

（代） 会長 濱田 淑子

（数） 五十名

（御） 昭和四十三年一月

（刊） 「民芸みやぎ」（年一回発行）

開催日	催事名	場所
-----	-----	----

9 / 3	総会	COMPASS
-------	----	---------

（仙台協立第一ビル）

10 / 29	特別見学会	東北福祉大学芹沢銈介
---------	-------	------------

美術工芸館

11 / 26	伊達さんの茶会	福聚院
---------	---------	-----

（事務局長 及川 陽一郎）

公益財団法人日本民謡協会宮城県連合会

（所） 千九八二—一—一〇二 仙台市太白区袋原六丁目七—二七

（電） 〇二二—二四—八一七六

（代） 宮城県連合委員長 阿部 勝造

（数） 四百六十二名

（格） 公益財団法人日本民謡協会に入会していること

（御） 昭和二十五年六月二十四日

⑩ 公益財団法人日本民謡協会会報（年六回発行）

開催日 催事名 場所

8/21 公益財団法人日本民謡協会 前小庵（旧前川小学校）

民謡民舞宮城県大会

9/25 民謡民舞東北地区指導資格 ホテルニュー水戸屋

認定試験

（参与 小野 春城）

全国民謡連盟宮城県連合会

⑨ 千九八九―六一二二 大崎市古川桑針字谷地中一四

（及川政芳方）

⑧ 〇二二九―二三一一〇九〇（及川政芳方）

⑦ 会長 及川 政芳（桃城）

⑥ 二百五十名

⑤ 民謡の好きな方

④ 昭和五十三年十月

③ 会報本部作成（年一回発行）

（本部連合会常務取締役 及川 政芳（桃城））

宮城県民謡道連合会

② 千九八〇―〇〇〇二 仙台市青葉区福沢町一―四三

① 〇二二―二三―四四一一（事務局）

④ 会長 衣川 喜仁

② 二十五名

③ 民謡指導者・プロ伴奏者・プロ歌手・各会の会主
④ 昭和五十五年七月

開催日 催事名 場所

2/22 令和三年度定期総会 仙台市福沢市民センター

7/18 第三十七回さんさ時雨全国 仙台市福沢市民センター

大会実行委員会

（第三十七回さんさ時雨全国

大会開催について）

10/18 第三十七回さんさ時雨全国 仙台市福沢市民センター

大会全体会議

11/27 第三十七回さんさ時雨全国大会 大崎市岩出山公民館

（事務局長 二代目 藤本 和夫）

宮城県写真連盟

⑨ 千九八一―八〇〇三 仙台市泉区南光台七丁目二八―二

（高橋方）

⑧ 〇二二―二五―一六二四一（高橋方）

⑦ 会長 永井 優

⑥ 百十二名

⑤ 県写真展に参加し、会費を納入した方

④ 昭和五十四年四月

③ 会報（年一回）

開催日	催 事 名	場 所
4 / 9	役員会	まるまつ成田店
4 / 11	令和四年度「宮城県写真展」の打ち合わせ	南光台事務局
5 / 1	令和四年度宮城県写真連盟総会	まるまつ成田店
9 / 18	令和四年度宮城県写真展 公開審査	南光台コミュニケーションセンター
11 / 8	役員会	まるまつ成田店
11 / 21 ~ 27	令和四年度宮城県写真展 役員会	宮城県美術館 まるまつ成田店
R5 / 1 / 20	役員会	(事務局長 高橋 潤一)

宮城県文化財友の会

- ⑧ 〒九八四一〇〇四二 仙台市若林区大和町一丁目一六―二三
 (遠藤方)
 ⑨ 〇二二―二三九―一三二四 (遠藤方)
 ⑩ 会長 遠藤 哲雄
 ⑪ 五十一名
 ⑫ 文化財保護に関心を持ち、文化財に関する認識を深めようとする者
 ⑬ 昭和四十九年八月
 ⑭ 宮城県文化財友の会だより (年四回発行)

開催日	催 事 名	場 所
6 / 18	荒町界隈まち歩き	昌傳庵、佛眼寺、泰心院、満福寺
10 / 22	榴ヶ岡界隈歴史散歩	榴岡天満宮、釈迦堂碑、榴岡公園 (会長 遠藤 哲雄)

宮城県における 文化行政の概要

消費生活・文化課、長寿社会政策課、障害福祉課、生涯学習課、文化財課、宮城県図書館、宮城県美術館、東北歴史博物館、（公財）宮城県文化振興財団、（公財）慶長遣欧使節船協会における令和四年度の概要を掲載。（一月から三月までに実施したものは令和五年に行われた。）

一 知事部局関連

(二) 消費生活・文化課

1 表彰

令和四年文化の日（教育文化功労）表彰受賞者

○森 敏美 〓 美術家

○江田 恵一（江田 恵） 〓 金工作家

○宇佐美 明 〓 彫刻家

○太田 幸江（太田 蓮紅） 〓 書家

○山内 とも子 〓 平家琵琶奏者

○八巻 寿文 〓 美術家・照明家

○菊池 すみ子（花柳 尋葉奈） 〓 日本舞踊家

2 文化行政の基礎づくり

県民ロビーコンサートの開催

県庁舎を県民により開かれたものとし、文化の香り高い交流の場にするため、県民ロビーにおいてコンサートを開催した。

開催日	出演者
四月二十七日	仙台フィルハーモニー管弦楽団 （オーケストラによるクラシック演奏）
五月二十五日	CE（二本のフルートとピアノによる アンサンブル）
六月二十二日	林 竜也（ギターによる独奏）
七月二十七日	宮城県気仙沼高等学校マンドリン部 （生徒によるマンドリン演奏）
八月 十日	宮城大学管弦楽団&MYU杜の混声合唱団 （管弦楽団の伴奏による混声合唱）
八月二十四日	いろはカルテット（弦楽四重奏）
九月 十四日	宮城県警察音楽隊・カラーガード隊 （音楽隊の演奏とカラーガード隊のパ フォーマンス）
九月二十八日	マスターズ ヴォーカル アンサンブル （混声四部アンサンブル）
十月二十六日	宮城県大河原商業高等学校ギター部 （ギターアンサンブルによる演奏）
十一月 十六日	コットンシスターズ （箏・三味線・十七弦・ピアノによる演奏）
十一月二十四日	Lips （ヴァイオリンとピアノによるクラシック演奏）

十二月二十一日	宮城県石巻商業高等学校吹奏楽部・男声合唱団（男声合唱と打楽器演奏）
一月二十五日	Motera Piano Duo （ピアノ連弾によるクラシック演奏）
二月二十二日	女声合唱団 木声会（女声合唱）
三月二十二日	一般社団法人 仙台オペラ協会 （オペラコンサート）

3 文化創造の風土づくり

みやぎ文化芸術応援事業「みやぎアート・プロジェクト」

コロナ禍において、プロのアーティストやスタッフ等が制作した動画作品をWeb上に掲載・発信することにより、アーティスト等の活動を支援するとともに、在宅でも県民が文化芸術に触れられる機会を提供した。

募集期間 第一期 九月十四日～十一月十一日

第二期 十一月七日～令和五年一月十日

交付件数 第二期 六十件（二百十六人）

第二期 二十八件（百五人）

再開支援事業

コロナ禍における文化芸術活動の再開・継続を支援することを目的として、新型コロナウイルス感染拡大防止対策を適切に講じた上で開催する公演等を支援した。

交付件数 十一件

みやぎ県民文化創造の祭典二〇二二

みやぎらしい創造的な文化芸術圏の創出を目的として、平成九年度から開催。九月から十一月までを重点期間として、主催事業（十一事業）、共催事業（十三事業）及び協賛事業（二十五事業）を県内各地で開催した。

〈主催事業〉

①舞台ワークショップ

普段は演劇やダンスなどの舞台芸術に触れる機会の少ない方々に、体で表現する楽しみやコミュニケーションの大切さを実感しながら、舞台芸術に親しめるよう、県内の劇団で活躍するアーティストなどを講師とした少人数・体験型のワークショップを開催した。

○名取市教育委員会

・ダンスミュージカル講座（那智が丘）指導

講師 朝日陽子

期間 九月五日～十二月十九日

会場 名取市文化会館（名取市）

・ダンスミュージカル講座（名取が丘）指導

講師 朝日雅宏

期間 九月十九日～十二月十九日

会場 名取市文化会館（名取市）

○えずこ芸術のまち創造実行委員会

・楠原竜也とダンスであそぼ！

講師 楠原竜也

期間 八月三十一日～九月二日

会場 深谷小学校、大平小学校、白石第一小学校（白石市）、藤尾小学校（角田市）、柴田小学校（柴田町）

・ISOPPの完全燃焼!! ヒップホップダンス体験教室

講師 ISOPP

期間 九月十四日～十六日

会場 北郷小学校（角田市）、槻木小学校（柴田町）、

村田小学校（村田町）

○多賀城市文化センター指定管理者J M共同事業体

・WAKU☆WAKU☆舞台スタッフ体験二〇二二

講師 渡辺祥子、松崎太郎、梅内久仁生、藤野準

期間 十二月三日～令和五年一月二十九日

会場 多賀城市民会館・多賀城市中央公民館（多賀城市）

○公益財団法人仙台市市民文化事業団

・舞台スタッフ・ラボ二〇二二（冬講座）

講師 石井忍 ほか

期間 令和五年二月四日～十九日

会場 宮城野区文化センター（仙台市） ほか

○角田市教育委員会

・かくだ田園ホール新春寄席

講師 六花亭遊花、ニードル、鼓風☆響

期間 令和五年一月十五日

会場 かくだ田園ホール（角田市）

②美術ワークショップ

県内で活躍する芸術家を講師に、ワークショップ等の少人数・体験型講習会を開催し、参加者自身が作品を製作・表現することを通じて、文化芸術活動への関心を高め、新たな美術愛好者層の拡大を図った。

◆市町村との共催事業

○宮城県南郷高等学校

・漆の文化を学び作品を作ろう

講師 佐藤建夫

期間 九月十五日

会場 宮城県南郷高等学校（美里町）

○塩竈市杉村惇美術館

・第一回「ルオーの作品を模写してみよう」

第二回「杉村惇画伯の絵のマチエールに学ぼう」

講師 松山隼、早坂貞彦

期間 九月十七日、十一月二十六日

会場 塩竈市杉村惇美術館（塩竈市）

・こども探偵事務所「ステンドグラスを調査」

講師 武田奈未

期間 十二月十七日

会場 塩竈市杉村惇美術館（塩竈市）

○蔵王町

・加川広重アートプロジェクト vol.7 巨大絵画を描こう！

講師 加川広重

期間 十一月十三日

会場 蔵王町ふるさと文化会館（蔵王町）

○公益財団法人登米文化振興財団

・絵画ワークショップ～油彩編～

講師 亀井陽逸、亀井武宏

期間 令和五年一月七日～二十九日

会場 登米祝祭劇場（登米市）

○多賀城市文化センター指定管理者J・M共同事業体

・WAKU☆WAKU☆舞台スタッフ体験関連イベント

舞台背景幕を創ろう！美術ワークショップ

講師 尾崎森平

期間 令和五年一月十四日、十五日

会場 多賀城市中央公民館（多賀城市）

◆普及事業

【ビルド・フルーガス運営】

・DIYでリノベーションしよう

講師 川上謙

期間 九月十七日～十月三十日

会場 旧多田野呉服店（塩竈市）

・セザンヌ『りんごとオレンジ』の立体オブジェをつくろう

講師 川角由

期間 十月一日

会場 多賀城小学校放課後児童クラブ（多賀城市）

・墨あそび

講師 櫻井育子

期間 十一月十二日

会場 古民家ギャラリー「母家」（大崎市）

・ペーパークラフトで松島電車をつくろう

講師 山本泰士

期間 十一月二十日

会場 相澤商店（松島町）

・反射材シートでつくる防災バッグづくり

講師 すがわらじゅんいち

期間 十二月四日

会場 多賀城市民活動サポートセンター（多賀城市）

・世界の名画を立体オブジェで描こう

講師 川角由

期間 令和五年一月六日

会場 こーぷ放課後アフタースクール太子堂校(仙台市)

・墨あそび

講師 櫻井育子

期間 令和五年一月九日

会場 旧観慶丸商店(石巻市)

・インドネシアふるさと料理レシピ集づくり

講師 門脇篤

期間 令和五年一月十五日、二月二十日

会場 くるくる喫茶うつみ(気仙沼市)

・栗原の植物で染めよう〜桜編〜

講師 浅野友理子

期間 令和五年二月十九日

会場 みちのく伝創館(栗原市)

・宝物蝶標本を作ろう

講師 北上ちひろ

期間 令和五年二月二十六日

会場 宮城県本吉高等学校(気仙沼市)

・うつわで絵画をつくってみよう

講師 後藤有美

期間 令和五年三月十九日

会場 七ヶ浜町中央公民館(七ヶ浜町)

・Zine Machine 自己紹介冊子をつくろう

講師 Sat De Los Angeles

期間 令和五年三月二十一日

会場 ビルドスペース(塩竈市)

・箔を使って絵を描こう

講師 針生卓司

期間 令和五年三月二十五日

会場 菅勘資料館(登米市)

・仮面でへんしーん!

講師 しょうじこずえ

期間 令和五年三月二十五日

会場 プレパークわたのは(石巻市)

・こもれびをフロッタージュで描こう

講師 あるがあく

期間 令和五年三月二十七日

会場 大衡村ふるさと美術館(大衡村)

【エイブル・アート・ジャパン運営】

・第五回障害のある人と文化に芸術活動に関する大見本市「きいて、みて、しって、見本市。」ワークショップ

・小さな人形をつくって、舞台で即興劇をしてみよう!

講師 工藤夏海、本川東洋子、大沢佐智子、正木千尋、
しょうじこずえ、佐竹真紀子

期間 令和五年二月十一日

会場 せんだいメディアテーク（仙台市）

③音楽アウトリーチ

アーティストを講師に、生演奏を間近で体験できる少人数を対象としたアウトリーチを実施し、普段はなかなか触れることのできない楽器の面白さや音楽の魅力を伝え、音楽愛好者層の拡大を図った。

また、地域の公共ホール等で、講師による芸術性の高いコンサートを開催した。

◆市町村等との共同事業

○大和町文化振興協会

・宮沢賢治〈童話〉朗読音楽船「ゼロ弾きのゴージュ」

出演 佐藤三昭、熊谷裕史、高橋理沙

期間 十月三日～十一日

会場 鶴巣小学校、落合小学校、宮床小学校、吉田小学

校、小野小学校、吉岡小学校（大和町）

○えずこ芸術のまち創造実行委員会

・カラダに響く音楽のチカラ！オペラとピアノの世界

出演 村上敏明、中川賢一

期間 十月二十四日、二十五日

会場 富岡小学校（川崎町）、七ヶ宿中学校（七ヶ宿町）、
桜小学校（角田市）

・芸人声楽家による「カルメン」フルコース!!

出演 ミツチエルン・栗林、田村緑

期間 令和五年一月二十七日

会場 船岡小学校（柴田町）

○大郷町

・令和四年度音楽アウトリーチ事業

出演 浅野祥

期間 十一月二日

会場 大郷小学校（大郷町）

○七ヶ浜国際村事業協会

・令和四年度小学校芸術鑑賞事業「仲道郁代音楽アウトリーチ」

出演 仲道郁代、高見秀太郎

期間 十一月八日～十日

会場 松ヶ浜小学校、汐見小学校、亦楽小学校（七ヶ浜町）

○角田市

・光の回廊を巡る音の旅

出演 佐藤寿一おけすとら《ストリングス》宮城

期間 十二月十四日、令和五年二月十二日

会場 J Aみやぎ仙南角田地区事業本部東根支所跡地、
かくだ田園ホール（角田市）

○公益財団法人登米文化振興財団

・令和四年度訪問コンサート（音楽アウトリーチ）事業

出演 宮崎ゆかり、築田ちゆり

期間 令和五年二月十日、十五日

会場 佐沼中学校、米岡小学校、佐沼小学校（登米市）

○多賀城市文化センター指定管理者J M共同事業体

・文化センター×山響 アウトリーチin多賀城

出演 山形交響楽団

期間 令和五年二月二十一日、三月七日

会場 多賀城高等学校、すくっぴーひろば、多賀城文

化センター、多賀城市立図書館（多賀城市）

◆普及事業

【（公財）宮城県文化振興財団運営】

・出演 仙台チェンバーアンサンブル

期間 十一月二十四日

会場 第三小学校（塩竈市）

・出演 ムジカノヴァ

期間 十一月二十九日

会場 障害者日中活動支援施設のぎく（美里町）

・出演 Sendai Saxophone Quartet

期間 十二月二日

会場 古川西中学校（大崎市）

・出演 池田緋沙子、渡邊千晶

期間 十二月五日

会場 鳴瀬小学校（加美町）

・出演 トリオみゆう

期間 十二月七日

会場 宮崎小学校（加美町）

・出演 ドラムカフェジャパン

期間 十二月九日

会場 社会福祉法人みんなの輪わ・は・わ美里（美里町）

・出演 長谷川康、東歩美

期間 十二月十三日

会場 河北中学校（石巻市）

・出演 渡辺文江

期間 十二月十五日

会場 涌谷中学校（涌谷町）

・出演 ムズイカヴェルデ

期間 十二月二十日

会場 唐桑中学校（気仙沼市）

・出演 民族歌劇団ほうねん座

期間 令和五年一月六日

会場 多賀城市西部児童センター（多賀城市）

・出演 マリンピア

期間 令和五年一月十一日

会場 賀美石小学校（加美町）

・出演 阿部玲子、宮地夏海、八島珠子

期間 令和五年一月十二日

会場 一迫小学校（栗原市）

・出演 高見秀太郎、鈴木真衣、千葉展子

期間 令和五年一月十八日

会場 北浦小学校（美里町）

・出演 杜の響金管五重奏団

期間 令和五年一月二十三日

会場 寄磯小学校（石巻市）

・出演 大岩千華、伊部祥子

期間 令和五年三月二日

会場 東豊中学校（多賀城市）

④青少年育成総合事業

県内高校生の文化芸術に係る表現力を育み、強化するとともに、宮城県の文化芸術の振興・発展に寄与することを目的に、講習会等を開催し、参加者同士の交流を深め、表現力等の向上を図った。

共催 宮城県高等学校文化連盟

日時 七月～令和五年一月

場所 宮城県内各地

⑤地域文化発信支援事業（次世代育成支援事業）

次世代を担う子どもたちの豊かな感性を養うとともに地域の伝統文化を支援するため、地域の子どもたち等に対し伝統文化に触れる機会を充実させる活動を支援した。

実施主体 新田小学校佐沼鹿踊伝承会

⑥みやぎ発信劇場

県制百五十周年を記念し、文化芸術をとおして宮城県の魅力を再認識するきっかけとするとともに、県民に対し優れた文化芸術の鑑賞機会を提供するため、記念コンサートを開催した。

事業名 芸術銀河・県制百五十周年記念

「オペラGALAコンサート」

日時 令和五年二月十五日

場所 宮城野区文化センターパトナホール

共催 アートキャラバン宮城圏域ホール連携事業実行

委員会

⑦こどものための舞台芸術見本市

県内の子どもたちや、学校・保育所等の施設職員に対し、舞台芸術及びアウトリーチ活動の推進を図ることを目的に、オンラインを活用した舞台芸術アウトリーチを実施した。

実施主体 A R C T (アルクト)

日 時 令和五年三月

⑧舞台技術者等育成支援事業

劇場・音楽堂等で行われる公演等の発展に寄与するとともに、舞台技術者等が行う技術の向上や人材育成の取組を支援することを目的に、宮城舞台技術者協会が行う、人材育成及び普及啓発等に係る活動に対し支援を行った。

実施主体 宮城県舞台技術者協会

日 時 令和五年二月

4 文化活動の促進

(1) 令和四年度宮城県芸術選奨の顕彰

授賞式 十二月五日 宮城県行政庁舎十一階

第二会議室

(2) 文化芸術関係行事の後援、知事賞の贈呈等

後援行事 百十七件

知事賞交付 三十九件 七十七点

(3) 文化事業への助成

県内文化団体事業への補助（公財）仙台フィルハーモニー管弦楽団ほか

(4) 文化振興基金の造成

民間と行政が一体となって文化活動の助成を図るため、文化振興基金を設置し、昭和六十二年度から基金の造成を図っている。

(5) 宮城県芸術年鑑の発行

(二) 長寿社会政策課

第三十回宮城シニア美術展

高齢者の創作による作品（日本画・洋画・書・写真・工芸）の募集・展示を通して、高齢者の文化活動を促し、ふれあいと生きがいづくりを促進するとともに、第三十五回全国健康福祉祭えひめ大会（ねんりんピック愛媛のえひめ二〇二二）への宮城県代表作品として選考することを目的に開催した。

出品 二百十四点

期日 十二月一日～四日

会場 宮城県美術館 県民ギャラリー

主催 社会福祉法人宮城県社会福祉協議会

共催 宮城県・公益財団法人宮城県老人クラブ連合会

(二) 障害福祉課

1 とっておきの音楽祭

障害の有無に関わらず参加できる音楽祭が開催された。仙台市内でのステージ発表に加え、オンライン配信を行い、延べ百四十三団体が参加した。

開催日 六月五日

主催 NPO法人とっておきの音楽祭

2 表彰

- (1) 「第二十六回ビュア・ハーツアート展」(仙台市知的障害者芸術文化協会主催)の最優秀作品を「宮城県知事賞」として表彰を行った。(令和五年一月二十九日)

○小澤加奈(絵画)

- (2) 「第八回 Art to You! 東北障がい者芸術全国公募展」(公益社団法人東北障がい者芸術支援機構主催)の入賞作品のうち一点を「宮城県知事賞」として表彰を行った。(九月十一日)

○大滝真信(工芸)

3 障害者による芸術文化活動の支援

令和四年度宮城県障害者芸術文化活動支援事業

県内障害者の芸術文化活動の振興を図ることを目的に、宮城県障害者芸術文化活動支援センターを設置し、以下の事業

を実施した。

(1) 相談・支援

芸術活動を行う障害者本人や家族、支援者等からの相談に応じ、支援を行った。

- (2) 障害者芸術文化活動を支援する人材の育成支援

芸術文化活動の支援方法、著作権等の権利保護、障害特性への理解等に関する研修等をオンラインで行った。

① 八月三日

「暮らしの市夏出店してみた! マーケティング編」

② 九月七日

「暮らしの市秋出店してみよう! 商品提案編」

③ 十月十三日

「地域の企業と協働する! 作品の二次利用の際に気を付けるべき視点とは」

④ 十一月三十日

「鑑賞するって楽しい! せんくら・リラックス・コンサートができるまで」

(3) 展示会開催

第五回 障害のある人と芸術文化活動に関する大見本市「きいて、みて、しって、見本市。」

開催日 令和五年二月十日～十二日

会場 せんだいメディアアテック二階オーブンスクエア

二 教育委員会関連

(一) 生涯学習課

1 表彰

令和四年度地域文化功労者文部科学大臣表彰受賞者

○佐々木 勝典Ⅱ文化財…文化財保護(塩竈市)

○雫石 隆子Ⅱ芸術文化…川柳(仙台市)

○福岡の鹿踊剣舞保存会…文化財…文化財保護(仙台市)

2 文化芸術の振興

(1) 第五十九回宮城県芸術祭

(公社)宮城県芸術協会・宮城県・仙台市・宮城県教育委員会・仙台市教育委員会・河北新報社・(公財)宮城県文化振興財団・(公財)仙台市市民文化事業団の八者が共催

七月九日～三月二十六日(せんだいメディアアテーク他)

書道、工芸、絵画、写真、華道、彫刻等の展示及び音楽コンクールが行われた。

(詳細は「広域文化団体の文化活動記録―(公社)宮城県芸術協会」に掲載。)

(2) 宮城県高等学校文化連盟事業

▲は新型コロナウイルス感染拡大の影響などにより、

当初の予定を変更したことを表す。

① 第二十九回宮城県高等学校総合文化祭

テーマ「咲き誇れ 文化の花と創造力」

ア 総合開会式

○ 展示発表

六月二十五日～二十六日(栗原市若柳公民館)

○ 式典・ステージ発表

六月二十五日(栗原市若柳総合文化センター)

イ 部門別開催

○新聞〔第九回宮城県高等学校新聞コンクール〕六月二十五日～二十六日(栗原市若柳公民館)

○英語〔第七十五回宮城県高等学校英語弁論大会〕九月八日(常盤木学園高等学校)〔第六十九回宮城県高等学校英作文コンクール〕十月二十六日(仙台東高等学校、各地区会場)

○吹奏楽〔第七回みやぎ高校吹奏楽祭〕十月八日(名取市文化会館)

○演劇〔第六十回宮城県高等学校演劇コンクール地区大会・中央大会〕十月八日～二十三日、十一月十一日～十三日(えずこホール、県内各地区会場)

○囲碁〔第二十三回宮城県高等学校囲碁九路盤大会〕十月十四日(仙台第二高等学校)

- ダンス〔第三十回宮城県高等学校ダンスフェスティバル二〇二二〕十月十八日～十九日（電力ホール）
- 器楽・管弦楽〔第四十五回宮城県高等学校音楽祭〕十月二十六日（名取市文化会館）
- 日本音楽〔第三十一回宮城県高等学校文化連盟日本音楽定期演奏会〕十月二十七日（多賀城市文化センター）
- 小倉百人一首かるた〔第三十一回宮城県高等学校小倉百人一首競技かるた大会〕十月二十九日（宮城県武道館）
- 放送〔第四十一回宮城県高等学校放送コンテスト新人大会〕十月二十九日～十一月九日（日立システムズホール仙台他）
- 文芸〔第二十九回宮城県高総文祭文芸部門交流会・研修会〕十月三十一日（東京エレクトロンホール宮城）
- 将棋〔第三十九回宮城県高等学校将棋新人戦〕十一月三日（エスポールみやぎ）
- 自然科学〔第七十五回宮城県高等学校生徒理科研究発表会〕十一月四日（日立システムズホール仙台）
- 軽音楽〔第十九回宮城県高等学校対抗バンド合戦新人大会〕十一月五日（デジタルアーツ仙台）
- 合唱〔第六回みやぎ高校合唱祭〕十一月七日（日立

システムズホール仙台）

- 写真〔第二十九回宮城県高等学校写真展〕十一月九日～十三日（宮城県美術館県民ギャラリー）
 - 郷土芸能〔第九回宮城県高等学校郷土芸能大会〕十一月十日（名取市文化会館）
 - 工業〔第三十一回宮城県高等学校生徒活動成果発表会〕十一月十二日（工業高等学校）
 - 書道〔第七十一回宮城県高等学校書道展覧会〕十二月六日～十一日（宮城県美術館県民ギャラリー）
 - 弁論〔第九回宮城県高等学校弁論大会兼第四回吉野作造記念高校生弁論大会〕十二月九日（吉野作造記念館）
 - 商業〔プログラミング研修会〕十二月二十七日（東京ITプログラミング&会計専門学校仙台校）
 - 美術・工芸〔第七十五回宮城県高等学校美術展〕一月二十六日～二十九日（宮城県美術館県民ギャラリー）
- ② 第四十六回全国高等学校総合文化祭東京大会
七月三十一日～八月四日（東京都内十三区二市）
本県生徒二百十七名が総合開会式及び以下の部門に参加（合唱、吹奏楽、器楽・管弦楽、日本音楽、吟詠剣詩舞、郷土芸能、美術・工芸、書道、写真、放送、囲碁、将棋、

弁論、小倉百人一首かるた、新聞、文芸、自然科学、軽音楽)
③ 専門部事業

ア 演劇〔第三十一回宮城県高等学校演劇総合研修会〕

七月九日～十日（宮城野区文化センター）、〔第三十二回宮城県高等学校演劇リーダー研修会〕 七月十六日～十七日（宮城野区中央市民センター）

イ 合唱〔第七十四回宮城県合唱祭〕 五月八日（多賀城市文化センター）、〔令和四年度第一回発声講習会〕 ▲中止、〔合唱講習会〕 八月二日～四日（若林区文化センター）、〔第八十九回NHK全国学校音楽コンクール宮城県大会〕 八月二十一日（名取市文化会館）、〔第七十三回全日本合唱コンクール宮城県大会〕 八月二十八日（名取市文化会館）、〔令和四年度第二回発声講習会〕 ▲中止、〔第三十四回宮城県合唱アンサンブルコンテスト〕 十二月十七日（日立システムズホール仙台）、〔令和四年度バート別発声講習会〕 ▲中止

ウ 吹奏楽〔全日本吹奏楽コンクール第六十五回宮城県大会〕 七月二十九日（マルホンまきあーとテラス）、〔第十回高校生のための吹奏楽部運営講座〕 十一月六日（名取市文化会館）、〔第四十四回東北吹奏楽の日演奏会〕 十二月二十五日（トークネットホール仙台）、〔全日本アンサンブルコンテスト第五十六回宮城県大会〕 一月

十五日（トークネットホール仙台）

エ 器楽・管弦楽〔マンドリン部楽器別講習会〕 六月

二十六日（石巻好文館高等学校）、〔マンドリン部合奏講習会〕 十月十六日（石巻好文館高等学校）、〔ギター部合奏講習会〕 十二月四日（聖和学園高等学校）、〔管弦楽楽器別講習会〕 八月九日（尚絅学院中学高等学校）

オ 美術・工芸〔各地区美術展（仙南、仙台、泉・黒川、塩釜、大崎、登米・栗原、石巻、本吉）〕 仙台地区七月

七日～十日（宮城県美術館県民ギャラリー）

カ 放送〔春季校内放送研修会〕 五月十四日（仙台白百合学園高等学校）、〔第六十九回NHK杯全国高校放送コンテスト宮城県大会〕 六月十一日～十七日（多賀城市文化センター 他）、〔夏季校内放送研修会〕 八月九日（オンライン）、〔冬季校内放送研修会〕 一月二十八日（仙台第三高等学校）

キ 囲碁〔第四十六回文部科学大臣杯全国高校囲碁選手権大会宮城県大会〕 六月二十五日～二十七日（仙台第二高等学校、宮城第一高等学校）、〔第四十四回宮城県高校囲碁新人大会〕 一月二十八日（東京エレクトロンホール宮城）

ク 将棋〔第五十八回全国高等学校将棋選手権宮城県予選大会〕 五月十六日・十七日（エスポールみやぎ）、〔第

二十三回東北地区高等学校将棋新人大会」十二月十七日（スポールみやぎ）

ケ 自然科学（第一回生徒研修会）七月十日（若林区文化センター）、〔第二回生徒研修会兼全国高総文祭最終選考会〕十二月二十六日（震災復興記念館）

コ 写真（写真撮影大会（令和三年度延期分））五月十五日（多賀城市文化センター）、〔第三十回若草杯〕五月二十一日～二十二日（多賀城市文化センター）、〔第十九回夏季写真撮影大会〕八月八日～十日（震災復興記念館、トークネットホール仙台）、〔第九回冬季写真大会〕一月二十一日、三月十九日（オンライン）

サ 小倉百人一首かるた（第四十六回全国高総文祭小倉百人一首かるた部門宮城県予選）五月二十四日（宮城県武道館）、〔第四十四回全国高等学校小倉百人一首かるた選手権大会宮城県予選〕六月九日（宮城県武道館）、〔第十五回東北・北海道高等学校小倉百人一首かるた選手権大会〕七月八日（宮城県武道館）

シ 日本音楽（令和四年日本音楽研修会）十月二十七日（多賀城市文化センター）

ス ダンス（第三十四回全日本高校・大学ダンスフェスティバル）八月十日～十三日（神戸文化ホール）、〔ダンス技術リーダー講習会〕十二月十七日（宮城第一高

等学校）

セ 軽音楽（第二十八回宮城県高等学校対抗バンド合戦）七月十七日（デジタルアーツ仙台）、〔第七回ハイスクルプレミアムライブ二〇二二〕八月五日（仙台PIT）、〔第八回宮城県高等学校対抗バンド合戦一年生大会〕十二月十七日（デジタルアーツ仙台）

ソ 文芸（文芸部新人研修会）一月二十八日（震災復興記念館、オンライン）、〔第十九回高校生文芸作品コンクール〕八月二十五日必着

タ 新聞（前期研修会）七月九日（工業高等学校）、〔後期研修会〕十月八日・二十二日（石巻震災遺構門脇小学校、石巻南浜津波復興祈念公園、石巻高等学校）

チ 吟詠剣詩舞（強化練習会）五月二十五日、六月一日・六日・八日・二十二日、七月九日・三十日、九月二十八日、十月五日・十二日（古川黎明高等学校）

④ 支部事業

ア 仙台北・仙台南（合同）〔第三十二回仙台支部総合文化祭「ふれんどりいとく」〕十月十八日（宮城野区文化センター）、〔広報誌『にしき木』第三十一号発行〕

二月十日

イ 仙南〔第二十八回仙南支部高等学校総合文化祭〕十月八日～二十二日（岩沼市民会館、仙南芸術文化セン

タ1、白石市中央公民館）、〔専門部研修会〕八月十日
～十月二十一日（名取高等学校、白石市中央公民館、
岩沼市民会館）▲郷土芸能は中止

ウ 大崎（第五十回古川管内高校演劇祭）▲中止、〔令
和四年度古川管内高等学校美術クラブ連合展〕▲中止、
〔第三十回大崎支部総合文化祭〕十月九日（美里町文化
会館、美里町中央コミュニティセンター、美里町近代
文学館）、〔令和四年度アンサンブルコンテスト大崎地
区大会〕十二月十七日（大崎市岩出山文化会館）、〔第
十七回大崎吹奏楽祭〕二月五日（美里町文化会館）

エ 東部（第四回東部地区高等学校美術展）七月二十二
日～二十四日（松島町文化観光交流館）、〔第五回東部
支部総合文化祭〕十月二十二日～十一月三日（松島町
文化観光交流館）▲合同開会式は中止

オ 栗原・登米〔第二十九回栗原・登米支部総合文化祭〕
六月二十五日～二十六日（栗原市若柳総合文化セン
ター、若柳公民館）

カ 本吉〔第十七回本吉支部総合文化祭〕七月二日～三
日（気仙沼市はまなすホール、本吉公民館）、〔第六十
回気仙沼・本吉地区高等学校美術展「けせもい展」〕九
月七日～十一日（リアス・アーク美術館）、〔本吉支部
写真展示会〕▲中止（代替として各校が「イオン気仙

沼店高校生アート作品展」に出品）、〔第三十回気仙沼・
本吉地区生徒科学研究発表会〕十二月二十七日（オン
ライン）

⑤ 定通部事業

〔第五十回宮城県高等学校定時制通信制生徒の集い〕
九月三日（大河原商業高等学校）、〔第七十回全国高等
学校定時制通信制生徒生活体験発表宮城県大会〕十月
十五日（石巻河北総合センター）
その他

⑥

〔機関紙「高文連ニュース第三十二号」発行〕十月三
日、〔宮城県高等学校文化連盟PR事業〕十月十一日～
二十一日（県庁一階ロビー・二階回廊）、〔令和四年度
宮城県高等学校文化連盟賞表彰式〕二月九日（ホテル
白萩）、〔年間集録「みやぎ高文連年報三十一号」刊行〕
三月十五日

(3) 文化庁事業

① 文化芸術による子供育成総合事業（巡回公演事業）

六月二十七日	気仙沼市立九条小学校	演芸
六月二十八日	柴田町立西住小学校	演芸
六月二十八日	白石市立大平小学校	歌舞伎・能楽会
七月 五日	名取市立高館小学校	児童劇

七月	七日	岩沼市立岩沼南小学校	バレエ
七月	十三日	角田市立横倉小学校	オーケストラ等
七月	十四日	加美町立賀美石小学校	オーケストラ等
七月	十五日	村田町立村田第二中学校	オーケストラ等
九月	六日	登米市立石越中学校	歌舞伎・能楽
十月	十四日	大崎市立下伊場野小学校合唱	
十月	二十日	古川学園中学校	邦楽
十月	二十四日	大崎市立鳴子小学校	児童劇
十月	二十一日	富谷市立日吉台中学校	邦楽
十月	二十四日	塩竈市立第二中学校	東京混声合唱団
十月	二十五日	登米市立東郷小学校	東京混声合唱団
十月	二十五日	宮城県立聴覚支援学校	辞退 児童劇
十月	二十六日	登米市立南方小学校	児童劇
十月	二十八日	大崎市立古川北小学校	児童劇
十一月	四日	気仙沼市立面瀬中学校	演劇
十一月	九日	美里町立南郷小学校	演劇
十一月	十日	登米市立佐沼小学校	演劇
十一月	十四日	石巻市立貞山小学校	ミュージカル
十一月	十五日	石巻市立広瀬小学校	ミュージカル
十一月	十六日	名取市立那智が丘小学校	ミュージカル
十一月	二十二日	気仙沼市立新月中学校	ミュージカル

② 文化芸術による子供育成推進事業（芸術家の派遣事業）

六月	七日・七月十二日・九月二十七日	大崎市立敷玉小学校	伝統芸能
六月二十九日～七月一日		多賀城市立多賀城小学校	舞踊
七月	十一日	塩竈市立第一中学校	音楽
七月	十四日	気仙沼市立面瀬中学校	伝統芸能
七月	十四日	宮城県田尻さくら高等学校	大衆芸能
七月二十五～二十七日	中止		
七月十五日・九月十四日・十一月九日		宮城県東松島高等学校	演劇
		宮城県立支援学校小牛田高等学園	
八月二十五日		宮城県柴田農林高等学校川崎校	音楽
八月二十六日		宮城県南郷高等学校	音楽
九月二十八日		多賀城市立高崎中学校	音楽
九月二十八～三十日		多賀城市立山王小学校	舞踊
十月	六日	宮城県田尻さくら高等学校	音楽
十月二十六～二十八日		塩竈市立月見ヶ丘小学校	舞踊
十月二十六～二十七日			

気仙沼市立津谷小学校 音楽

十月二十七～二十九日

西山学院高等学校 音楽

十月三十一～十一月二日

塩竈市立第一小学校 舞踊

十一月 二日 多賀城市立城南小学校 音楽

十一月二十八～三十日

多賀城市立多賀城八幡小学校 舞踊

十二月二～十六日

塩竈市立玉川中学校 美術

十二月十四～十六日

多賀城市立東豊中学校 舞踊

③ 文化芸術による子供育成推進事業（ユニバーサル公演事業）

十一月二十八日 白石市立大鷹沢小学校 音楽

一月 十七日 大崎市立古川西中学校 音楽

④ 文化芸術による子供育成推進事業（芸術家の派遣事業）

〔東日本大震災復興支援対応〕

「次代を担う子どもの文化芸術体験事業」みやぎ実行委員会が委託を受けて、県内百二十五会場に講師を派遣して

事業を実施

(4) 宮城県巡回小劇場

① 音楽…宮城県教育委員会、開催市町村教育委員会、（公財）日本青少年文化センターと共催

五月三十一日・十月十七日～十月二十一日 十一会場

『ハンガリーの風』コンサート

（古館由佳子／土山如之／エミイ・轟・シュワルツ）

鑑賞者数 千七百九十八人

新型コロナウイルス感染症の影響で一公演中止

② 演劇…宮城県教育委員会、開催市町村教育委員会、（公

社）日本児童演劇協会との共催

九月七日～九月十七日（県内六会場）

プログラム

『給食番長』（小学生用）劇団 仲間

『スクラップ』（小学生用）劇団 笑う猫

鑑賞者数 九百三十七人

(5) 青少年劇場小公演

開催市町村教育委員会、（公財）日本青少年文化センターの共催により、地域の児童生徒に優れた生の芸術を鑑賞する機会を提供した。

五月三十日～十月二十一日（三十七公演）

『ひとりオペラ「ベロ出しチョンマ」…境信博、山田

明美

『話の伝統芸能落語 .. 柳家禽太夫』

『サクソフォンとピアノのコンサート』中村均一、西

上和子』

鑑賞者数 三千二人

(6) 宮城県地方音楽会：開催市町村教育委員会と共催

① アンサンブル公演

令和四年九月三日

南三陸町総合体育館ベイ
サイドアリーナ

令和四年十一月五日

蔵王町ふるさと文化会館
ございんホール

② オーケストラ公演

令和五年二月十一日

令和五年二月十二日

七ヶ浜国際村
気仙沼市民会館
鑑賞者数 千二百二十七人

(7) 優秀映画鑑賞推進事業：文化庁、国立映画アーカイブ、

開催町と共催

八月十一日 加美町中新田文化会館中新田パッハ

ホール

(8) 国民文化祭派遣事業：和歌山県・宮崎県

(9) 地方青年文化祭

県内青年の文化活動の促進、青年相互の交流、地域文化の振興を目指すもの。(令和四年十一月～令和五年二月、各教育事務所毎、県内七地区)

(10) 第七十回記念宮城県青年文化祭

令和四年六月十二日 (会場：角田市市民センター
かくだ田園ホール)

合唱二、舞台発表二、以上四団体二十三名と、生活文化展一、写真展八、以上九団体九名、合計十三団体三十二名の参加数と出場者数であった。来場数は総勢で七十三名であった。合唱、舞台発表、写真のみ最優秀と優秀賞を授与した。

(11) 第七十四回宮城県体育大会

令和四年八月二十八日

(会場：東松島市体育館、東松島市矢本運動公園)
バスケットボール 六チーム参加
※優勝、準優勝のみ全国大会出場
野球 三チーム参加

※雨天中止 抽選で二チーム全国大会出場

(12) 第七十回記念全国青年大会

令和四年十一月十一日から十一月十四日

(会場…東京体育館ほか)

バスケットボール二チーム、野球一チーム（一チームは辞退）、写真展二名、合わせて三十五名の出場参加数であった。

バスケットボールはベスト8と初戦敗退、野球も初戦敗退という結果であった。写真の部で優秀賞、佳作を受賞した。

(二) 宮城県図書館

情報拠点としての図書館の機能を強化し、県民のより充実した生涯学習を支援するため、各種の展示や講座、子どもの本の移動展示会等多様な活動を展開している。

1 展示

(1) 常設展

「本と人の文化史―アジア・日本を中心に―」

(2) 企画展

- ① 「東日本大震災文庫展Ⅻ『震災伝承…つたえつづけてゆく記憶』」

令和四年三月五日～五月二十九日

② 「県政百五十周年記念図書館資料にみるみやぎの黎明」

令和四年六月四日～八月二十八日

- ③ 「みやぎのスポーツ―マイナビ仙台レディース誕生までの歩み―」

令和四年九月三日～十一月二十日

- ④ 「公文書館展『あの日あのとときの宮城』」宮城県公文書館による展示

令和四年十一月二十六日～令和五年二月二十六日

- ⑤ 「東日本大震災文庫展Ⅼ『図書館復興のあゆみ』」

令和五年三月四日～五月二十八日

(3) 特別展

「勤政庁絵図―みやぎの夜明け前―」

令和四年六月四日～八月二十八日

(4) 子どもの本展示会

令和四年四月二十二日～五月十一日

入場 千四百九十五名

子どもの本移動展示会

・県内市町村図書館・公民館 二十一会場

入場 六千百七十人

・県内小中学校・特別支援学校 三十六会場

入場 六千五百五十人

(5) 一般図書・児童視聴覚・資料情報・震災文庫各フロア

での季節・催事等に関する資料展示

令和四年四月～令和五年三月

開催回数 百三回

(6) 情報エントランス(外部機関・団体によるパネル等展示)

令和四年四月～令和五年三月

開催回数 二十一機関・団体 二十三回

2 講座・講演会等

(1) みやぎ県民大学専門施設開放講座

動画配信による開催

令和四年十二月一日～令和五年三月四日

「図書館と教育・生涯学習―図書館を活用して生涯学ぶ―」

① 「学校教育と公共図書館」

講師 宮城県図書館 竹内 透史

② 「公共図書館等を最大限に活用する」

講師 宮城県図書館 天野 洋介

③ 「図書館でのおはなし会」

講師 宮城県図書館 高階 俊・阿部 柚奈

④ 「生涯学習を支援する公共図書館」

講師 宮城県図書館 山本 優衣

3 各種上映会(DVD・16ミリ)

(1) 上映回数十三回

上映会

五月～三月の月一回(一月及び二月を除く)

(2) こども映画会

① 令和五年七月十六日

② 令和五年三月四日

(3) 懐かしの16ミリ映画フィルム上映会

① 令和四年六月四日

② 令和四年十月八日

4 おはなし会

令和三年十月～令和四年三月

第三木曜日、第一～第四金曜日、毎週土曜日・日曜日

実施

実施団体 四団体

5 親子新聞スクラップ道場

令和四年七月二日

参加組数 二組 五名

6 複製資料貸出

県内高等学校、市町村図書館他二十一会場 三十一人

(三) 宮城県美術館

様々な美術文化活動に積極的に参加できる多角的機能を備えた場、また、美術と関わりの深い表現領域にも接することのできる施設として、展覧会（常設展・特別展）や、多くの講演会・各種の講座等多様な鑑賞・創作普及活動を積極的に展開している。

※は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、計画変更となったもの。

1 常設展

本館では、所蔵作品による展示を三ヶ月単位で入れ替え、特色ある展示を行い、収蔵作品等を用いて特集展示を開催し

た。また、毎月、美術館学芸員がギャラリー・トークを行った。

佐藤忠良記念館では、佐藤忠良の彫刻・素描や他の作家の絵本原画などを三ヶ月単位で入れ替え、テーマ展示を行った。

(1) 特集「近代イタリアのポスター」

六月二十五日～十月二日

(2) 特集「ドレスデン発の前衛―「ブリュッケ」の画家たち

十月五日～十二月二十五日

(3) 特集「いろいろな雪模様」

一月三十一日～四月十六日

2 特別展

(1) 「特別展「ボンベイ」」

七月十六日～九月二十五日

鑑賞者数 六万五千三百六十人

講演会 七月十六日

展示解説 七月三十日、九月十七日

(2) 「ドレスデン国立古典絵画館所蔵 フェルメールと

十七世紀オランダ絵画展」

十月八日～十一月二十七日

鑑賞者数 六万九千二百六十三人

展示解説 十月十五日、十月二十九日

十一月十二日

(3) 「生涯一〇年 傑作誕生・佐藤忠良」

二月四日～三月二十六日

鑑賞者数 四千六百六十六人

講演会 三月二十五日

展示解説 二月二十五日、三月十一日、三月十四日

(キャンペーン対象)、十六日(キャンペーン対象)

3 教育普及活動

自由に創作活動を楽しめるオープンアトリエ、各種教育プログラム、一般や高校生を対象にした実技と鑑賞の講座等、多彩な教育普及活動を実施した。

(1) 通常活動

① 美術なんでも相談

開館中随時

② オープンアトリエ

開館中随時

③ 造形遊戯室

休止

④ 教育プログラム

ア 概要説明「宮城県美術館の概要説明」

随時、団体の要望に応じて実施

イ 展示解説「学校団体等対象の常設展、特別展展示解説」

随時、団体の要望に対して実施

ウ 美術館探検「概ね十歳未満の来館者を対象に、美術館施設を活用した丁寧に見る活動」

エ 美術探検「概ね十歳以上の来館者を対象に、常設展を活用した対話型の鑑賞活動」

オ ワークショップ「学校団体等を対象に、創作室等での表現活動や要望に応じた活動」

カ 建物見学「美術館の機能や役割を中心とした建物の見学」

キ 自主活動「学校団体等による自主的な鑑賞や表現活動」

随時、団体の要望に応じて実施

随時、団体の要望に応じて実施

随時、団体の要望に応じて実施

随時、団体の要望に応じて実施

(2) 特別活動

① 公開講座

ア 実技ワークショップ

○「まざる色、となりあう色」

七月十七日、十八日

○「発想を生み出す実験（行為から）」

九月八日、十一日

○「発想を生み出す実験（事物から）」

九月二十二日、二十五日

○「展示を考える／場所をみつける」

十月二日

○「刷る・切る・綴る」

十二月十七日、十八日

○「工芸―かたち―彫刻」

二月十八日、十九日

○「はじめての彫刻」

三月十八日、十九日

○中学生・高校生ワークショップ

「作品をみる」

八月七日

「粘土にふれる」

八月七日

「作品をみる」

八月十一日

「版にふれる」

八月十一日

○高校生ワークショップ

「地層を見る／風景の内側を描く」

十一月十二日、十三日

イ
どようびキッズ・プログラム
毎月第一土曜日

○七月二日 特別企画

「かたちとあそぶ―まちをひろげる―」

○八月六日 「土とあそぶ日」

○九月三日 「水とあそぶ日①」

○十月一日 「水とあそぶ日②」

○十一月五日 「木とあそぶ日」

○十二月三日 「紙とあそぶ日」

○二月四日 「色とあそぶ日」

○三月四日 「光とあそぶ日」

②
美術講座

ア まちなか美術講座

会場 東北工業大学 一番町ロビー

講師 美術館学芸員

五月二十一日、八月二十日、十一月十九日、令和五

年二月十一日

イ みやぎ県民大学（美術館担当分）

講師 美術館学芸員

○「オリジナリティを考える」

九月四日、二十五日、十月十六日、十一月六日

ウ 美術館講座「画家に潜み 掘り下げた先の世界へ」

○第一回 十月二十二日

講師 酒井香織（バチカン博物館公認ガイド、美術史研究家）

○第二回 十一月二十六日

講師 田所泰（実践女子大学香雪記念資料館学芸員）

○第三回 十二月十日

講師 和田浩一（美術館研究員）

③ 学校との連携

ア アウトリーチ

七月五日 富谷市立成田中学校

二月十八日 県立拓桃支援学校

イ 中学生招待事業

※中止

ウ 東北大学病院院内学級招待事業

※中止

エ 美術館を活用した鑑賞教育研修会

※中止

④ ハイビジョンギャラリー

上映日 毎週土曜日、日曜日、祝日

上映内容

令和四年

○七月「ルーブル美術館Ⅰ」

「オルセー美術館Ⅰ（前編）」

○八月「日本絵画の聖と俗」

「オルセー美術館Ⅰ（後編）」

○九月「近代絵画の断面」

「絵巻の世界 その一（前編）」

○十月「人物画の名品」

「絵巻の世界 その一（後編）」

○十一月「パリで見られる十九世紀フランス美術Ⅱ」

「日本絵画の見方」

○十二月「セーヌ河美術紀行」

令和五年

○二月「オルセー美術館Ⅱ」

「絵巻の世界 その二（前編）」

○三月「十九世紀の絵画運動」

「絵巻の世界 その二（前編）」

⑤ 公演会

「暁鐘」 九月十一日

(3) 特別展

① 関連事業

ア 講演会「ポンペイの美術と住人たち」

七月十六日

講師 芳賀京子（東京大学教授）

イ 講演会「佐藤忠良 等身大の彫刻」

三月二十五日

講師 水沢 勉（神奈川県立近代美術館長）

② 展示解説

ア 特別展「ボンペイ」

七月三十日、九月十七日

イ ドレスデン国立古典絵画館所蔵 フェルメールと

十七世紀オランダ絵画展

十月十五日、十月二十九日、十一月十二日

ウ 生誕一〇年 傑作誕生・佐藤忠良

二月二十五日、三月十一日、三月十四日（キャン

パスメンバーズ対象）、十六日（キャンパスメン

バーズ対象）

(4) コレクション展示ギャラリー・トーク

① ギャラリー・トーク

ア 特集 近代イタリアのポスター

七月十日

イ 学芸員のおすすめ

七月二十四日

ウ 学芸員のおすすめ

八月十四日

エ 特集…近代イタリアのポスター

八月二十八日

オ 特集…ドレスデン発の前衛―「ブリュッケ」の画

家たち

十月九日

カ 小関きみ子と武村耕靄

十月二十三日

キ 学芸員のおすすめ

十一月十三日

ク 特集…ドレスデン発の前衛―「ブリュッケ」の画

家たち

十一月二十七日

ケ 日本の近現代美術

十二月十一日

コ クレーとカンディンスキー

十二月二十五日

サ 特集…いろいろ雪模様

令和五年二月十二日

シ 東北の写真

令和五年二月二十六日

ス ポアソニエール

令和五年三月十二日

セ 特集…いろいろ雪模様

令和五年三月二十六日

② 絵本原画のギャラリー・トーク

ア 長新太「ころころにゃーん」「にらめっこしましょ」

「ああおどろいた」

八月十一日、九月八日

イ 三芳悌吉「もりのむしたち」「もりのむしとのほらのむし」「村のお医者さん」

十月十三日、十一月十日

ウ 山本忠敬「ピー、うみへいく」「パトカーばとくん」

「のりもののはじまり、はじまり」

二月九日、三月九日

4 県民ギャラリーの運営

県民の創作活動の発表及び鑑賞の場を提供するため、県民ギャラリーを運営した。

5 美術に関する調査研究

美術館の事業を充実するため、その基礎となる調査研究を行った。

6 美術作品の収集、保存

優れた美術作品や資料の散逸、損傷、亡失を防ぎ、これら

の作品等を後世に伝えるため、正確な基礎調査に基づいて、美術作品・資料の収集、保存を行った。

7 広報

「二〇二二年度の催し」「美術館ニュース」「宮城県美術館マップ&ガイド」「小中学生向けグループ学習用ガイド」等の広報資料や展覧会ごとにポスター・チラシ等を制作し、配布した。

また、美術館ホームページや共催メディア等の広報媒体を広く活用するとともに、ツイッターを利用し、広報活動の積極的な推進に努めた。

8 刊行物の出版

「美術館年報／研究報告」を発行し、美術館活動の成果を公表した。

(四) 文化財課

表彰関係

令和四年度地域文化功労者文部科学大臣表彰受賞者

○福岡の鹿踊剣舞保存会（仙台市）

○佐々木 勝典（塩竈市）

(五) 東北歴史博物館

1 特別展

(1) 「知の大冒険―東洋文庫名品の煌めき―」

期日 四月二十三日～六月二十六日

・ 関連行事

① 講演会

「知の大冒険の水先案内―東洋文庫とその至宝―」

開催日 四月二十四日

講師 岡崎 礼奈（東洋文庫学芸課長）

「明治期の東北地方におけるカトリック再布教の試み」

開催日 五月二十九日

講師 牧野 元紀（東洋文庫文庫長特別補佐、昭和

女子大学准教授）

② ワークショップ

「みんなでつくろう！トンバ文字スタンプ！」

開催日 四月二十九日・三十日

五月三日・四日・五日・七日

③ 展示ナビ

開催日 毎週日曜日

解説者 東北歴史博物館職員

(2) 「欲望の昭和～戦後日本と若者たち～」

期日 七月十六日～九月十一日

・ 関連行事

① 展示解説

開催日 毎週日曜日

解説者 東北歴史博物館職員

(3) 「みちのくのサムライたち 東北武士の系譜」

期日 十月一日～二十七日

・ 関連行事

① 刀剣ワークショップ

開催日 十月十六日・十一月六日

② 展示解説

開催日 毎週日曜日

解説者 東北歴史博物館職員

(4) 「キングダム展―信―」

期日 令和五年一月十四日～三月十二日

・ 関連行事

① 山の民サタデー

会期中の毎週土曜日。有料チケットの特典として山の民のお面をプレゼントと、写真スポットを設置。

2 パネル展

(1) 「令和三年度宮城の発掘調査」

期日 五月二十四日～七月十日

主催 宮城県教育庁文化財課

共催 東北歴史博物館

(2) 「海図で見る～東北の港の今と昔～」

期日 九月六日～十九日

主催 第二管区海上保安本部 共催 東北歴史博物館

3 館長講座「東北グローバル考古学 Part2 ―原始・古代の

ロマンと科学―」

第一回 「世界遺産と縄文みやぎ」

期日 四月二十三日

第二回 「北京原人と『日本人』の謎」

期日 五月二十八日

第三回 「農耕をしないという選択」

期日 六月二十五日

第四回 「ヴィーナス像から土偶まで」

期日 七月二十三日

第五回 「石器の使い方と科学する」

期日 八月二十七日

第六回 「現代人的行動の起源」

4 博物館講座

(1) 古文書講座

入門編

期日 七月二十四日・三十一日・八月七日

中級編

期日 十月三十日・十一月二十日・一月十五日・二月

十九日

講師 東北歴史博物館職員（入門編・中級編いずれも）

(2) 史料講読講座

第一回 「多賀城創建の頃」

期日 五月十五日

第二回 「陸奥国における積極的な政治展開」

期日 六月十九日

第三回 「奈良時代末の陸奥国の混乱」

期日 七月十七日

講師 東北歴史博物館職員

(3) 民俗講座

第一回 「託宣―若宮八幡神社の湯花行事―」

期日 八月二十八日

第二回 「ハヤマ信仰―船形山神社の梵天ばやい―」

講師 東北歴史博物館職員（第一・二回いずれも）

(4) 考古学講座

第一回 「縄文土器と弥生土器」

期日 令和五年三月五日

第二回 「土師器と須恵器」

期日 令和五年三月十二日

(5) れきはく講座

第一回 「『宗教者になる』ということ―武州御嶽山の御

師と太々神楽―」

期日 令和五年一月二十八日

第二回 「民家の楽しみかた―大崎市松山の事例とともに―」

期日

令和五年二月四日

第三回 「みやぎの復興と発掘調査」

期日 令和五年二月十八日

第四回 「東北地方の古墳づくり」

期日 令和五年二月二十五日

第五回 「東北先史社会の石の利用」

期日 令和五年三月四日

第六回 「考古学からみた津波災害の課題と展望」

期日 令和五年三月十一日

第七回 「縄文時代のマグロ漁」

期日 令和五年三月十八日

講師 東北歴史博物館職員（第一―第七回いずれも）

5 体験教室

(1) 夏の体験教室

第一回 「木簡を使ってみよう!」

期日 七月三十日

第二回 「昔ながらの七夕かざりを作ろう!」

期日 八月六日

第三回 「貝の名前を調べてみよう!」

期日 八月十三日

第四回 「石包丁を作ろう!」

期日 八月二十日

(2) 冬の体験教室

第一回 「和とじでオリジナルノートを作ろう!」

期日 令和五年一月七日

第二回 「どうぶつの土製品を作ろう!」

期日 令和五年一月九日

第三回 「とんぼ玉を作ろう!」

期日 令和五年一月十四日

第四回 「ミニ円筒はにわ作り!」

期日 令和五年一月二十一日

6 展示解説

期日 随時

講師 東北歴史博物館職員

7 多賀城跡巡り

期日 五・六・九・十月の第二・第四日曜日

講師 東北歴史博物館職員

8 民話を聞く会

期日 五月二十日・七月十五日・九月十六日

語り 多賀城民話の会・利府民話の会

9 体験イベント

(1) 「春のわくわく体験見本市二〇二二」

期日 六月十八日

(2) 「秋のゝ見ゝ覚まるかじり博物館二〇二二」

期日 十月八日

(3) 「冬も元気にはくぶつかん!二〇二三」

期日 令和五年二月十一日

10 調査研究

歴史・文化に関する分野を対象とし、東北全体を視野に入れた調査研究活動を展開して、その成果を定期的に公開した。

三 (公財) 宮城県文化振興財団

(平成四年十月一日設立 理事長 青木 直之)

1 文化芸術に係る鑑賞及び参加の機会の提供並びに情報の発信

(1) 鑑賞機会の提供

イ 東京エレクトロンホール宮城における鑑賞及び参加の機会の提供

① 第九回 定禅寺フォトコンテスト展

期 日 十二月十二日～十八日

会 場 東京エレクトロンホール宮城 五階展示室

内 容 宮城県文化振興財団賞「笑顔の再会」

小松 浩

宮城県芸術協会賞「独り舞台」丹治郁夫

全百五十六点

ロ 地域文化会館との共催事業

① まほろばお好み演芸会「魅知国たいわ寄席」

期 日 六月二十五日

会 場 大和町ふれあい文化創造センター

演 目 落語、マジックほか

出 演 六華亭遊花(東北弁落語)、ブラボー中谷(マジック)、林家花(紙切り)、ニードル(漫才)

②

七ヶ浜国際村三十周年記念公演 仲道郁代スペシャルコンサート～郷古廉・佐藤晴真を迎えて～

期 日 九月四日

会 場 七ヶ浜国際村ホール

演 目 ハイドン ピアノ三重奏曲第25番ト長調

「ジプシー・トリオ」Fob.XV.25ほか

出 演 仲道郁代(ピアノ)、郷古廉(バイオリン)、

佐藤晴真(チェロ)

③

シエナ・ウインド・オーケストラ

期 日 十月二十三日

会 場 えぞこホール 大ホール

曲 目 スター・ウォーズ メイン・タイトル、「白雪姫」より、口笛吹いて働こう、ほか

出 演 青島広志(指揮)、シエナ・ウインド・オー

ケストラ(演奏)

④

名取市文化会館開館二十五周年

東混ゾリステン(東京混声合唱団メンバー8名による)

期 日 十一月五日

会 場 名取市文化会館

曲 目 日本の唱歌より「ちいさい秋みつけた」、

“ベートルズナンバー”Let it be”ほか

出演 松崎ささら・大沢 結衣（ソプラノ）、

尾崎かをり・小林 音葉（アルト）、

千葉 弘樹・平野太一朗（テノール）、

佐々木武彦・下西 祐斗（バス）、

北野 悠美（ピアノ）

(2) 参加する機会の提供

① みやぎアートファミリアの日

（子どもが主役のワークショップ）

期 日 九月二十五日、十月九日、二十九日

会 場 東京エレクトロンホール宮城 会議室棟

講 師 相原真也、後藤のり子、佐野美里

対 象 幼児から大人まで

(3) 文化芸術に係る情報の収集及び提供

① ホームページの管理運営

ホームページ等を活用し、県民に文化施設、文化団体の状況及びその催事等の情報を提供した。

(4) 文化芸術活動に係る人材の育成及び体験機会の提供

① 文化芸術ボランティア育成事業

福島県沖地震の被害により鑑賞事業が実施できない

ため、参加予定者にボランティアの業務内容について改めて周知するとともに、翌年度から再開する主催事業の説明と身体障害者に対する接遇研修を行った。

② 芸術銀河アウトリーチ市町村事業

期 日 十月三日（令和五年三月七日）

会 場 県内小中学校ほか

講 師 中川賢一（ピアノ）、村上敏明（テノール）、

山形交響楽団 弦楽三重奏ほか

内 容 生の芸術に触れる機会が少ない児童・生徒に、鑑賞の機会を提供するいわゆる「アウトリーチ活動」として実施したものである。

③ 芸術銀河アウトリーチ普及事業

期 日 十一月二十四日（令和五年三月二日）

会 場 県内小中学校及び福祉施設十五ヶ所

講 師 仙台チエンバーアンサンブル、ドラム

カフエジャパン、マリンピア ほか

④ ジュニアジャズミーティング in みやぎ二〇二二

期 日 九月十一日

会場 仙台市西公園お花見広場

出演 石巻ジュニアジャズオーケストラ「スウィ

ング・リバティ・パイレーツ」、気仙沼ジュ

ニアジャズオーケストラ「スウィング・ド

ルフィンズ」ほか

(5) 文化芸術の振興及び支援

① 第四十六回東北現代工芸美術展

(六月十日～十五日) せんだいメディアテーク 現代工芸

美術家協会東北会と共催)

② 第五十回宮城県おかあさん合唱祭

(七月十八日) 日立システムズホール仙台 宮城県おかあ

さん合唱連盟と共催)

③ 第七十四回全日本合唱コンクール宮城県大会

(八月二十八日) 名取市文化会館 宮城県合唱連盟と共催)

④ 二〇二二仙台オペラ協会第四十六回公演

「コジ・ファン・トゥッテ」

(九月十八日、十九日) 日立システムズホール仙台 仙台

オペラ協会と共催)

⑤ 第二十五回みやぎ県民文化祭

(十一月二十六日～二十七日) はまなすの館、本吉総合

体育館 宮城県文化協会連絡協議会と共催)

⑥ 第五十九回宮城県芸術祭

(七月九日～三月二十六日) せんだいメディアテークほ

か 宮城県芸術協会と共催)

⑦ 第三回杜のみやこ工芸展

(十一月九日～十三日) T F U ギャラリーミニモリ 河北

文化事業団と共催)

⑧ 第六十八回松島芭蕉祭並びに全国俳句大会

(十一月十三日) 松島町瑞巖寺本堂ほか 宮城県俳句協会

と共催)

⑨ 令和四年度宮城県写真展

(十一月二十二日～二十七日) 宮城県美術館県民ギャラ

リー 宮城県写真連盟と共催)

(6) 文化芸術活動支援事業

① 文化団体等支援事業 十件(上期五件、下期五件)

② 文化団体等人材育成支援事業 七件(下期七件)

③ 文化団体等地域連携支援事業 二件(上期二件)

④ 文化団体等震災復興支援事業 一件(下期一件)

⑤ 名義後援事業

(7) 東京エレクトロンホール宮城管理運営業務

① 会館全体の管理運営。施設の使用許可申請の許可並

②

びに利用料金の徴収・収納 ほか

(公社) 全国公立文化施設協会、同東北支部、宮城県
公立文化施設協議会に関する業務

四 (公財) 慶長遣欧使節船協会

(平成四年一月二十二日設立) 代表理事 一力 雅彦

1 ミュージアム管理事業

宮城県から受託するミュージアムの維持管理のためのメンテナンス、来館者の確保などの管理運営のほか、資料展示などに当たっては、法人の所有する展示物や学芸員等による研究成果の有効活用に努め、博物館相当施設としての機能充実を図った。

2 復元船管理事業

老朽化に直面していた復元船については、令和四年七月末に解体工事が終了した。

3 企画事業

展示等リニユーアル工事に伴い、令和四年十一月一日より長期休館となることから、休館前に幅広い世代の来館者に満足していただけるよう、「企画展示事業」「船舶文化事業」「誘客事業」等の企画事業の充実に努めたほか、休館後も関係団体と積極的に連帯を図りながら、出張展示や出張講座など各種企画事業を積極的に開催した。

(1) 復元船サン・ファン・バウティスタ 解体廃材の配布

期 間 六月四日、五日

会 場 サン・ファン館 ドック棟東ウイング

内 容 解体中の復元船の廃材を期間限定で希望者に配布した。

(2) 第三回「サン・ファン号を未来へつなぐコンクール」

期 間 六月下旬～十月三十一日

会 場 サン・ファン館 展望棟無料スペース

内 容 宮城県内の小中学生を対象に「絵画部門」「デザインマーク部門」の二部門からそれぞれのテーマに沿った作品を募集し、全応募作品百五十一点を展示した。

(3) 令和四年度企画展「帆船と航海」

期 間 七月十五日～十月三十一日

会 場 サン・ファン館 企画展示室

内 容 ミュージアムがリニユーアルのため一区切りを迎えるにあたり、館の原点に立ち返る企画として、帆船がなぜつくられ、どのようにしてたびだち、そして何をもたらすのかについて紹介するための企画展を開催した。

(4) サン・ファン歴史講座『サン・ファン号出帆の世界的前提―「戦国日本」から「帝国日本」へ―』

期 日 第一回 七月十六日

「織田信長と大航海時代」

第二回 八月二十七日

「豊臣秀吉のバテレン追放令と朝鮮出兵」

第三回 九月二十四日

「徳川家康の外交と政宗の登場」

会 場 サン・ファン館 セミナールーム

内 容 サン・ファン館の平川新館長を講師に世界史を中心とした三つのテーマをもとに歴史の楽しさ、奥深さを伝える歴史講座を開催した。

また、後日、講座の動画を当館公式YouTubeチャンネルにアップロードし公開を行った。

(5) 第二十九回サン・ファン祭り(共催事業)

期 間 十月二十三日

会 場 石巻市サン・ファン・パウティスタパーク、

サン・ファン館

内 容 復元船の進水を祝い、地域活性化を目指す目的で例年五月下旬に開催していたが、新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、秋季に延期し、今年度は三年ぶりに石巻市サン・ファン・パークおよび館内でイベントを開催した。

(6) 令和四年度宮城県慶長使節船ミュージアム シンポジ

ウム「未来への航海―新しいサン・ファン館に期待するもの―」

期 間 十月二十九日

会 場 サン・ファン館セミナールーム

内 容 「新しいサン・ファン館に期待するもの」について博物館・観光・教育など様々な視点から話し合うシンポジウムを開催した。

(7) 牡鹿半島ビクターセンター コーナー展「牡鹿半島・

海と浜の続トリビア10 (TEN) : in 鮎川」

期 日 十一月十二日(令和五年三月三十一日

会 場 牡鹿半島ビクターセンター

内 容 牡鹿半島ビクターセンターが主催する、金華山を中心とした牡鹿半島の民俗や文化を紹介したコーナー展に資料提供などの協力を行った。

(8) 出張展示「とびだせサン・ファン」第三回サン・ファ

ン号を未来へつなぐコンクール応募作品展 in マルホンまきあーとテラス

期 日 十二月十三日(二十七日

会 場 マルホンまきあーとテラス市民ギャラリー

内 容 十月にサン・ファン館で開催した「第三回サ

(9)

ン・ファン号を未来へつなぐコンクール応募
作品展」の展示を別会場にて行つた。

出張展示「とびだせサン・ファン！」ミニ企画展

「サン・ファン号がめざした世界」

期 間 令和五年一月十七日～二月十二日

会 場 石巻市博物館 常設展示室

内 容 慶長使節船が出帆した当時の世界状況と慶長
使節派遣の関わりなどを紹介するミニ企画展
を行った。

(10)

冬季出張講座「どうする政宗―サン・ファン・パウティ
スタという船名でいいの?―」

期 間 令和五年二月二十五日、三月四日

会 場 マルホンまきあーとテラス 大研修室

東北福祉大学 仙台駅東口キャンパス五十一

教室

内 容 サン・ファン館の平川新館長を講師にスベイ

ン語で「サン・ファン・パウティスタ号」(洗
礼者聖ヨハネ号)と名付けられた船名の謎を
解くとともに、「サン・ファン・パウティスタ
号」の呼び名について歴史背景を読み解きな
がら問題提起する講演会を二つの会場で開催
した。

令和四年度 芸術選奨

●美術（洋画）



森^{もり}
眞澄^{ますみ}さん

昭和二十四年生まれ。

大学卒業後、一貫して抽象画を手掛け、これまで河北美術展や宮城県芸術祭で入賞を重ねるほか、新現美術協会展等に精力的に作品を発表してきた。

旅をしながらその土地の歴史や風土から着想を得た作品を多く制作しており、色彩豊かでエネルギーが強い作品が高い評価を得ている画家である。

令和三年度に東京都美術館で開催されたモダンアート展では、記憶が薄れていくこれまでの旅の経験と自身の心境を表現した作品「忘れそうな場」を出品したほか、宮城県芸術祭や新現美術協会展にも継続的に出品した。

作品制作を続ける傍ら、長年の間、宮城県芸術協会運営委員としても活動しており、その企画力や豊かな発想により県内の芸術教育活動にこれからも大きな影響を与えることが期待される画家である。

●文芸



秋^{あき}
亜綺羅^{あきら}さん

昭和二十六年生まれ。

学生時代よりその才能を寺山修司に見いだされ、文芸誌に詩作が掲載されるなど早くから注目されてきた。長年の間、朗読による文芸表現を展開し、詩作に留まらない幅広い領域で活動する詩人である。平成二十四年に刊行した第二詩集「透明海岸から鳥の島まで」で、第二十二回丸山豊記念現代詩賞を受賞。令和元年にあきは詩書工房を設立し、翌年にこれまで発行を続けていた季刊個人誌をリニューアルした月刊雑誌「ココア共和国」を創刊。投稿詩を対象とした三種類の公募賞を創設し、インターネット世代の若者からも強く支持されている。

令和三年度は詩集「十二歳の少年は十七歳になった」を刊行し、日常や現実との関わりを自在に切り取る言葉の柔軟性や抑制の利いた抒情性が、高く評価された。

これからのしなやかな言葉と新鮮な切り口を持ちながら、多方面での活躍により、詩が持つ可能性を拡大する挑戦が期待される。

●文芸



いざわ
石沢
まい
麻依さん

昭和五十五年生まれ。

ドイツ在住。震災を題材に執筆した「貝に続く場所にて」で、令和三年五月に第六十四回群像新人文芸賞、七月に第百六十五回芥川龍之介賞を受賞した。豊かな比喩を持つ修辭的な文体により、過去と現在、現実と幻想を行き交う文芸表現は文壇でも高い評価を得ている。同作を発表後に始まった河北新報での連載「記憶の素描」が好評を博しているほか、エッセイ「きなり雪の書」（令和三年八月）、「ドストエフスキーの月と蛾」（同十一月）などを次々に発表し、精力的に執筆活動を継続している。令和四年四月には第二作「月の三相」を発表した。

大学での研究が今後の創作活動においても大きな強みとなることが期待され、その成果は「貝に続く場所にて」で試みられた独自の世界観を描き出す表現力に活かされていくと思われる。現役で活躍する若手小説家のロールモデルとして、後進の作家たちに大きな影響を与える作家に成長していくことを期待したい。

●演劇



まつざき
松崎
たろう
太郎さん

昭和四十年生まれ。

地元仙台に密着し、「十月劇場」等での活動を通じて、アンクラ劇を中心に客席と一体となることを意識した濃密な演劇を展開してきた、既成のメソッドに捉われない変幻自在な演技で観客を魅了する俳優である。また、同時に舞台照明家としての顔を持ち、その演出意図と演技に敏感な照明設計は、「演技のわかる照明」として、高校生から中堅の劇団まで様々な舞台で強く支持されている。俳優と照明の双方に造詣が深い貴重な経験を生かし、後進の育成にも尽力している。

令和三年度は、俳優として「スウィング・アウト・ペアレンツ」（八月）や「あらわれるげきじょう」（十一月）等に出演し、舞台照明家としては日英共同制作舞台「炎・Hound」など多数の演劇公演を裏方として支えた。

これからも俳優として出演を重ね、演劇の魅力を伝えるとともに、照明の技術や感覚を多くの人に広めることが期待される。

芸術選奨新人賞

●美術（日本画）



酒井 美雪さん
さかい みゆき

昭和三十年生まれ。

平成二十六年の河北美術展で新人奨励賞を受賞して以降、河北美術展をはじめとして、塩竈市美術展や新日春展で入賞し、優秀な成績を収めてきた。平成二十七年の河北美術展の出品作「時の水音」では、水から想起される時の流れや命の循環をテーマに自身の記憶を織り交ぜた作品で同展の河北賞を受賞した。

令和三年度は「夜明けの仔」を発表し、塩竈市美術展において確かな視点と独自性のある印象的な作品として高く評価され、塩竈市教育委員会教育長賞を受賞した。

精力的に創作活動が続ける傍ら、大学卒業以後長年にわたり子供たちを対象とした絵画教室を運営し、後進の育成に大きく貢献するなど、今後も県内の日本画の発展に大いに寄与することが期待される作家である。

●芸術（彫刻）



佐々 瞬さん
ささ とき

昭和六十一年生まれ。

大学在学時より作品発表を行い、戦争の記憶や土地の歴史などをテーマにフィールドワーク、映像、写真、彫刻、パフォーマンス、ドローイングなど、様々なメディアを複合的に扱う美術家である。その斬新なアプローチによるインスタレーション表現により、全国的に注目を集めてきた。近年仙台に戻り、地元根ざした土地の歴史や震災を掘り下げた表現活動を、局地的で具体的な土地を舞台に展開している。

令和三年度に仙台メディアアテークで開催された企画展「ナラティブの修復」では、公園整備のため住民が転出した地域を対象に、土地に対する人の記憶や愛着を想起させる作品を展開し、高い評価を得た。

柔軟な視点と豊かなイメージーション、スケールの大きい横断的なバイタリティを背景に、地元の問題を広く開き、グローバル／ローカルの垣根を揺るがす作品を今後も生み出すことが期待される。

●芸術（写真）



かんのさゆりさん

二〇〇〇年代の早い時期から、デジタルカメラを使用した写真作品を制作している。「デジタル時代のリアリティ」を追及した作品により、第二十二回（平成十六年）及び第二十七回（平成十八年）の写真ひとつば展に入選。これらの作品では、都市と人間・空間に意識が向けられ、都市空間の奇妙さとそこに生きる人々を対象にした作品を継続的に発表してきた。令和三年度には塩竈市杉村惇美術館主催の「若手アーティスト支援プログラム Voyage」に選出され、企画展を成功させた。

令和三年度、GALVANIZEgalerie（石巻市）で発表した「New Standard Landscape」では、震災後に建てられた郊外の新築住宅や移転した宅地の戸建住宅に視線を向け、その空間の意味を解体し、再構築した確かな視線が高く評価された。

強固な熱意と明確な意識のもとにそこに立ち、これからも時代を鋭く捉え世界をイメージ化し続けていくことが期待される写真家である。

●音楽



小野
あやこ
綾子さん

昭和五十七年生まれ。

平成三十年にヴィンチ国際バロックコンクール・ソロ部門及びアンサンブル部門にて一位受賞するなど国際的に活躍している古楽ソプラノ歌手である。

ミラノ国際博覧会、芸術音楽祭、ローマ・バロックフェスティバル等でソプラノソリストを務めるほか、ミラノ大聖堂をはじめとしたイタリア各地の教会でソリスト、アンサンブルを務める。また、自身が卒業したイタリア・ミラノ市立音楽院出身の三人の音楽家で結成した古楽アンサンブル「イル・メルロ」の主宰として、十六世紀から十八世紀のイタリア音楽を中心に県内外で幅広く公演を重ねている。

令和三年度は、個人として四月にハーブ奏者と、八月にチェンバロ奏者とのリサイタル公演を行ったほか、十月にはイル・メルロとしてプロデュースした「輝かしい十七世紀ボローニャの音楽」で日本を代表する古楽の歌手十六名による共演を成功させた。

海外での活動と幅広い人脈を糧にし、インターナショナルな古楽ソプラノ歌手として、より一層幅広い取り組みが期待される声楽家である。

● 舞踊



阿部
裕恵さん

平成七年生まれ。

四歳でバレエを始め、バレエ専門誌に取り上げられるなど早くからその才能は認められてきた。ジュニアコンクールで入賞を重ね、高校卒業後、新国立劇場バレエ研修所を経て、平成二十八年より牧阿佐美バレエ団に在籍。翌年には「ドン・キホーテ」で主役のキトリを演じるなど、着実にキャリアを重ねた。また、平成二十九年のオンステージ新聞にて「舞踊評論家が選ぶ二〇一七年新人ベスト」に選出された。

令和三年六月には「リーズの結婚」ラ・フィニーユ・マル・ガルデーでリーズ役を、八月には「白鳥の湖」でオデット・オディール役を務め、好評を博した。これまでの功績が認められ、令和四年には優れた業績を上げている若手芸術家へ贈られる中川鋭之助賞を受賞した。

公演を重ねながらも生まれ育った教室での発表会に参加し、地元を大切にする姿勢が評価されている。今後とも一層魅力的な舞踊家として成長すると同時に、親しみやすい舞台やワークショッップを開催し、クラシックバレエの普及に貢献していくことが期待される。

● メディア芸術



スズキスズヒロさん

平成四年生まれ。

平成二十八年に短編作品「TRAINSPOTTING」でデビュー。とにかく懐かしい画風と温かみのある作品を描く漫画家である。令和二年度には仙台文学館の企画展「作家・編集者 佐左木俊郎 農村と都市 昭和モダンの中で」でイラストを担当し、その後、歌人の俵万智の原作を漫画化した「あつてなくなる」(俵万智×スズキスズヒロ)を発表するなど、デビューから短期間の間に活躍の場を広げてきた。

令和三年度はこれまで書き上げた六編を収録した作品集「空飛ぶくじら スズキスズヒロ作品集」が「人と人が紡ぎ出す忘れられない人生の一ページを書き出している」と高く評価され、第二十四回文化庁メディア芸術祭マンガ部門新人賞を受賞した。また、子育てをする父親を対象に発行された石巻市父子手帖に漫画を寄稿し、その親しみやすい画風は子育てにおける様々なシーンをイメージしやすいなど好評を博した。

仙台在住で活動を続けており、地元の文化事業やメディアでの活躍も期待される漫画家である。

宮城県芸術年鑑

第五十二卷

令和五年四月一日発行

限定五二〇部

編集・発行

宮城県環境生活部消費生活・文化課

仙台市青葉区本町三丁目八番一号

〒九八〇―八五七〇

電話 〇二二―二二二―二五二七(直通)

この芸術年鑑は五二〇部作成し、一部当たりの印刷単価は一、〇三四円です。